
北朝鮮君と日本ちゃん

名無しの好事家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北朝鮮君と日本ちゃん

【Nコード】

N1406P

【作者名】

名無しの好事家

【あらすじ】

北朝鮮と日本とその他がくりひろげるギャグ？ 日本がにやた化注意！しかし腐向けではありません。実際の軍、国、その他諸々の現実世界のあらゆることと関係ありません。ないったらないんです！

……いや腐向けか？いちおう、BLはありません。

いきなりですか？（前書き）

この小説は日本がにやりあってます&北朝鮮君を出してしまった
妄想小説です。

苦手な方はお戻りください・・・。

いきなりですか？

第一話 「出会いからいきなり?!」

「紹介するんだぜ！俺の家にいる北朝鮮だぜ！」

北朝鮮と紹介された子は栗色のロングヘアの可愛い女の子でした。

「はじめまして、北朝鮮です。」

外見に似合わず低めのハスキーな声です。

日本は少し驚きましたが、すぐに笑顔で挨拶しました。

「はじめまして。日本です。よろしくお願いします。」

その瞬間。

時間が止まった感じがしました（北朝鮮の周りだけで）

「どうされましたか？」

北朝鮮がいきなり止まってしまったので心配になり、日本は訊きました。

「すっ」

「す？」

「好きだあああああ！！」

「はいいいいい？？」

いきなりの告白です。日本は面食らってしまい気が動転します。

「お．．．女の子と同士では．．．無無無無理だと．．．」

そこで固まっていた韓国は呆けたように口を開きました。

いきなりですか？（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

それは強引すぎ(前書き)

2話目です。

ました・・・。

韓国にも日本にも可哀想なことをし

んよ・・・。

ごめ

それは強引すぎ

第2話「強引すぎ?!」

少し時間が立つと日本は落ち着いてきました。

北朝鮮は、要するに女装が好きな人らしいです。

まあ、それは日本にとっては大切なことはありません。

さつきから北朝鮮が、

「好きだ。結婚してくれ」

「お前ちよつと待つんだぜ！いきなりとか駄目なんだぜ！そんなこと許したら俺が
あいつらに殺られるんだぜ！」

「・・・結婚してくれ。」

「無視するなだぜ！！」

というやり取りを繰り返しています。日本抜きで。

いいかげん日本も何か言いたくなってきました。

「あの・・・結婚は無理ですし、初めて会ったのにそれは早急じゃあないですか？」

北朝鮮はしばらく考えた後、こう言いました。

「……無理か？」

「当たり前です！！！！」

間髪いれず返されました。

そして、またしばらく考えた後言いました。

「なら家に連れて行く。」

「え？」

問い返したときにはもう鳩尾に北朝鮮の拳が入っています。

「うう．．」

呻きながら日本は床に崩れ落ちました。

途切れ行く意識の中で最後に思ったことは、

（明日G8会議があるのに困りました．．．どうすれば．．．）

そこで意識が無くなりました。

「ちょ・・・おま・・・日本に何するんだぜ!!」

韓国が北朝鮮を止めますが、

「うるさい」

「ぶい!」
「おおおお」

やっぱり頼りにならないのですた。

それは強引すぎ(後書き)

次はいよいよあの人たちです。

によた化はしていません(念のため)

ぐだぐだ救出作戦その一

第三話本当に大丈夫か？

「おかしい……」

イギリスが呟きました。

「どう考えてもおかしいぞ！」

アメリカも言います。

それもそのはず。いつも早くに来ている日本が来ないのです。

今日はG8会議です。

大事な会議の時に日本が遅れたことはありません。

これは何か異常事態が起こっているかも・・・。

そうつゆう思いが強くなってきました。

「これは迎えに行った方がいいんじゃないかな？」

ロシアが言ったそのときです。

「大変ある！！！」

「大変なんだぜ！！」

会議室のドアが勢いよく開かれ、中国と韓国がもつれあいながら入ってきました。

「お前ら・・・どうしたんだ？」

イギリスが驚きながら訊きます。

「詳しい事情は説明している暇は無いある！日本が北朝鮮に拉致されたある！」

「俺らだけじゃあいつの家は危ないんだぜ！お前たちも来るんだぜ！」

一同は突拍子もない話に目が点になりました。

「え・・・それはどうゆうことかい？エイプリルフールは今日じゃないぞ？」

「ぐずぐずしている暇はないある！さっさと行くよろし！」

中国と韓国が出て行ってしまったので、

「どっする？」

「まあ日本が来ていないのは心配だな。ついて行くっぜ。」

と言うことで、アメリカ達も後を追うことにしました。

ぐだぐだ救出作戦その一（後書き）

次から本格的に救出作戦を始めます。

こんなぐだぐだで日本を救出できるのか?!

ぐだぐだ救出作戦その二

第四話「やはり心配」

「てゆうかさ」

おもむろにイギリスが切り出しました。

「誰か忘れてる気がしたんだが・・・」

「まさか！！君の妄想だろ？」

「・・・うーん・・・？」

イギリスは釈然としないままこの話題はお流れとなりました。

く G 8 会議場く

「わああああ！すいませんすごいことが起こって遅れま・・・あれ？」

やはり忘れられるカナダさんなのです。

「ダレダ？」

「カナダだよ！」

〈北朝鮮〉

暗く湿った地下。

どうやら牢のようなところみたいです。

「もうやめてくださいー!!」

そこに響く悲鳴。

その後激しく抵抗する人影。

「あ、今日本がピンチな気がするある。」

見ると中国の三つ編みがぴくぴくいつています。

「妖怪センサーかよ！」

そこにイギリスの突っ込みが入ります。

なぜイギリスがああ某妖怪漫画を知っているのかは疑問ですが、まあいいでしょう。

「まだ着かないのかな…………。」

ロシアが言いました。

それに対し韓国は、

「え？もう着いてるんだぜ！」

見ると、いつのまにか目の前に洋館？みたいな所に来ていました。

「ここが・・・」

「北朝鮮の家か・・・」

「でかいな・・・」

感想を皆口々に言います。

「まあ取りあえず中に入るか・・・」

フランスが入ろうとすると、中国が止めました。

「お前ら待つよろし！北朝鮮のことで一つ言っことがあるあるよ！」

そうして中国が切り出した言葉は・・・

「あいつは女装趣味者ある！」

すぐくどうでもいいことでした。

「どうでもいいわ！」

「いやお兄さんにとっては重要内容だな・・・北朝鮮君いいかもな・・・ハアハア・・・」

「黙れ変態。」

何はともあれ北朝鮮の家まで着いた一行でした。

ぐだぐだ救出作戦その二（後書き）

次回予告

フランス、覚醒。

イギリス、出血多量につき暴走。

嘘ですいません。

ぐだぐだ救出作戦その三（前書き）

「そういえばさ、」

「ん？」

「ドイツとイタリアはどうした？会話に参加していないみたいなんだが・・・」

「ああ、それならそこに・・・」

「ワァー君可愛いねー。一緒にお茶しない？」

「イタリア！！女の子を誑かすな！」

「ピッツアのお店だー！ピッツア~~~~」

「こら！今は日本のことが大切だろ！！行くぞ！」

「君、そのリボン可愛いなあ〜一緒に・・・」

「イーーーーターーーーリーーーーアーーーー!!」

「……ドイツも大変なんだな……。」

「そういうことだ。」

ぐだぐだ救出作戦その三

第五話「ついに・・・」

ついに北朝鮮の家まで着いた一行でしたが・・・

「ちょっと入りにくいな・・・」

「まっただ。」

なにしろ、北朝鮮の家の周りは柵で囲んであり、門は開けられませんが、

よく見ると細い糸で電気が通されています。

「じゃあ、あの時中に入っていたら・・・」

「そうゆうことある。」

黒こげになった自分の姿を想像しているのでしょうか、フランスは顔面蒼白にして、震えています。

「どうすればいいんだ？」

やっとイタリアの世話から開放されたドイツが訊きました。

「いつもはインターホンを押せば出てくるはずなんだぜ・・・」

そう言いながら押そうとします。

それを中国が止めました。

「待つある！お前そんな感じで出てくると思っているあるか？！」

「あいつ結構単純だからたぶん出てくると思っただぜ。」

ぴんぽーん。

「はいー新聞はお断りですー。」

「ほんとに出たああああ！？」

「俺なんだぜ！」

「……すいませんがそのような知り合いは俺にはいませんガ
チャッ

「え……つちよ……あああああ！！待て待て待つんだぜ！あああ
あ……」

「……役立たずがつ」

イギリスが吐き捨てました。

そこでロシアが言いました。

「えっと……僕やってみるね」

ドイツはその笑顔に薄ら寒いものを感じましたが、とりあえず許可を出します。

まずおもむろにロシアが取り出したものは……

「・・・水道管？」

水道管（魔法のステッキとも）でした。

そして・・・

「せーの」

鈍い音がし、気がつくと電気が通された糸は、断ち切られていました。

「これでいいよね」

「ちょ・・・おまっなにやった!？」

「ウフフフ」

ロシアの魔法のステッキ（鈍器）のお陰で北朝鮮の家へ入れた一行でしたが・・・

「どこにいるかだよな……」

そつ、どこにいるか検討がつかないのです。

「地下室とか知らないか？」

期待はせず韓国に訊きます。

「知らないぜ！」

予想道理の反応でしたので、大して落胆せず一行は足を進めました。

と、

「あいたああああああ！！」

突然中国がずっこけました。

それでは終わらず更に床が陥没したのです。

「いったいある？」

中国は半泣きで呻いていると、あるものを発見しました。

「階段？」

それは階段でした。床が陥没したところが隠し階段だったようです。

「とりあえず・・・」

「行くかつ」

そうして一行は地下室へと歩を進めました。

ぐだぐだ救出作戦その三（後書き）

前の話で中国の三つ編みが揺れる描写をしたんですが、実際には三つ編みは中国

にはありません。

完全なよしおかの趣味です。

ぐだぐだ救出作戦その四

第六話「・・・これが萌えってやつか・・・」

カツと足音が小気味よく響きます。

「さすが地下・・・」

アメリカが感嘆しました。

「まさか蝙蝠が襲ってくるとはね・・・」

「あ、ちょ、中国上！」

「え・・・ひiiiiiii?！なんで我に寄ってくるあるかぁー?!」

「ドイツウゝ助けてゝ蝙蝠が襲ってくるんだよゝ」

「だぁぁぁぁ!待ってくれ、俺も何処からか降ってくる雨を避けるのに急がし・・・冷たっぁ・・・」

とまあ、こんな様子でした。

体には自信があるドイツでさえそうなんですから、日本はどうなんでしょう？

「・・・こんなことしてる場合じゃない。早く日本を助けなければ・
」

「そうあるな・・・」

「早くしないと大変なことになるんだぜ！」

日本は女の上、か弱そうです。

こんなところに長時間放置されたらどうなることやら・・・。

「早く探そうぜ。」

それから30分ほど探し回ったあとでした。

結構地下室は広いです。

その奥でしょうか、牢？みたいなのをロシアが発見しました。

「ねえー。なんか牢みたいなのがあつてその奥に・・・あつ」

また何か発見したようです。

「・・・黒い・・・布・・・を被った人・・・？」

「なんだ？」

全員集まったところで改めて牢？を見ました。

「これは・・・人だな。」

ドイツが断言します。

イギリスが声を取りあえずかけてみました。

「おーい、日本か？」

すると慌てたように返答が返ってきます。

「わわわ私は日本なんかじゃありません！絶対絶対絶対日本なんかじゃありません！！」

「日本だな・・・」

フランスが呆れたように言いました。

「なんで隠すんだよ？」

イギリスが訊きます。

「こんな姿・・・とても皆さんには・・・っ」

半泣きの声が返ってきました。

そのときドイツがはつとしたように訊きました。

「日本・・・北朝鮮になにかされたのか？」

「されたどころか・・・。」

悔しげな声が返ってきました。

「北朝鮮・・・もしや日本に手を・・・」

その瞬間、殺気が辺りにザッと広がります。

「へえ・・・」

「手、出したんだ・・・俺でさえも出してないのに・・・」

「まあ、私刑は確実だな。」

「コルコルコルコル・・・シベリア・・・ブツブツ・・・」

「地獄に堕ちればいいのに。」

皆の中で北朝鮮の私刑が確定した時です。

「ちょっと待て！！あらぬ疑いをかけられて死ぬのは嫌だ！！」

張本人の北朝鮮が出てきました。

「日本も誤解を生むようなこと言っな！！俺がしたのはこれだけだよ！」

「あ・・・」

そういつて日本の黒布を剥ぎ取りました。

そこにあらわれたのは・・・

両手に手錠を架けられ、服はミニスカの、胸元が大きくあいたワンピース、髪にはリボン、所謂・・・

「萌えだな・・・」

フランスが眩きました。

日本はそんな格好をさせられていたのです。

ぐだぐだ救出作戦その四（後書き）

誤解がありそうなのでゆっときます。

18禁はありません。

ぐだぐだ救出作戦その五

第七話「グッチョブ北朝鮮」

フランスではありません。

その場にいる全員が「萌え」という感情を抱いていました。

「な？な？ たったこれだけだろ？」

北朝鮮が少し誇らしげに言います。

しかし、たったこれだけと北朝鮮がいうことでも日本には我慢できません。

コスプレなどを自分の意思で着るのはいいですが、他人に着せられた（色々あり）ということと、

それをG8？の皆に見られたと言うことが酷く嫌なのです。

「かくなる上は切腹……」

本気でそう思案し始めたので、皆は止めます。

「わーほんとに北朝鮮は許せないよーお兄さんが連れ戻してあげよう（という名目でわいせつ行為）」

「お前は黙ってる！俺が取り返す！ベ・・・べつに日本が欲しいわけじゃ・・・（ツンデレ）」

「いや我が家に帰るついでに送るある！（写真撮りたいあるー！写真ー！）」

変態たちが本音を一応隠しながら日本をお持ち帰りしようとしてると・・・

「いや、俺の家で一生一緒に暮らすし。」

「なっ・・・」

「時々呼んで、コスプレ、みしてやるから。」

「……………」(ちょっといいかな……)」

そこで困るのは日本です。

「ちょっと待ってください！困ります！国民の皆さんのことありますし……。」

しかし、そういつても皆は動こうとしません。

ちょっと北朝鮮の意見に傾きかけているのです。

ドイツさえもそうなんですから、他は云わずもかな。

そこで、

「そうですか……」

日本の、

「それならば……」

堪忍袋が切れる音がしました。

「自分で出ます！」

まず、自分を縛めていた手錠を引き千切りました。

「ひっ？」

その次に華麗な身のこなしで北朝鮮に手刀を叩き込みます。

「ぐほっ・・・・・・・・。」

さらに檻を、北朝鮮から奪った刀で目にも留まらず切り捨てました。

言い忘れていましたが昔、生存率2%の硫黄島の戦いときです。

そこに配属された日本は1人で何千という敵を倒しました。

つまり、かなり強いのです。

檻からでた日本は、皆ににこりと笑いかけ、

「助けに来てくださり有難うございます。では、家に帰りますね。」

そう言って出て行きました。

残された人たちは、

「日本の格好写真に撮ったか？」

「ばっちりある！」

やっぱりそんな人たちでした。

完。

ぐだぐだ救出作戦その五（後書き）

救出編やっとなりました。

ここまでつきあってくださりありがとうございます！

昔は男でしたその1（前書き）

日本は島国の上、小さいです。

そこで当時の上司がなめられたらイカンから男装しろといわれ、

以来日本はどんな国にも男装を通していました（中国とか以外）

まあ、G8にはいろいろありましたが。

今回はそのときのエピソードです。

昔は男でしたその1

第八話「ロシアさんの場合。」

「そつえばさ、」

イギリスが切り出しました。

今日は色々あり、延期になっていたG8会議を開く日です。

今回は全員そろっています（カナダさんもいます）。

「北朝鮮には男装しなかったんだな。」

「ええ、どうせ私が女だってことは韓国さんの口から聞いているでしょうし。」

韓国に何か知られると35秒後にはバラされています。

「でも日本が男装していた頃は全然気づかなかったな。」

アメリカが言いました。

「しかもバレ方が・・・。」

日本が顔を赤くさせながら呟きます。

「ん？ばれ方？そんなのww2後に・・・。」

「いやゝそうじゃなくて実は知っていたんだよゝ女ってことをね。」

「はああ?!」

「僕もだよ。」

驚いたことにロシアも言いました。

「なんだ?!初耳だよ!!聞かせろ!!」

「えっとね・・・。」

そしてロシアが日本置き去りで話を始めました。

〈日露戦争〉

日本軍は沢山の犠牲をだしながらも、順調に勝ち進んでいきます。

「うーん・・・読み間違えたな・・・。日本君は弱いと思っていたのに・・・。」

やっぱり革命があつたせいかな・・・。」

ロシアは悩んでいました。

弱いと思っていた日本が案外強く、このままでは負けるかもしれない。

そのときでした。

「日本軍がここまで・・・。」

それをきいたロシアは銃と剣を持ち、すぐ駆け出していきました。

日本軍とロシア軍の正面衝突。

最初は日本軍が優勢でしたが、だんだん押されていき、残るのは数を数える程。

「しかたないですね・・・。」

日本がこれだけは使いたくなかったというように、銃を捨て、日本刀に持ち替えました。

そして、駆けました。

ただ一人で敵陣に突っ込み、当然ロシア兵は発砲します。

しかし。

そのすべてを弾き返し、神速ともいえるような速さでロシアのもとへと辿り着きます。

ロシアは少し驚きましたが、すぐに応戦します。

刀と銃弾がぶつかり合い火花を散らせました。

「はっ」

そして日本はロシアの一瞬の隙をつき、刀を滑らします。

ここで日本の勝ちかと思われました。

しかしひとつ誤算がありました。

まだロシア兵は居た事に。

ロシアの窮地に気づいた兵は咄嗟に反応しました。そして発砲します。

「っあ・・・」

不意だったので反応できず、日本は刀を取りこぼしてしまいました。

それを好機とみたロシアはバランスを崩した日本を掴み上げます。

「っーかまえた」

これで戦争に勝てる、ついでに鬱憤をここで晴らそうとしていたロシアですが、

すでにボロボロだった日本の軍服が破れてしまいました。

しかも縦に。

「あれ？」

そのため、日本が胸に巻いているさらしが見えてしまったのです。

「わあああああああああ……！！！！！！」

戦場に絶叫が響きました。

昔は男でしたその1（後書き）

ロシアとの戦闘はとにかくここよくを目指しました。

うまく出来てたらいいなあ・・・。

と賛成したのでした。

アメリカは今日本の家の前にいます。

友達になった日本にいろいろなことを教えにきたのでした。

「おゝい、日本居るかい？」

同時刻日本は風呂に入っていました。

アメリカが来訪したことを知ると、すぐく日本は焦ります。

「ああ、どうしましょう．．ああそつだ、正直に風呂入っているから出れないと伝えましょう。」

と言うことでアメリカに告げました。

「ああわかったよ。」

「ふう．．これでゆっくり風呂に入れます．．．．．ん？」

「アメリカの処刑方法についてだ。ちなみに俺の意見は髪の毛を一本一本丁寧に抜くとかどうだ？」

「コルホーズとかシベリアとか・・・。」

「火あぶりだな。」

「一週間監禁。」

「ん？」

なんか違う声が混じっていたような・・・。

「っってお前か北朝鮮！！！！いつからいた！？」

「最初から。」

「忍者か！？」

さて、こんなのでG8会議はできるのか？！

昔は男でしたその2（後書き）

今回はテンポよくを目指してみました。

巧くできていたでしょうか？

昔は男でしたその3

第十話「いつのまにかいた」

「・・・北朝鮮さん？何しているんですか？」

日本は氷のような声で問いました。

北朝鮮はその声にもめげず、言います。

「だって暇だったんだよー。だから日本の後つけてきたらいつのまにか此処にきちゃった」

「へーえ・・・。そうですねらいますぐ出て行ってくださいお願いします」

「暇暇暇〜」。

「・・・」。

このままでは北朝鮮の身が危ない！そう思ったフランスは咄嗟に、

「そ．．．そうだ！俺たちの話を聞かないかい？」

と提案し勝手に話し始めました。

またしても日本完全無視で。

「ふう．．．ここが日本の家か．．．」

WW2が終わった少し後。

アメリカとフランスとイギリスは日本の家の前に来ています。

憲法の改正のためです。

「おい日本はいるか。」

とりあえず呼びました。

しばらくすると、

「は・・・はい・・・いま出ま・・・」

「ちょ・・・日本さんそんなボロボロな体で出てはいけません!」

「いや私も日本男児・・・これくらいの傷なんて・・・」

「何戯言言ってるんですか!とにかく私が追いつきますから!」

「いや、私が出ます!」

と言うつようなやり取りがあって日本が出てきました。

「っってお前大丈夫かー!ー!ー!」

それもそのはず。

日本の状態は片手が骨折。足は骨折。生傷たくさん。

というような状態だったのです。

「大丈夫ですから用事はなんですか？」

「じつは憲法の改正を・・・」

と、ここまで言ったところで日本の家の奥から何かが出てきました。

それは4、5歳の女の子です。

その女の子はアメリカ達を見て開口一番、

「このまゆげと長いのとあほ毛はなに？」

と訊いてきました。

「こら！そんな言い方は駄目です！この方達はフランスさんとアメリカさんとイギリスさんですよ。」

と、日本が注意します。

それに対し女の子は、

「ねーこんな変なのにかまってないで遊ぼうよーおねえちゃんー。」

そこでイギリスが反応しました。

「おねえちゃん？なんでおねえちゃんなんだ？日本は男だろ？」

その瞬間日本とアメリカの血の気が引きました。

しかし時はすでに遅く、

「なにいつてるの？おねえちゃんは女の子だよ。」

といてしまいました。

「てな感じ。お兄さんもびっくりだったよ。」

「なかなか面白かった。」

「・・・みなさん私のことはガン無視でした・・・。」

「てかもつ会議が終わる時間じゃないか！皆解散だぞ！」

アメリカの一言で会議が終わりました。

ちなみにカナダさんは、

「え？！日本君女の子だったの？！初耳だよ！！！」

「オマエダレダ？」

「カナダだよ・・・。」

新しい発見をしているにもかかわらず、存在感が無いのです。

今回もぐだぐだでした。

完。

昔は男でしたその3（後書き）

次はポーランドとかリトアニアとかスイスとかを出したいです。

お祭り騒ぎ

第十一話「お祭りです」

「ねえ、日本の家に行ってもいいかなあ？」

「ええ、いいですよ。」

始まりは些細な、イタリアが日本の家へ泊まりにくると言うものでした。

それが……

「てゆうかマジ肉まん美味いんだけど」

「もーポーは……てゆうか荷物全部日本さんに持たせてるじゃん！
！自分で持つ！」

「えゝめんどいし」

「リトアニアさん、私は大丈夫ですので……。」

「そうだ、日本。こんな変なのはほっという俺と一緒に……。」

「黙ってください。心から。」

「君かわいいね〜一緒にお茶しない〜?」

「イタリア君、ナンパをしないでください!」

なんか増えてます。

イタリアの友達のパoland、リトアニア、北朝鮮。

取りあえずこのメンバーで観光することになりました。

「ここが東大寺です。」

「てか鹿まじ可愛いと思わん?思わん?」

「も〜・・・お寺を見ようよ……。」

「……タツクルしてきた……痛い……。」

「あはくすぐったいよ。……突進してきた?! うああ痛いよ
ドイツ……。」

「大丈夫ですか?!」

「イタリアだけずるい……。」

「あなたには介抱なんて必要ありませんから。」

と、ひとつ観光するだけでもこんな調子です。

それでも時の流れは速いものです。

あつとゆう間に夜になりました。

途中でポーランドが警官と地獄の鬼ごっこをしたり、イタリアが日本に小一時間説教

されたり、北朝鮮が拉致ろうとして制裁されたりしましたが、大
体平和です。

しかし、ここで一つ問題がありました。

部屋割りです。

日本の家は広いので部屋数は足りています。

ただ、誰と誰がなるのかだけが問題だったのでした。

日本は普通に女の格好です。

日本は少し考えたあと、決めました。

部屋A・・・ポーランド&リトアニア

部屋B・・・イタリア&北朝鮮

部屋C・・・日本&ぽちくん（飼い犬）

皆これで異論はありません。

めずらしく北朝鮮も何も言いませんでした。

日本は少し不気味に思いましたが、そのまま就寝時間となりました。

北朝鮮はイタリアが寝たのを確認し、行動を起こします。

こんな好機、北朝鮮が見逃すはずなんてありません。

彼はちゃんと作戦を立てていたのです。

その作戦とは、

「日本が無防備に寝ているところを見計らって襲っちゃう」

という非常に短絡的なものです。

その作戦を決行するべく、部屋Cに行きました。

日本はぐっすり眠っています。

これはしめた、そう思った北朝鮮は寝ている日本に襲い掛かります
！！

「いただき！」

しかし、やはりそんなに現実には甘くありません。

「やはり来ましたね……………」

いつのまにか目を覚ました日本が日本刀を持ち、構えています。

北朝鮮はせめて弁解をしようと、口を開いたのですが、

「悪い子にはおしおきが必要ですね……………」

「ぐぎゃあああああああ！！！！！」

それはすぐに悲鳴へと変わったのでした。

お祭り騒ぎ（後書き）

スイスが出せなかったのが残念でした・・・。

ブラックロシア

第十二話「黒すぎる」

ある晴れた日のことです。

日本は自分の家でまったりと過ごしていました。

「はぁ……。偶にはいいですね、こつ言つのも。」

北朝鮮が来ることもなく、のんびりと……

「わああ日本助けてロシアさんそれは本当にすいませんだからその物騒なものおおおおっつ」

なるわけはありませんでした。

日本は仕方なく玄関に向かいます。

「北朝鮮さん……今度は何ですか……………?」

玄関を見るとそこには珍しい光景が広がっていました。

まずロシア。

ロシアから日本の家に来るなんてめったにありません。

しかしそんなことよりも、注意すべきことは、ロシアが両手に持っているものです。

「・・・なんで水道管と銃?・・・」

とにかく物騒です。

しかもふだん不遜な北朝鮮が顔を蒼白にして震えていました。

北朝鮮はつわ言のように、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」

と言いつづけています。ひぐしの鉈の子のようです。

「・・・・・・・・とにかく事情を聞かせてもらいましょうか・・・。」

このまま玄関に居られても困るので。

「だからね、昔フランス君がね、クリスマスに「ロシアだけ読者サ
ービスをしていないから、

俺がしてやる！！」とかいいながら襲ってきたんだよ。意味が分
らないんだけどね。

その時の写真があつてね、その写真を北朝鮮君に渡したらいいんだ。
そしたらね・・・・・・・・北朝鮮君たら、ネットに流しちゃったらしい
んだって。

・・・・・・・・だからちょっと謝ってもらおうと思って」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさ・・・。」

「・・・・で、私の家に来た用事とは？」

「いやあ、日本ちゃんならその写真を消せるかな」と思って」

消せるかな？ではなく消さなかったら魔法のステッキが発動 みた
いな感じです。

「分かりました。やってみます。」

「あ、言っとくけど途中で初 ミクとか見ないでね。」

「……はい……。」

それからはずさざましいものでした。

キーボード打ちが早すぎてみえません。

なによりも気迫がすごいです。

そして、30分後……

「出来ました。」

「わあ、ありがとう！」

たしかに写真があつたところは見れなくなっています。

やはりオタク大国だけあります。機械に強いですね。

「これで、こころおきなく北朝鮮君の処刑が出来るよ」

「・・・・・・・・え」

これで開放されたと思った北朝鮮はみるみる血の気が引いていきます。

「どんな格好がいい？女装はし慣れているから・・・・。」

「え・・・待ってください待って・・・・。」

「じゃあね、日本ちゃん。」

「ぎじゃあああああああ！・・・！」

「・・・最近北朝鮮さんはこんなばかりな気がします・・・。」

さすがに日本も今日はかりは同情しました。

ブラックロシア（後書き）

今回書いていて初めて感想をもらいました。

とても嬉しかったです。

いままで自分の小説が面白いかどうか分からなかったので、

すごく感動しました。

ありがとうございます。

ギリシャと日本

第十三話「ゆるすぎる」

ギリシャさんは何気に日本が好きです。

本人に訊くと、

「まあ・・・日本のことはトルコよりは好き・・・だと思っている。

昔から仲良かったし日本の文化も結構、好き・・・？な方・・・？

最近の俺は他の国からの買い物が多くて毎年赤字を出していた。

それを遠くから色々支援してくれたのは日本・・・だったし。

うん、中古車買うときも絶対日本のにしている・・・。

日本のは中古車の中でも壊れにくいし（ry）」

以下、日本への賛辞が延々続きました。

そうして仲の良い日本とギリシャですが、そんなギリシャにも日本

は男装です。

理由はトルコさんがやけに必死にばらすのを止めてきたからです。

「いやばらさないほうがいいと思うぜおらぁ。いや絶対。ほんとに、うん。」

ということでもだに言っていないのです。

しかし、機会ができたと言おうと思っています。

今日は日本はギリシャの家に遊びに来ていました。

「なんか・・・遺跡が多くて好いですね。ギリシャさんの家は。」

「でも・・・開発が進まなくて困る・・・かも・・・。」

「そうかもしれないけど、とにかく素晴らしいです。」

「そういつてもらえると・・・嬉しい・・・。」

そんなゆるい会話をのんびりしていると、だんだん日本は眠くなってきました。

(はっ・・・いけません!!)

どうも日差しが良いところで、ゆるい会話をしていると眠くなるみたいです。

と、そのときギリシャが、

「俺は・・・もう寝る・・・。」

と、言い残しいきなり寝てしまいました。

「ああっギリシャさん・・・。」

しかし日本も眠気には勝てません。

(ちょっとぐらいなら・・・いいですね・・・?)

そうして、少しギリシャに寄りかかるように、眠りへと落ちて行きました。

完全に日本が眠りに落ちた頃。

ギリシャが突然起き出しました。

そして、遺跡の一角へと、目を向けます。

「おまえら……何しているんだ？」

そこには、

「なんでお兄さんとは寝てくれないのかな？ 納得できない羨ましいな。」

「なんでギリシャが良くて俺は駄目……？ 最近俺才チ要員じゃん……なんで……？」

2人のへんた・・・北朝鮮とフランスです。

「・・・・・・・・なんでここまで付いてきた？・・・」

ギリシャが若干呆れ問いかけました。

「それは単純に、」

「それは勿論、」

「「お前だけ日本と楽しく過ごすなんて許せないからだよ!!」」

「最低だな。」

「と言うことで、お前の2人きりタイムをことごとく壊していく！
！覚えてろ!!」

言うだけ言ってどこかへ去って行きました。

「・・・・・・・・なんだったんだ・・・一体・・・・。」

さて、日本とギリシャは平穏な休日をご過ごせるでしょうか？！

ギリシャと日本（後書き）

個人的に日本とギリシャとトルコの絡みが好きです。

だから書いてみちゃいました

ギリシャと日本2

第十四話「お邪魔虫」

「はっ」

丁度二人が去ったところで日本が目覚めました。

「いつ位まで寝ていたんでしょう・・・。」

「・・・10分くらい・・・?」

「!はえ!!」

見るとギリシャがいつのまにか起きています。

「あ・・・すみません・・・寝てしまいました・・・」

日本は顔を赤くして謝罪しますが、ギリシャは内心ほっとしていました。

（あいつらが来ている間に・・・起きないでよかった・・・。）

「わあ、可愛いです!!」

ギリシャの周りではいつも猫がいます。

当然可愛いもの大好きな日本は喜びます。

「・・・そいつは猫吉・・・。だったと思う・・・。」

「どの猫も可愛いです!!」

猫に囲まれて日本は幸せな時間を過ごしていました。

しかし、それを影から見ている者達がいきました。

「うらやましいなあ・・・なんでギリシャだけ・・・?」

「あいつだって変態のくせに・・・ちょっと拉致監禁と女装が好き

なだけなのに・・・」

（さすがのお兄さんでもそれは賛成しかねるかな・・・）

そう、へんた・・・フランスと北朝鮮です。

前回捨て台詞を残していったん2人のもとを離れた変態達でしたが、

その後からずっとギリシャと日本を尾行していたのです。

「取りあえず、ギリシャの幸せをぶちこわす作戦はできたか？」

「それなら、溝鼠を大量発生させるのは？」

「だめだ、汚い。」

「じゃあもう地味に嫌な石投げまくるとかは？」

「あー！。もうそれでいいや。」

と言うことで、さっそく作戦決行です。

楽しく猫と戯れているギリシャ達に向かって石を投げました。

このままではギリシャに当たってしまいます。

そのときでした。

もう少しでギリシャに当たる！というところで、石が止められました。

日本がすんでのところで石を受け止めたのです。

「あれ・・・何処から飛んできたのでしょうか・・・？」

日本は不思議がつていますが、ギリシャは薄々気づいていました。

（あいつらかな・・・）と。

一方当の変態らは影でブルブル震えています。

「なあ・・・石、取っちゃったな・・・」

「あの速さは人間並みではなかったな・・・」

「・・・。」

そんな北朝鮮とフランスの後ろ。

誰かが近づいて来ていました。

ギリシャと日本2（後書き）

友達から、

「リヒだして」

との要望がありますが、それはもう少し先になりそうです。

ギリシャと日本3

第十五話「結局終わりは」

そのとき、北朝鮮とフランスの後ろに誰かがせまってきた。

「ようっ」

「!？」

なんとそれは……

「誰？」

「おい!!」

なんとそれはトルコでした。

「ああ、なんだとトルコか。」

フランスはやっと思いいしました。

北朝鮮はトルコと会ったのが初めてなので、誰か分かりません。

「・・・誰だ？」

「だから、トルコだったの。」

フランスが呆れたように言いましたが、それよりも問題なのが・・・

「なあ、トルコ。」

「なんでい？」

「なんで俺たちがここに居るって分かったんだ？」

「それは勿論、」

「？」

「ギリシャの野郎に教えてもらったからでい。」

「え？」

脳が状況を理解する前に、もう事態は手遅れになっていました。

いつのまにか、トルコが指をバキバキ鳴らせ、ぶつとばしそうな雰囲気になっています。

「お前、日本に石を投げて、怪我させただって聞いたもんだからよ。」

「いや、怪我はさせていな・・・ぎゃあああああああああ！
！！」

やはりそんな2人でした。

ギリシャと日本3（後書き）

今回は短かったです。

すいません。

次はたぶんロシアのヤンデレ???の話になると思います。

シベリアへその1

第十六話「ロシアのせい」

WW2が終わり、少し経った頃。

ロシア（ソ連）とアメリカは冷戦中でした。（これ伏線です）

「日本へプレゼントだぞ〜！」

「アメリカさん・・・有難うございます。」

しかし、日本とアメリカは仲良しです。

今日も・・・。

「日本へこれはね、アメリカで流行っている下着なんだぞ〜」

「気持ちだけ頂きます。」

「えゝなんでゝあ．．．そうか日本には大きすぎるか．．．」

カチャッ

「何か言いました？」

「いいえなんでもありませんすいません」

．．．．．仲良しですよ？（多分）

その仲良しさは、勿論他にも広がっています。

「くそう．．アメリカの野郎．．お前だけなんで日本と．．．」

「せっかく女の子だって分かったのに．．．」

「我の方が日本とつきあいが長いあるよゝ。」

例によって例のごとく連合５．．．ん？

「あれ、ロシアは？」

そう、ロシアが居ないのです。

皆としては、居ない方がいいのですがやけに気になります。

「どこいったんだ・・・？」

「日本。ロシアとは仲良くしない方がいいんだぞ！！」

「え・・・？」

今日もアメリカが遊びに来ていましたが、（仕事しろよ）突然そんなことを言い出しました。

「どうしてですか？」

日本はそのとき、ロシアがそんな悪い人には思えなかったのです。

「とにかく、仲良くしない方がいいんだぞ！！」

「……………」

日本は複雑な気持ちのまま、取りあえず頷きました。

そしてアメリカが帰ったあとのことでした。

日本は上司に呼び出されました。

「何でしょうか？」

「ロシアとはつきあうな。」

「え……………」

またです。

「どうしてな……………」

「いいかこれは上司命令だ。とにかくロシアとは付き合うな。」

「・・・・・・・・。」

皆どうしてしまったのでしょうか？

翌日です。

日本はアメリカと散歩に出ていました。

「いい天気ですね・・・・。」

しかし当然影から連合軍が見ています。

「くそう・・・アメリカの野郎・・・覚えてろ！」

「なんでアメリカだけなのかなあ？」

「我の方が日本に似合うある！！」

「僕も、アメリカ君が日本ちゃんと仲いいなんて気に入らないな。」

「

ロシアもいます。

あいかわらず草むらで連合5がごそごそやっていると、アメリカが気づきました。

「やあ、君たち何やってるんだい？」

ばれたからにはしょうがありません。

しょうがなく草むらから順々に出てきました。

アメリカはその様子を見て、突然目を見開きました。

「君・・・なんで・・・？」

ロシアを見て言います。

それに対しロシアは笑顔で応対しました。

「ああ、あのSP送り込んだのやっぱりアメリカ君だったんだね」

アレならいまごろ楽しく花畑で遊んでるんじゃないかな？」

「悪運だけ強いんだね」

どんどん空気がどす黒くなっています。

「あの、ロシアさんもアメリカさんもやめてくださ・・・」

日本が仲裁に入ろうとしたときでした。

アメリカが突然日本を隠しました。

「なんで隠すのかな？？」

ロシアが表面上は優しく訊きますが、アメリカは、

「そんなの君に見せたくないからじゃないか！」

と、明るく答えます。

そのせいでもう色々取り返しのつかない空気へ……もう私知りません。

しかし、意外なことにロシアはあっさりと、

「そうだね。じゃあ僕はこれでね。」

とおとなしく身を引きました。

残された人々はしばし呆然としていましたがそれもすぐに終わり、

「もうアメリカはっ……ひやひやしたぞ!!」

「いめんいめん。」

「もう二度としないと約束するよろし!!」

と言つような空気へとかわっていったのでした。

しかし、まだ知らなかったのです。

ロシアがもう、地獄の復讐を開始していることを。

シベリアへその1（後書き）

次回予告

拉致監禁調教ネタでしかギャグにできないかもしれない。

シベリアへその2

第十七話「復讐編」

「日本」

今日もアメリカさんが来ています。

しかし、今日はなぜか誇らしそうでした。

「なぜかと言うと、今日の安全保障理事会で君の国連入りを決めるからだよ!」

「誰も何も訊いていませんが。」

地の文が説明しなくても良かったようです。

「でも・・・それは本当ですか？」

「ああ、勿論さ!」

その言葉を聞いた日本は花が咲くように笑いました。

「とつても・・・嬉しいです。」

まあ、お約束で影で見ている人たちは（あえて誰とはいいません）

「くそう・・・アメリカの野郎うう・・・許すまじ・・・っ」

「なんでアメリカだけなんでアメリカだけ・・・」

「我の方が日本に相應しいある・・・あんなバーガー野郎にはやらないある・・・」

日々禍々しさを増していったのですが。

「じゃあ、日本行ってくるんだぞ!!」

「お気をつけて。」

～会議場～

「……と言うことで、日本の国連入りを認めたいんだぞ!!」

皆それで、別にいいとかどうでもいいみたいな感じで日本の国連入りが決まろうとしていました。

ずいぶん軽い感じですが、まあいいでしょう。

「じゃあこれで決定……」

「ちょっと待ってくれるかな？」

しかし、ここで異論を申し立てる者がおりました。

それは……

「……ロシア、なんだい？」

ロシアでした。

「僕は反対だなあ。」

しかも、ほぼ決まりかけていた日本の国連入りに反対だと言つのです。

「・・・何でなんだい・・・？ちゃんとした事じゃないと認めないぞ！」

「えつとね、僕の考えは・・・」

それから長々と続きましたが、要約すると、こんな感じです。

（日本ちゃんはアメリカと仲いいし、でも僕と仲良くしてくれないし、

それだったら、国連に入れたくないなあ。）

こつ言つことでした。

当然そんな意見は認められません。

アメリカは、反論しようと口を開きかけましたがそれより先に、

「だから、僕は拒否するんね」

なんと。

拒否権を発動させてしまったのでした。

「えっ……」

「だからロシアのせいなんだぞ!!!!」

アメリカから一部始終を聞いた日本です。

「私……なにかロシアさんのお気に召さぬことしたのでしょうか・
……」

国連に入れることを少なからず期待していた日本は涙目です。

「いや……君が悪いんじゃないと……」

「ああ、どうしたらいいんでしょう・・・。」

日本はアメリカの話聞いていません。

必死に自分の非を探しています。

ちなみに影から見ていた人たちは、口にこそ出しません。が心の中ではロシアを二万五千六十一回

殺していました。

「あの、私ロシアさんの御家にいつてきます!!」

日本は突然そんなことを言い出すと、防寒具を揃え、出て行ってしまいました。

残されたアメリカは、しばし呆然として、

次に現実世界に戻ってきて、

「あああああああ!!!!」

最後に事の重大さを知るのでした。

シベリアへその2（後書き）

次回予告

色々カオス。

シベリアへその3

第十八話「鍛えてます」

吹雪渦巻く最中。

一人の少女が歩いていました。

「少し寒いですかね・・・？」

その遥か後ろです。

がたがたぶるぶる震えながら付いてくる者たちがおりました。

「寒い寒い寒い・・・」

「わあたすけて寒いよドイツ・・・」

「かなり・・・寒い・・・」

「ムツキムツキの奴はいいな〜お兄さんなんて完璧なボディだから、寒いならないなあ〜」

「こんな時でもムカつくな・・・てか天使が手招きしているように見えるのは気のせいかな・・・?」

「死ぬなよっ」

ドイツ、イタリア、イギリス、フランス、中国です。

あの後ことの重大さに気づいたアメリカは慌てて他の人に知らせるべく知り合いを集めたのでした。

「そしたらいつものメンバーになったと。」

あの一アメリカさん？地の文の仕事取るのやめて頂けます？

・・・オホンッとにかく心配なので日本を追いかけることにしたのですが・・・。

「寒すぎるよ…………。」

現在位置。シベリアの何処か。

あたりは極寒。

ドイツでさえも、こらえ切れずに震えています。

「てかドイツは一回ロシアの冬将軍にやられたんだよね？」

「ああ・・・あれは酷かった・・・」

さらに、昔の嫌な記憶を思い出してますます青くなっていました。

「て言うか日本はなんで涼しい顔で歩けるんだ・・・？」

日本は口でこそ寒いと言っていますが、正直あまり寒そうには見えません。

「日本は鍛えてるあるから・・・」

中国は呟きます。

その実、日本は高血圧であることを利用し、朝早く起きランニングなどをしています。

「・・・結構すごいんだな・・・。」

一方、こちらは日本です。

「ロシアさんの御家は、たしかこの辺りで・・・あっ」

何か見つけました。

それは、

「人間でしょうか・・・？」

なんと人間のようです。

とにかく、こんな寒いところに居ては凍えてしまいます。

日本はその人の所へ行きました。

「あの・・・大丈夫ですか？」

その人は、白銀の長い髪的女性です。とても美人でちょっとつり目気味の目が印象的でした。

「ああ、大丈夫よ・・・だからほつと・・・」

その女性が、ほつといてと言おうとし顔を上げたときです。

その目が日本を捉え、美麗な顔が見る見ると驚愕に彩られていきました。

「お前・・・日本か？」

「え・・・なんで私の名前を・・・」

「兄さんがいつもいつも欲しい欲しい言っていたあのー!!」

「えあ・ちよつ・待つて・」

「アジアの国で、はつきりしないと有名で、でも怒らすと怖くて、胸は小さいとか言われてるけど」

じつは結構あるあの！！！！！！」

「え・・なんで私の情報を・・て言うか最後のはどこで仕入れたんですか!？」

はい、皆さんもお察しの通りこの女性はベラルーシさんです。

いよいよカオスなになってきました。

さて、私はどうやって収集を付けるのでしょうか?! 乞うご期待!
!(考えてないのかよ)

シベリアへその3（後書き）

次回予告

暴走か覚醒。

シベリアへその4

第十九話「ベラルーシさんと日本さん」

ベラルーシが日本に迫っていたときと同じ頃。

アメリカたちはどうしていたかと言つと。

「アハハハ妖精さ～～ん俺もいまそっちに行くよ」

「しっかりするあへん!!」

某英国紳士はバブってました。

「なんで兄さんはこんな女がいいのかしら・・・そもそも兄さんと私は結ばれる運命なの・・・」

こんな女なんかに邪魔させるものか・・・そう、兄さんと私は一心同体・・・なのになんで

結婚してくれないのか・・・結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚・・・」

「ひiiiiiiii!？」

一方日本は別の意味でバブっているベラルーシに迫られています。

(・・・なんで・・・私はロシアさんに・・・会いに来ただけなのに・・・)

そろそろ空しくなってきた、もう帰ろうかと日本が思案し始めた時。

突然ベラルーシの目が光りました。

「こっちに・・・」

と言うと、もの凄い速さで走り出していきます。

「あっ・・・待ってください・・・」

慌てて日本も追いかけてました。

そこに居たのは、

「にいさーーーーん!!!」

「べっ・・・ベラルーシ・・・」

当の本人、ロシアさんです。

「兄さん！会いたかった!!」

と叫ぶなりベラルーシはロシアに向かって突進して行きました。

本人はロシアに愛の抱擁をしようとしているようですが、傍目から見なくても

ロシアを殺そうとしているようです。

なので、当然ロシアは避けました。

ベチャッ

「にいさん酷い・・・」

血がだらだらだら・・・。

「だ・・・大丈夫ですか!!」

日本は慌ててベラルーシのもとへと、向かいますが、その途中で、

「あれっ？日本ちゃんだっ？なんで此処に？」

ロシアが気づきました。

「あっ・・・」

ここですよやく日本は此処に来た目的を思い出します。

「あ・・・私、ロシアさんに用事が・・・」

「んっ？何かなっ？」

ロシアはにこにことして対応しますが日本にとってはその笑顔が怖くて仕方ありません。

「ああ・・・なんか・・・ごめんね・・・色々と・・・うん・・・」

「あの・・・私は大丈夫ですから・・・その噛み傷を・・・」

「うん・・・大丈夫だから・・・それより用事って何かな？」

あれから、なんとかベラルーシを帰らせることに成功したロシアですが、とにかくボロボロです。

「あの・・・、私はロシアさんのこと、嫌いじゃありません。

仲良くしたいですし、これからも付き合えていけたら、嬉しいです・
」。

日本はかなり恥ずかしかったですが、思い切って言いました。

日本だって、このままでは嫌だったからです。

しばし、ロシアは面食らって呆然としていましたが、すぐ笑顔で、

「うん、僕もだよ」

と答えました。

「じゃあ、寒いから送るね またね、日本ちゃん。」

日本はお礼を言いながら、にっこりと笑いました。

日本が帰った後。ロシア邸です。

「ウフフフ 今回ののは巧くいったな 日本ちゃんは優しいから絶対自分の責任だと思って

来と思っていたんだよねゝまあ、もし来なくても国連入れないだけだし

これでまた、日本ちゃんを手に入れる第一歩が踏み出せた

次は何しようかなゝあっそういえば樺太があつたねゝ・・・」

なんと、今回のことはすべてロシアの作戦だったのです。

なんと黒いんでしょう。

「ウフフフ・・・」

ちなみに影から見ていたバルト三国は、その恐ろしさに震えていました。

「え・・・ちよつ俺たちは！？え・・・もしかして出オチ！？待てよコルアツいいかげんにしろ

作者の野郎！！あとで覚えてろ！！」

くトルコ宅く

「と言う話があったんだよ」

フランスです。

「ふん・・・で言うことはそれだけかい？」

「え？」

「じゃあ、そろそろはじめようかねい・・・」

「え?!面白い話したら逃がしてくれるとかないの？」

「誰がそんなアラビアンな設定作ったあ?!逃がすわけねえだろい！」

「てかそれどっちにしたって俺は助からねえし!!」

こちらは北朝鮮。

「歯あ食いしばれ。」

「えあちよっ・・・てか歯食いしばったら折れちゃうああああああああああ!!」

完

シベリアへその4（後書き）

終わりました。

次はほのぼのな感じでいきたいです。

塩分は命ですその1

第二十話「塩分かえしてください」

いつも真面目な日本。

いつも周りの空気を読んだりして、気を抜くことはありません。

しかし、そんな日本でも気を抜くときだってあります。

「はづつう・・・やっぱり白米は最高ですう・・・」

例えば食事の時。

「はづつう・・・しあわせですう・・・」

その様子はどうしても幸せそうです。

「はづつ・・・んっおいしいですう・・・」

ドイツでさえも一瞬声をかけるのを躊躇うように。

「あゝ・・・日本？」

「はぐはぐっ・・・おいしいですう」

「あ・・・にほ・・・」

「もう一皿いっちゃいましょう」

「・・・」

「はぐはぐっ・・・あゝしあわせですう・・・」

「・・・」

「ほ・・・ほら、ドイツ元気出して！・・・いつか気づいてくれるって！
「！」

それから、5分後。

「あつ・・・ドイツさん、イタリアさん、いらしていたんですか！

すみません気づかなくて・・・いますぐお茶を・・・」

「ああ・・・大丈夫だ。」

ようやく食事を完食した日本です。（ご飯5杯、味噌汁7杯、漬物4皿、鰯の開き3食。）

「それでだな、今日は日本に言うことがある。」

「はい？」

「・・・・・・・・まず、これを見る。」

そう言ってドイツが一枚の紙を見せました。

その紙とは・・・・・・・・

「・・・・・・・・なんですか?????」

「これが今の日本の血圧だ。」

なんと、そこにはこれで生きてられるのが不思議なほどの血圧が記されていたのです。

「え・・・嘘ですよ・・・え・・・ありえません・・・うん、これは私じゃない誰かの・・・」

「残念ながらお前のだ。」

さらに、ドイツの影から北朝鮮が出てきて口出ししました。

「・・・イタリア君は何処ですか？」

暗にお前なんかお呼びじゃねーよこのやろー的な雰囲気醸し出しながら日本が問います。

「あれならシエスタ。」

あれ呼ばわりですが、まあいいでしょう。

「あー．．とにかく、今日からお前の食事を俺が制限する！塩分は禁止だ！！」

「ええええええええええ！！ちょ．．．待ってください！！私塩分がないと．．．」

「漬物や梅干なども禁止だ！！」

「いやああああ！！せめてしめ鯖だけはっ．．．」

「駄目だ！！」

「えっ．．．そんな．．．私を殺す気ですか！！そんな無茶な！！」

日本は涙目で抗議しますが、ドイツは顔を背けながら聞いてくれません。

「っ．．．とにかく、今日から一週間スイスの家で教育してもらえ！！北朝鮮ともどもな！！」

「え．．．俺も！？」

「当たり前だっ！」

「ええええええそんなぁ・ひどいですう・ひどいですう・う
う・」

そのとき、玄関が大きく開かれ、当のスイスが入ってきました。

「日本、北朝鮮、早く用意するのである!!」

「うう・・・そんなぁ・」

こうして、日本にとっての地獄の一週間が始まったのです。

塩分は命ですその1（後書き）

なんと「北朝鮮君と日本ちゃん」も二十話目。

これからもよろしくおねがいします！

は必要なんです!!」

「あああああ!!待つのである!!なんで懷から塩がつ・・・」

「ひいひいひい!!かけるなああああ!もう何コレ!?ただの塩じゃん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リヒテンシュタインは15秒ほどフリーズしていましたが、やがてスイスが気づきました。

「ああ、リヒテン。そんなところで何をしているのであるか?」

「・・・・・・・・?なんで、日本さんや男の人がいるんです?」

と言うことで、事情をスイスは説明します。

「・・・・で、この男は北朝鮮。拉致監禁調教好きで、その性格を直すように言われた

のである。よって、我が家で一週間程教育を行うことにした。」

「・・・拉致監禁ですか・・・？」

「大丈夫です。リヒテンさんには、迷惑をかけませんから。北朝鮮さん？」

「ああ、迷惑はかけないようにする。」

ここで、リヒテンシュタインは気になっていたことを口にだしました。

「北朝鮮さんは男・・・。ではなんで女の子の格好をされて・・・？」

「変態だからだ。（です）」「

「いいか！？まず拉致監禁は犯罪である！！調教も犯罪である！！分かるか？！」

「・・・面白いのに・・・。」

「うう・・・そんなぁ・・・。」

さて、北朝鮮は、日本は、きちんとスイスの家で更生できるのか？
！

塩分は命ですその2（後書き）

やっと念願のリヒテン&スイスがだせました。

塩分は命ですその3

第二十二話「こんな時でも」

「はうう．．．．。終わりましたあ．．．．。」

あれから数時間。日本と北朝鮮はスイス&リヒテンコンビにすごかれました。

ご飯の時間を利用してなので、日本には地獄のようでした。

「まっ．．まさか．．ご飯を三杯しか．．食べちゃだめって．．しかも塩分が．．．」

「普通の人間はそんなに食べないのである！！！！」

「それには同意。」

断塩&食事制限が課せられている日本と、詳しくは書けませんがいなかれまくった北朝鮮。

二人は死人の様です。

それでも訓練の甲斐あってか、北朝鮮の顔つきが少し変わったよう
な・・・

「あゝ日本と一緒になのに襲えないなんて・・・拷問の様だあ・・・あ
ゝ拉致りたい拉致・・・。」

気のせいでしたすいません。

「でも、日本さんは頑張りましたよ！すごく！」

「俺は？」

北朝鮮は華麗にスルーされました。

「えっ・・・そんな・・・私なんてまだまだです！これから、頑張
りますね！」

「はい、一緒に頑張しましょう。」

リヒテンシュタインの励ましに、つい顔を綻ばせてしまう日本でありました。

その様子を、顔には出しませんが微笑ましく見ているスイスです。

（日本も頑張っているし、リヒテンもあのころに比べたら、大分笑うようになっってきたであるな。）

恐慌で、ボロボロになったリヒテンシュタインを拾ったスイスですが、

自分もそのとき某シェイク野郎のお陰で大変な状態でありました。

そして、そのことを今でもリヒテンシュタインは申し訳なく思っています。

（遠慮なんかしないでいいのだ。）

スイスはいつもそう思っているのです。

（しかし・・・問題は・・・）

勿論それは北朝鮮のことでした。

（あいつは、・・・・・・・・・・・・・・・・。どつすねばいいのか・・・・・・・・。）

スイスでさえも頭を抱える北朝鮮の拉致監禁調教病。

その矛先はもれなく日本となるのです。

（・・・・・・・・。今日の就寝は大丈夫か？）

不安になるスイスなりました。

「もう9時ですー！就寝ですよー！」

リヒテンシュタインが呼びかけます。

「部屋は、個人個人である！いまから我輩が案内する！」

「はいーちょっと待ってくださいー。」

そう言うと、日本はなにやら大きな鞆を持ってきました。

「日本さん・・・？その鞆は・・・？」

「ああ、これですか・・・。これはですね・・・。」

と、日本は鞆を「ごそごそ」します。

そして、出てきたのは・・・。

「パーソナルコンピューターですか？」

正式名称で言うリヒテンシュタインは律儀な子です。

「パーソナルコンピュータであるな。」

スイスも律儀ですね。打つのが疲れるんで普通にパソコンでいいんじゃないね？

「パーソナル・・・。」

お前はわざと筆者を困らせようとしていますね。日ごろの腹いせか？

「と、あとは護身用具を少し・・・」

日本の少しが気になる北朝鮮です。

てか、鞆から長黒くて硬いものが覗いてるのは勘違いだといいいですね。

（うむ。安全面は心配ないのである。）

北朝鮮が不安を募らせるのと同時にスイスは安心しました。

「では、」

「「「おやすみなさい」」のである、です、」「「「

そして、いたって平和に就寝時間を迎えたのでした。

塩分は命ですその3（後書き）

昨日、更新し忘れてすいません。

一日二話のペースを保つのは難しいですね。

塩分は命ですその4

第二十三話「ノーコメントで」

ここはスイス家。

もう夜遅い時間帯です。

その家の一角に、一つだけ明かりがついている部屋がありました。

「ふう・・・もうすぐです・・・。」

その部屋には日本がいました。

日本はこんなときでも仕事です。

今も、年末の商戦に向けて頑張っていました。

コンコン。

しかし、その日本の部屋に來訪してきた者がおります。

「はい？」

その、人物はリヒテンシュタインでした。

いったいどうしたのでしょうか？

「あ……夜遅くになんですけども……いいですか？」

「ええ。いいですよ。」

「あの……。」

そうして、リヒテンシュタインが切り出したことは、

「いっ……一緒に……ミルクティーでも……どうですか……？」

ただ、お茶をしようと言ったものでした。

「いいですよ。．．．眠れなかったのですか？」

「はい．．あの．．．家に人が来るのは．．．は、初めてなので．．」

（純粋な子ですね。）

日本はそう思いました。

「いいですよ。では一緒に．．．」

と、言いかけたときです。

なにか禍々しいものがかかる予感が．．．。

てか、既に来てる感じが．．．。

「ひ！！？」

ソレを、日本が発見してしまいました。

「羨ましい羨ましい羨ましい羨ましい．．」

戸の、隙間から、覗く二つの目。

（完璧に北朝鮮さんですよね?!）

まあ、北朝鮮なんですけど。

「日本さん？どうしたのですか？」

リヒテンシュタインは気づいていません。

日本は思いました。

（始末するなら今のうちですね．．．。）

リヒテンシュタインが気づいていないいまのうちに、殺ってしまおうと。

「リヒテンさん、ちょっと目を十秒間だけ閉じといてください。」

「?こつですか?」

素直に閉じるリヒテンシュタインは良い子です。

リヒテンシュタインが目を閉じたその瞬間。

日本は懷から小刀を出し、北朝鮮へと投げました。

「ひひひひひひ!」

日本の見事なコントロールにより丁度小刀は北朝鮮のすぐ隣に刺さりました。

そして仕草で、あっちいけとジェスチャーします。

そして、悪霊退散。

その間、丁度十秒間。

リヒテンシュタインが目を開けた時、もう元どおりになっていました。

「?どうして目を閉じてなどと・・・?」

「ああ、少し虫が居たので追い払ってきただけです。」

「そうですか・・・。分かりました。」

「では、お茶を・・・」

日本の言葉がまた途切れました。

「ああ――!?!」

「!?!」

「もう、十二時じゃないですか!?!」

「ど・・・どうされたのですか?」

「ちょっと待ってくださいね。」

そう言うと、パソコンをインターネットに変え、ニコニコ動画と呼ばれるところへいきました。

「マイリスと・・・。」

そして、なにやら美麗な女の子が動いている動画をマイリストします。

「あの・・・日本さん・・・?」

「やっぱり面白いですね。今度ゆっくり見ましょう。」

「・・・にほんさん・・・。」

「ああ、なんでもありません。お茶をしましょう。」

「・・・そうですね・・・。」

リヒテンシュタインは、日本がオタク大国だっ
てことを忘れていた
のでした。

塩分は命ですその4（後書き）

どうでもいい小噺

みんなにバルト三国を聞くと、エストニアでなんか止まる。

「リトアニアと、ラトビアと・・・あれ？」

塩分は命ですその5

第二十四話「更正は無理」

チュン、チュン

「ふああ・・・朝ですか・・・。」

今は、朝方の四時ぐらいでしょうか。日本が目覚めました。

「ちょっと・・・早すぎでしょうか・・・?」

昨日は暖かいミルクティーをリヒテンシュタインと一緒に飲みながら歓談しました。

そのうちリヒテンシュタインが眠くなったので、部屋に帰り日本も間もなく就寝しました。

しかしやはり高血圧ですね。目覚めが早いです。

「・・・・。とりあえず部屋から出ましょうか。」

身支度をしてから部屋を出ます。

朝方の空気はとても冷たく、その空気は日本を震えさせました。

「・・・・・・・・。。寒いです・・・・。」

やはり、部屋に戻って上着でも取ってこようとしたそのときです。

「日本・・・・？こんな朝早くに何をしているのであるか？」

「え？」

なんと、こんな朝早くにです。スイスも起きていたのです。

スイスも高血圧なんでしょうか？私、非常に心配です・・・・。

「セダーン！！！！」

ひやああああ！！！！

「どっ……どうされたのですか？」

「いや……少し試しうちをただけなのである……。」

はあ、はあ……。危なかった……。あと一ミリ……。

「まあ、とにかく広間へ行きませんか？朝ごはんを作らないと……。」

その意見にスイスも同意します。

「ああ、そうしよう。」

（台所にて）

「スイスさん？調味料が醤油とチーズしかないのですが……。」

「塩分は禁止だからだ。醤油もあるが使っては駄目なのである。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「朝ごはんは、チーズパンですませる。」

「・・・・・・・・。塩分が恋しいです・・・・。」

と言うことで、チーズ成分たっぷりの朝ごはんを食卓に並べます。

「うっ、塩分・・・ナトリウム・・・・。」

「ときに日本。」

「はい・・・？」

「そろそろリヒテンとへんっ・・・北朝鮮を起こしてきてはくれないか？」

「いいですよ。」

変態と言いかけたのは内緒です

「え〜と・・・まずリヒテンさんからですね・・・。」

コンコン。

「リヒテンさん朝ですよ・・・。」

「っ・・・ん・・・はい・・・。」

すぐに起きてきました。

「おはようございます。」

「ん・・・おはようございます・・・。」

寝ぼけ眼をこすりながら出て行きました。

「はあ・・・次は北朝鮮さんですね・・・。」

コンコン。

「北朝鮮さ〜ん．．．いい加減に起きてください。」

「ん．．．はっこれは日本の声っと言うことはいまは新婚かつ．．」

「何貴方は朝から妄想大爆発させてるんですか一回頭冷やしたらどうですか？」

北朝鮮には非常に冷ややかな日本です。

「ええ〜早すぎない〜」

といいつつ北朝鮮が出てきました。

「．．．．．。」

日本は北朝鮮の姿を見た後フリーズしました。

「．．．．．？どうした？」

「死んでくださいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!」

「ふあえ、何？俺なんかした．．．ってああ！！この格好悪かった
うんすぐしまうからその刀を．．」

「し・ん・で・く・だ・さ・い！！！！！」

[illegible]

抽象的に言うとな北朝鮮の急所（男的な）が露出していました。とりあえず死ね。

「作者さん、やって下さい。」

おうよ！任せろ！！

「え……待つてこれは酷いやめああああああああ！！！」

死ね！死ね！死ねええええええ！！

「ごはあつ・・・こんなの納得できねえ・・・いくら女だからって・・・

「

「
・
・
・
・
・
・
何
や
っ
て
い
る
で
あ
る
か
・
・
・
?」

塩分は命ですその5（後書き）

次回ぐらいで塩分編完結だと思います。

あと、小説のお気に入り登録数が増えててすごく嬉しかったです。

ありがとうございました。

塩分は命ですその6

第二十五話「別の意味で大変」

「今日で一週間か・・・日本たちが戻ってくるころだな・・・。」

「楽しみだなあ。」

今日で日本と北朝鮮の教育が終わる日です。

「でも、ひとつ心配なのが・・・。」

「日本が、本気モードになってないかねーウエー」

前、自分の意見を言わない日本にキレたスイスが一ヶ月間日本を教育しました。

その結果・・・。

「立て國民！國民皆兵だ！外国人は厳しい審査をクリアしなければ受け入れん！」

銀行では安全確実な資産運用をしてやろう！しかし私を攻撃すれば
それらは無いと思え！」

．．．．．なんと言うか．．．。

凄まじいと言うか．．．。

あの、おとなしい日本が敬語を使わずに銃をぶっ放す。

恐ろしいことが起こっていたのです。

しかもその状態が三ヶ月程続きました。

「．．．．．そうなんていないことを祈る．．．。」

「そうだね．．．。」

ブルルルル！

丁度そのとき、ドイツの家の前で車の止まる音がしました。

「来たみたいだな。」

「あゝすいません宅配便です。」

「違うのかよおおおおおおお!!!!!!」

「ドイツ? 何頼んだの?」

「あつ・・・いや、ちょっとこつちのことだ・・・。」

「?」

世の中には知らない方がいいことがあるのです。

そう、その宅配便の中身の黒革の・・・。

「さっそくこれを使うときが来たようだな。」

うん冗談ブラックジョーク。

ブルルル！

今度こそ来たようです。

「着いたのである。」

スイスの声がしました。

「ああ、日本。それに北朝鮮おかえり。」

「ああ……。こんにちはドイツさん……。今日はいい天気ですね。」

「いや思いつきり曇りなんだが。」

「悪い天気ですね……。」

「……………そ………そうだな……。」

ちよつと日本は放心気味です。

なんかずつと「朝も昼も夜もチーズチーズチーズ・」

とかなんとか言っていますし。

「・・・・・・？北朝鮮は・・・・？」

その途端日本の目がカツと開きました。

「あああのだぶん生きているもので哺乳類とか呼ばれる分類で雄の
はずの人間なのか」

判別不能なものですかあれなら教育し直しますよ本当に良かったで
す。」

「・・・・・・。」

よほどなにかあったようです。

「まあ、・・・・スイス、どうだ？」

訊くとスイスはとっても不味そうな顔をしましたが答えてくれました。

「ああ、日本の塩分に対する情熱？はすごいのである……。我慢が限界に達したとき、

チーズに……。塩をかけようとして実際に食べたのだ……。」

「っそ……。それは凄まじいな……。」

つまりスイスでも駄目だったのです。

「じゃあ我輩はこれで失礼するのである。」

「……。日本？チーズに塩は無いと思うよう？」

イタリアにつっこまれたらお終いですね。

「まあ、よく頑張った……。」

「白米……。味噌汁……。塩鮭……。日本食……。」

「その夜、日本宅」

「白米ですうううう……！！！！塩も！味噌汁も！沢庵もあります！！！！は
ううう幸せですう……。。」

「おまけの北朝鮮さん」

「日本が恋しいよう……。てか女の子がいろいろ訓練は……。。
にほっん！！！！」

塩分は命ですその6（後書き）

以外に塩分編長かったですね……。

ちなみに分かる人いるか分かりませんが日本の食事場面は某人形物語の

翠○石と言うキャラをモチーフにしています。

……。分かった人ホントにいるかな……？

それとこの小説をお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます！
ざいます！！

クリスマス騒ぎその1

第二十六話「ミニスカ」

「今年は私の家ですね。」

毎年行われるクリスマス会。

今年は日本で行われることになりました。

「ああ、午後六時になったら開始だ。」

「分かりました。」

ドイツの話によるとクリスマス会は開始が午後六時で終了が午後十一時。

比較的健康な時間です（この人たちにとっては）

「じゃあ、またあとで。」

「はい、では。」

ガチャッ

「…………衣装はどうしましょう…………。」

準備もほとんど終わってあとは衣装だけです。

とりあえず衣装ケースを見ますと…………。

和服：十二着程。

軍服：五着。

あとは初〇ミクの衣装や平〇唯の衣装や水銀〇の衣装やイ〇ロスのあれやらでか全部分かった？

と言うようなものしか入っていませんでした。

「……………（自分のバカ!!）」

本気で日本は悩み始めます。

「うん……はっ……!! そうです!」

何か思いついたようです。

「よし……ここをこうしまして……これはこうですね……」

日本宅・PM6:00

「にほん！メリークリスマス！」

靡からアメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシア、ドイツ、イタリアの順で入ってきました。

「皆さん、ようこそいらっしやいました。」

日本はそのときに軍服上着を着て、下に着物の裾を折りたたんでスカートみたいにして、

途中から南イタリアも合流しました。

「その綺麗な御嬢さん。俺と一緒に行きませんか？」

「兄ちゃんそれ日本……。」

「え……あ……あの……。」

場が大分盛り上がった所。

ここでイギリスが切り出しました。

「今から……あ……カラオケを始める……アメリカ！」

「これがカラオケ機だぞ！」

アメリカがなにやら重たそうな機械を運んできました。

「高得点をとった奴は……日本の手料理をいくらでも喰えるだ！」

「ちょっとやってみたいかな。」

「いいな。」

「やろう！やろうよ〜」

「ちょっと待ちやがれええええ！！」

誰ですかこんな空気の読めない奴は・・・。

「俺！北朝鮮！スイスン家から抜けてきたの！！」

ああ、下半身露出男もとい北朝鮮ですか。

「ひどい！もう許してくれたっていいじゃん！」

ああ〜もう北朝鮮が出できたお陰で萎えたわ〜・・・。あとよろしく。

「おい・・・投げられたぞ・・・。」

「とりあえず続行だな。」

「えーと・・・そして北朝鮮が輪に加わったところで場はいっそう盛り上がりました・・・
これでいいんですか？」

クリスマス騒ぎその1（後書き）

塩分編が以外に長くなったので遅いけどクリスマス編です。

クリスマス騒ぎその2

第二十七話「何処がおかしい」

「じゃあカラオケすつぞー。」

ずいぶん軽い感じでカラオケ大会が開かれました。

「でも、それぞれの国の曲とかちゃんと入っているのか？」

ドイツは質問します。

それに対しアメリカは、

「H A H A H A それは全然問題ないんだぞ！」

と、自信あります。

ドイツはあまりもの自信に一抹の不安を覚えました。

「では、最初のチャレンジャーは誰だい?!」

「ではお兄さんからいこうかな」

意外なことにフランスが立候補しました。

イギリスはにやにやしながら茶化します。

「お前歌なんて歌えたのか?汚い声を聞かせるなよ。」

「お兄さんに嫉妬してるのかな?あゝヤダヤダこう言う嫉妬深い奴は・・・。」

「なんだとてめえこの腐れゝピーゝの癖にお前なんてゝピーゝでゝブーゝでゝバツキューンゝにつ」

「放送禁止用語を入れるのは駄目なんだぞ!」

「ピー音を入れる私の身にもなって下さい・・・。」

「まあ、とにかく始めようよ」

「早くするある!」

「お前らしい加減にしろ。」

「あゝ・・うん・・済まなかった。・・では曲を・・・・・
?」

イギリスが始めようとしたときです。

あることが発見されました。

「あれ・・俺の見間違いかもしれないが、曲が・・それぞれの
国の国歌しか入っていない・・」

「いやゝ思いつかなくてねゝ」

「ざけんな!!!!!!!!!!!!!!」

そう、国歌しか入ってないのです。

「アメリカ。お前が空気読めない奴だとは思っていたが・・・ここまでは・・・。」

「お前の空気の読めなさはカラオケいった時に思い切りアニソン歌ってくる奴並みある！」

「ごめんそれ私。」

「そして皆に「あいつ何？アニメとかオタってんじゃないやねえよキメえ」とか囁かれるんだよね」

「・・・。」

「で、最終的に友達が「ちょっと・・・トイレ」とかって離れていくんだよね」

「・・・。」

「皆そろそろ止めるんだぞ！作者が死に掛けているんだぞ！」

「・・・、とにかくイギリスが歌い始めました。」

「え・・・ちよつとま・・・までこの音楽！はじまるなあもうつ・・・」

「トップバッターはお兄さんのはずだったのになあ・・・」

「でも、イギリスさん・・・上手いですね。」

なんとかかんとか言いながらも歌ってくれたイギリスですが歌は上手いです。

やや低音気味ですが、低音気味の声がよりいっそう国歌を魅せていました。

そして曲が終わりました。

「ふう・・・つたく・・・」

そして点数はと言いますと、

「86点ですね・・・。」

いきなりの高得点です。

「・・・・・・以外だな・・・・。」

北朝鮮も意外そうにしながら感嘆していました。

「ふう・・・・でもお兄さんの方が上手いよ」

フランスが自信有り気です。

「はんっ・・・・ほざいとけ！」

イギリスはもう勝った気でした。

「皆さん・・・・楽しましようよ・・・・」

「イギリスが勝つかフランスが勝つか・・・・どっちか賭けるある！」

「眉毛に三十ドン。」

「なんでメキシコの通貨?!」

「賭けないで下さい!」

クリスマス騒ぎその2（後書き）

またもや更新し忘れ・・・。

すいません。

もうしません。嘘だけど。（殴

「うああなたにあるかこの声・・・寒気が・・・」

「やめて、やめてください・・・。」

「ちょっと僕トイレ行ってくるね」

「やめろおおおおおー!!」

そして、阿鼻叫喚の地獄に叩き落とされました。

理由は簡単。

フランスの声が余りにも艶かしく、ぶっちゃけ気持ち悪かったのです。

「ひどいな」

「とにかくいますぐヤメロ! いますぐだ! アメリカ! 中国の国歌に変える!」

「我あるか?！」

そうこうしてる内にメロディーは中国の国歌に。

中国もそこそこ上手く、こちらは低音も高音もきちんと出してそのままと言う感じでした。

点数は・・・。

「87点ですか！イギリスさんを抜かしましたね・・・。」

「うつ・・・。」

「やるな・・・。」

イギリスを一点差ながらも抜かしました。

「まあ、我にかかればこんなもの・・・。」

中国は得意そうです。

「じゃあ、次は・・・アメリカだな。」

「H A H A H A 俺の出番だぞ！」

そしてオ○マ登場でお馴染みのあのメロディーが流れます。

アメリカの場合、音程とかリズムとかよりも大きく歌うことを重視した歌い方ですね。

とにかくパワフルです。

まあ点数は当然高い訳でもなく、「67点だぞ！」

・・・割り込み禁止です。

「次は・・・・・・・・・・。」

イギリスは沈黙しました。

残った人々

・日本

・ロシア

・イタリア（南も）

・ドイツ

・北朝鮮

しかしイタリア、南イタリアドイツはイタリアがドイツに泣き付いてくるわ、南イタリアはドイツにちょっかいだすわ……。

ぶつちやけ「歌って」とか言える状況ではないです。

会話の一部を抜粋。

「いたい！いたい！兄ちゃん痛いよお……うあゝんドイツ……」

「この馬鹿弟！俺の服に食べ物つけるな！」

「いいかげんにしろ！」

「うるせえこのジャガイモ野郎！」

「……………てな感じです。」

「じゃあ、俺歌うわ。」

そのとき北朝鮮から立候補しました。

まあ、ロシアよりはましでしょう。

「ああ、じゃあ……………」

そしてメロディー……………あれ？

「あれ……………これって……………」

この聴いてる人を不安にさせるようなメロディーは……

「ああ、キャンプファイヤーのときに俺が歌った曲か。」

「なんで入ってるの?!」

気を取り直して普通のメロディー。

北朝鮮は普通です。とにかく起伏も抑揚もないです。

点数も70点と言う非常に微妙に普通なものです。

「普通で悪かったな。」

「次は……」

「じゃあ、俺いくよ」

次の立候補者はイタリア。なぜかボロボロです。

「ほら、兄ちゃんも！」

南イタリアも強制参加になりました。

イタリアの歌い方は、とても綺麗です。

さすが芸術の国ですね。

南イタリアは刺々しい感じです。

しかし、音程やリズムなどはきちんとしていました。

点数は、兄弟で87点。中国と同じです。

「て言うことはいまのところは中国とイタリアがトップか……。」

残るは、ドイツ、ロシア、日本。

「……どれ選んでも……なあ……。」

いよいよクリスマス会も終盤です。

クリスマス騒ぎその3（後書き）

いよいよ明日でクリスマス編完結です。

て言うか完結にしたいです。

クリスマス騒ぎその4

第二十九話「大穴で」

「よし、ここはじゃんけんで決めようじゃないか！」

人選に行き詰まったイギリスはそんなことを提案しました。

残った日本、ロシア、ドイツでじゃんけんをして、勝った人から歌っていくのです。

「よし、じゃんけん……」

「『ポンッ』『』」

ちなみにどこの国でもじゃんけんぽいものはあります。

さいしよに勝ったのは……

「俺だな。」

ドイツでした。

「では、流すよ。」

そしてドイツの国歌が流れはじめました。

「ほう……。」

「おおっ……。」

ドイツが歌い始めた瞬間、空気が変わったような気がしました。

ドイツの声は渋いと言つか、こついですがその低音が上手く響いています。

なんと言つか、かっこいいのです。

そして得点は……。

「92点だっつ
」

衝撃の高得点！あの、ドイツがです。あの、ムキムキの、DSのドイツがです！

「……………素直に喜べないのは何故だろうか……………」

あとは、ロシアと日本。

せーの、じゃんけん…………。

「あ、僕は今日喉の調子が悪いから遠慮しとくね。」

ロシア、鮮やかに辞退。

「え…………でも皆歌ってるんだぞ？」

命知らずにもアメリカが言いま「あああああああつ……………！！」

と、北朝鮮が絶叫しました。

「ヤダ・・・こわい・・・こわい・・・さむい・・・さむい・・・。」

どうやらなんらかのトラウマが発動したようです。

「そっ・・・そうだな！喉が悪いんだよな！それならしょうがないよなっ！・・・！」

イギリスが額に大量の汗を流しながら言いました。

「うん、病人に無理させるのは悪いある。」

中国も目を全力で目をそらしながら言います。

イタリアに至ってはと言う土下座をしようとシミレーションして
いました。

「では、ロシアはやらなくていいな。」

最後にドイツが締めました。

残るは・・

「日本やって「嫌です。」・・・?」

珍しく日本が間髪入れずに否定します。

「できればやりたくないです。」

「どうしてなんだい?」

「たぶん皆さんに比べては下手ですし・・・。」

「それでもいいから!楽しもうよ!」

と言うイタリアの言により、渋々ながら日本が歌い始めました。

緩やかなメロディーが、日本の柔らかめの声とマッチし、女性特有の高い声が国歌を魅せていました。

そして、点数は・・・。

「95点?!」

いままでで最高です。

これには日本も驚きを隠せません。

「こんなに・・・高いとは・・・。」

「すごいな!」

「すごいある!」

皆が日本を取り囲み褒め称えます。

「では丁度時間となつたし・・・帰ろうか。」

そして、クリスマス会はお開きとなつたのでした。

クリスマス騒ぎその4（後書き）

みなさんいかがお過ごしでしょうか。

これでクリスマス編は一度完結です。

では、また次の話で。

「メリー・クリスマス！」

クリスマス騒ぎ 後片付け

第三十話「騒いだあとは」

学芸会でも何でも後片付けと言うものは存在しています。

それは騒ぎまくって疲れたあとにやってくる最悪のものです。

「でさ、なんで俺だけ？」

「当たり前でしょう。貴方は家が近いんですから。他の方はヨーロツパで大変なんです！」

「……………なつとくいかねえ……。」

現在日本と北朝鮮はクリスマスの片付けの最中でした。

それにしても……………。

「クリスマス会にエロ本持ってきた奴消え去れ。」

「・・・・・・？なんでここだけやけに冷たいんでしょう？」

「これはコンド・・・なんでおれの発見するのこんなのはっか？てかこんなモン持つてくんな！」

「これは・・・なまこ？？？？なんで日本の海産物が・・・？」

「椅子のしたから水道管が！！！！！」

色々デンジャラスですはい。あと「ピー」持ってきた奴とりあえずしねばいいのに。

「ふう・・・でも大分片付いてきましたよ？」

「あとは細かいゴミ掃除か。」

と、その時です。

日本の家に来客がありました。

「あら・・・こんな夜遅くに来客ですか・・・？」

その相手はなんと・・・

「夜分遅くすまないのである。」

スイスでした。

「あら・・・スイスさん・・・？どうされたのです・・・？」

「いや・・・ここにへんた・・・いや北朝鮮は来ていないか？」

「来ていますけど・・・。」

「ならその訓練を脱走した馬鹿を連れ戻してくれないか。」

「普段なら喜んで差し出しますけど・・・。」

ここで日本は困った顔をします。

「今、クリスマス会の片付けをしていて人手がちょっと・・・。」

「なら、我輩とリヒテンも手伝うのである。」

扉の隙間からリヒテンシュタインも出てきました。

「それなら助かります！ありがとうございます！」

と言うことでスイスとリヒテンシュタインも手伝ってくれることになりました。

その成果か、みるみる内に綺麗になってきます。

「あら・・・？この肌を大分露出されている女の方の本は・・・？」

「ああああああ見ちゃ駄目です！誰かそれを早く・・・。」

セダンセダンセダンッ

「はあ、はあ、・・・。」

なんてこともありましたが。

なんとか片付きました。

「ありがとうございます！」

感謝の意を表し日本は暖かいミルクティーを用意します。

「ありがとうございます。」

「頂くのである。」

「サンキュッ」

そしてしばしの安心と安全のホットタイム。

「では、へん・・北朝鮮、行くのである。」

てかスイスは絶対心のなかで北朝鮮のこと変態言ってるよね。

「では、北朝鮮さん。」

満面の笑みで。

「さようなら!!」

「ちょっと待ったその笑顔何かがおかしい!」

「ぐずぐずするなっ」

「日本さん、また会える日まで。」

そうしていろいろなものが後片付けされたのでした。

クリスマス騒ぎ 後片付け（後書き）

なんとついに三十話！

なんか感慨深いです・・・。

世界のお色気担当（前書き）

注意！

今回の話は題名の通り非常に下の話題です！苦手な人、すぐ回れ右してください！

世界のお色気担当

第三十一話「やっぱりこいつらは」

「なあ・・・・・・・・イギリス・・・」

フランスがいつになく真剣な調子です。

「なっ・・・なんだよ・・・」

そんなフランスにイギリスも驚きを隠せません。

「俺・・・皆にお色気お色気言われてるけど、最近食文化の方が発達してきたし・・・」
そろそろ、世代交代の時だと思っんだよな・・・」

「・・・で、何だよ？」

「だからお前に譲るわ。お色気大使。」

「はあ？んなもんいらねーよ!？」

「だって・・・お前オナニーマラソンやらコンドームがこによこによで・・・」

「つつ・・・それは・・・」

「第一お前ん家の性教育ビデオ何だよ？あんなのほぼポルノじゃないか。」

「っそ・・・そしたらギリシヤの方がいいんじゃないか？」

「いや・・・あれ、内容は普通だし・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

イギリス、万事休すですっ！

「つく・・・あ！！そうだ、北朝鮮！あいつどう考えたって変態じゃねえか！」

「・・・そうかもな・・・では一回本人に訊いてみよう。」

と言うことで北朝鮮家。

「はあ？世界のお色気担当？？なにそれ。」

「だから・・・まあ要するにどれだけ変態かつーことだ。」

まとめちゃいましたよ！？

「なっ・・・俺は変態じゃないぞ！」

「まだ言うか。」

フランスは呆れ顔で説明します。

「いいか？お前は女装好きのうえに、拉致監禁調教好きときた。そう言う人種はなんと言う？」

「はい変態です。」

「分かってるじゃねえか！」

「まあ、とにかく譲るわ・・・。」

なんかいろいろテキトーな感じですね。

「でも、そしたら日本も・・・。」

「日本のどこが変態だあ？」

「だって二次元・・・。」

「そのことは無しで。」

「・・・。分かったよ・・・。で、公式にお色気と認められたなら、何でもやっていいのか？」

「!？」

ここでフランスとイギリスは間違いに気づきました。

そう、北朝鮮は普通の変態ではなかったのです（変態に基準なんてあるのは不明ですが）

「ふふふふふ．．．首輪と鞭用意しなきゃ．．．。」

「あああああ！！！！やっぱり俺現役だから！まだまだいけるから！撤回、撤回！！」

フランスが蒼白になって撤回します。

「えゝなんだよ．．．。」

今回の教訓。

DSはお色気担当にさしたらいろんな意味で危ない。

世界のお色気担当（後書き）

今回の話、非常にすいません。

しかしまたやるかもしれません（撲

怒らせてみないかその1

第三十二話「命知らずな」

「なあ、怒らせてみないか？」

突然北朝鮮がそんなことを言い出しました。

「はあ？誰をよ？」

こちらは台湾。

何気に初登場です。

「だから、日本をだよ。」

台湾はその瞬間侮蔑を強く含んだ顔で北朝鮮を睨めつけました。

「・・・あんだ・・・まさかそこまで馬鹿だとは思わなかったわ・・・
一回死んでくれば？」

「な・・・何でだよ!」

台湾は人間以下を見るような目で尚も見下します。

「あんた・・・いつも日本さんに怒られてるでしょ?それで怖さが分からないの?」

「いや・・・それはそうなんだけど・・・でもなあ・・・」

北朝鮮は納得いかないようでした。

「なんか・・・本気じゃないて言うか・・・。。。。。」

今度こそ台湾は目つきを変えました。

具体的に言つと今まで猿人類を見るような目だったのがミジンコを見るような目になつたのです。

「いや、あんま変わんなくね?」

「はあ・・・あなたが極度のマゾヒストか死にたがりなら止めないけど・・・。」

「俺はどっちか、つーとSだな。」

「んなもん分かってるわ!!」

「とにかく、そんなに日本さんの本気が見たいならまず日本さんの親しい人達に訊いてみれば?」

「ああ、分かったよ。」

「はい、いつてらしゃい。(そして二度と戻ってくんな)」

「じゃあ、まずは枢軸のあいづらか・・・。」

くドイツ宅く

「日本の本気か?・・・そういえばあんまり見たことないな・・・?」

ドイツは首を傾げています。

「知らないならいいんだ。」

「?でもなんでお前はそんなことを調べているんだ?」

「さよなら!!!!!!!!!!」

「あ!」

なんとも逃げ足の速いことです。イタリアには及びませんが。

「次は・・・イギリスか?」

くイギリス宅く

「おいイギリスくお邪魔する・・・」

「あははつくすぐつたいなくおい、やめろよ・・・あははっそこは

駄目だつて・・・」

扉を開けると、傍目から見たら精神がイッっちゃてる人みたいなイギリスが。

パタン。

「イギリスも疲れているんだな・・・。」

やはり北朝鮮も妖精は見えなかったようでした。

くフランス宅く

「おいフランスく」

「ああ・・・北朝鮮か・・・。」

フランスですが、今日は様子がおかしいです。

「いまさつき彼女にふられた・・・。このさいお前でも・・・。」

「うああああ！…よるな！近づくなああああ！」

どうやら精神的ショックにより一時的に己を見失っているようでした。

「ひいひい！？」

脱走。

それから色々なヨーロッパのお家に寄ったのですが有力な情報は無し。

むしろ命の危険にさらされたことの方が多かったみたいです。

「はあ、はあ、危なかった……。あとは……。アメリカか……。」

「アメリカ宅」

「……日本の本気？」

「そうなんだ。もし知っていたなら……。」

「そそそそそそそそそそそんなの知るわけじゃないK A」

目を全力で逸らし額に汗をだばだば流しながらアメリカが答えました。

「……知ってるんだろ？」

「だだだだから知らないZ O」

「……教えてくれたらあのかの時の写真、譲ってあげてもいいんだけど……。」

あのかとは北朝鮮が日本を拉致監禁したときに撮った写真です。

「そ……そんな写真持つてるんだぞ！」

持つてるのもどうかと。

「あついいのかな〜これ、実は胸チラんだけどな〜？」

「いくら積みばいいんだい？」

あつさりひるがえしやがりました。

「じゃあ教えろ！」

「うん・・・っは！！駄目駄目！そんなに知りたいんだったら日本に直接訊けばいいんじゃないか！」

「え・・・。」

アメリカは一回誘惑に釣られたもののそれでも教えようとはしませんでした。

「ん〜・・・分かったよ・・・。」

でも北朝鮮は知らなかったのです。

このあと自分の胸に深いトラウマを残すことになることを。

怒らせてみないかその1（後書き）

台湾をようやく出せました。

台湾は個人的に好きです。

怒らせてみないかその2

第三十三話「地獄」

北朝鮮が日本の家に向かっていったその頃。

日本は朝風呂でした。

「はああゝ和みますねゝ・・・」

ストレスが溜まっていたのかとても幸せそうな面持ちです。

例えばイタリアが居ない時のドイツみたいな。

しかしお約束で、

「にほゝん！ちょっと訊きたい事があるんだけど！」

北朝鮮が襲来してきました。

「あああ・・・あのですか・・・まったくなんてタイミングが悪いでしょう!」

「にほん?入るぞ!」

「入ったら斬りますよ!今風呂入っているので!」

「ひい!わ・・・分かった・・・」

「まったく・・・」

日本は慌てて脱衣所へ。

するとナチュラルに北朝鮮が立っています。

「・・・、・・・、・・・、・・・、」

「あ、やべばれた・・・。」

チャキ。

ツザ！

「うあああああああ！？」

日本は限りなく無表情で攻撃してきました。ものすごい殺気を出しながら。

「次は鳩尾に刀の峰を叩き込み頭へ踵落としをします。」

「明確に説明しなくてもいいから！！！」

避け続ける北朝鮮ですが、あることに気がつきました。

「日本？攻撃するより服着たほうがいいんじゃないか？」

今の日本はタオル一枚だけ。そのため攻撃する度なまっ・・・生足が・・・。

「あぎゃあああああああ！！！！！」

そしてその一言が北朝鮮にとっての致命傷になったのです。

「さて・・・こいつは・・・中国さんにでも持って返ってもらいましょうか・・・」

北朝鮮はそのときの様子をこう語ります。

「だって・・・日本の目に光が宿ってなくて代わりにすごい鬼気が・・・殺られるみたいだな・・・」

「っは！」

北朝鮮覚醒。

ここは北朝鮮の家。

なんとか誰かに運んでもらえて、生還できたみたいでした。

チッもう少しだったのに・・・。

「なんか俺かわいそう。」

そして北朝鮮が仕事し始めようとパソコンに向かいました。

「あれ？」

しかしなにかがおかしいのです。

「ウイルス警報・・・254件！？ありえねえけど感染してる！ああああ・・・」

結局北朝鮮はそのウイルス駆除に14時間かかりました。

完。

怒らせてみないかその2（後書き）

もうすぐ大晦日ですね。

お餅がとってもおいしい季節です。

大掃除

第三十四話「駄目人間」

そろそろ年末。

日本の家ではとても賑わっていました。

「はいらっしゃいらいらっしゃい!! 獲れたての青魚だよ!」

「では、少し……。」

「はい! まいどあり!」

買い物から帰ってきた日本。

「はあ…… 帰ってきたすぐから大掃除ですか…… 老体にはきついですね……。」

次は大掃除です。

「まずは・・・自室からいきますか。」

と言つことで自室。

「けほっ・・・埃がすごいですね・・・。」

取り合えず要るもの、要らないものに分けていきました。

「この三年前のフィギュアは要らない・・・この服は要る・・・この北朝鮮さんが贈呈してきた服は全力で要らない・・・このドール達は要る絶対・・・」

と言つような感じで分けていくと大分すっきりしました。

「次は埃ですか・・・。」

以後、掃除の様子。

「けほっ・・・ここはすげっ・・・ここはがほっ・・・なんでこんなにあるん・・・がほっ・・・」

色々大変だったようです。

「はあ・・・いささか疲れました・・・。少し休憩しますか・・・。」

そしてしばしの休息。

「ふう・・・。」

10分程休憩を執ってからまた再開。

「げげげほ・・・案外台所は少ないですね・・・。」

（3時間後）

「お・・・終わりました・・・。」

「あつ・・・。」

しかし日本はここである事に気がつきました。

「今日北朝鮮さん一回も来ていません……。」「

く北朝鮮宅く

「あゝ大掃除なにそれ？おまつ……。年末は遊ぶためにあんだよ。掃除なんかしてられっか！

ああゝごろごろごろゝゝゝふおお眠たい……。」「

く日本宅く

「なぜかはよく分かりませんがいまは北朝鮮さんを激しく殴りたいです。」「

北朝鮮はやっぱり駄目人間でした。

大掃除（後書き）

明日は大晦日。

紅白歌合戦が楽しみです。

大晦日なのに…

第三十五話「貴方こんなところで何をしているんですか!」

さて今日は大晦日ですが元気にいきますよー!!

「貴方!こんなところで何しているんですか?!」

はい?

「今日は大晦日!それなのに貴方はネットでアニソン聴きながらいる・・・これは

実に駄目なことです!いますぐコタツにでも入っていらっしやい!」

え・・・私はなんで日本に説教されてるんでしょうか?

「あとは私たちがなんとかしときますから!帰ってください!」

いやいやちよいまち!私にも作者と言っ指名が・・・

「それなら・・・」

ガチャウィーンドカガンッ

「このハクローン君第一号がやってくれます。」

いやあなたなにしてんのおおおお！？

「さあこれで万事解決！おこたに入ってらっしゃい！」

全然駄目だからそれ！せめて人間っぽいものにして！

「しょうがないですね・・・フランスさん！出番ですよ！」

「よんだ？」

なんかキタ！？

「あとは語り部はフランスさんが受け継いでくれます。」

え〜〜〜すごい心配なんだが・・・一回任せてみようか・・・。

ということで皆の憧れフランスだよ〜今日も日本ちゃんは美人だよ
ね〜

ほんとベッドに誘いたいぐらいだな。

あ、着物って胸は押さえられるけど腰のラインが出てなんとも・・・。

「駄目駄目駄目駄目駄目！！！！」

「なんです作者さん？いきなり登場人物になって？」

はいフランス駄目！

「ふう・・・何処が駄目だったんでしょう？次は・・・イギリスさんですか・・・？」

もう・・・次はちゃんとやってね・・・。

コホンッ俺はイギリスだ。正式名称はグリートブリテンおよび北部アイルランド連合王国だ。

眉毛とか言っただ奴、死刑。ツンデレ眉毛とか言っただ奴、私刑。

まあ、特別に大英帝国呼びを許可してやっても……。

「はい駄目駄目！」

「またですか……もう……。」

じゃあもうやめてやる！この状態で投稿してやるううううう！！

「待ちなさい！許しませんよ！言ったからにはきちんとやり遂げるものです！」

うるさい！もう投稿すつから！もうするから！

「駄目です！」

投稿！

「駄目です！」

とーこー！！

「だーめーでーすー！」

あれ・・・？なぜかこんなところに来てしまったフィンランドです・・・？

あれ・・・？確か僕スーさんと一緒に居たはずなのに・・・。

えっと・・・モイモイ！

新年でもこの小説をよろしく願います。

じゃあ僕は帰りますんで・・・。

大晦日なのに…（後書き）

大晦日です。

しかしキタユメ。から眼が放せません！

あとは紅白の某アニソン歌手が出るのが楽しみです！

最後にこの小説を新年になっても宜しく願いします！

新年です

第三十六話「今年もはじけます」

何処からか琴の音が聞こえてくる純和風の部屋。

そこに着物姿の北朝鮮と日本がやってきて正座します。

「「あけましておめでとうございます。今年もこの小説を宜しくお願いします。」」

新年の挨拶、終了。

「あゝ終わった終わった。さて、着替えよーと」

「なんで北朝鮮さんまでナチュラルに女用の着物なのかが分かりませんが終わりましたね。」

「とりあえず祝いの酒でも呑もうぜ。」

北朝鮮は酒を勧めてきましたが、日本は困った顔をしました。

「いや、私はお酒は止めときますね。」

「何だよ!」

「私は健康の為に酒は余り口にしないので・・・。」

健康のことを言ってるようですが、実際は医師に、

「塩分過多の上、酒まで吞まれたら俺は泣くぞマジで!」

と止められているからです。

「分かった。」

北朝鮮は納得したようなそぶりでしたが、なぜか携帯を取り出しました。

ピッポパッポ。

「あゝ日本の医師？今日さー新年だから日本酒呑んでもいい？・・・
OK？うんじゃ。」

ガチャ。

「いいてよ。」

「いや貴方なにしているんですか！？」

「なんかよー『今せつかく詰めに入ったのに！邪魔すんな！』とか
かんとか。」

「はあ・・・。」

「まあ、とにかく酒呑んでもいいらしいぜ。」

「まあ、今日くらいは・・・いいでしょうか？」

「おーおーいいぞー。じゃあ俺は酒取ってくるわ。」

そして何故か北朝鮮の鞆からかなり度の強い酒が。

「なんで酒瓶持ち歩いているのかが意味不明ですが、これは好都合ですね。」

その瞬間北朝鮮は心の中でほくそ笑みました。

（よし！俺の計画どおり！）

北朝鮮はこんな作戦を心の中で立てていたのです。

（日本を酔い潰してそのまま家にお持ち帰り）

しかも話を訊くところ、酒は弱そうです。

（コレは上手くいく！）

「じゃあ日本、いまから呑み比べしないか？」

「え……。まあいいですけど……。私と呑み比べると面白くないですよ？」

（よっしゃああああ！俺の時代がやってきたぜええええ！）

なんか喜ぶ馬鹿一人。

「じゃあ注ぐぞ」

コポポポ・・・

二人の杯にお酒が満たされました。

「じゃあ、」

「呑むぞ。」

「頂きます。」

北朝鮮はお酒が強い方です。

これはもう勝ったも同じことだと北朝鮮は思っていました。

（三時間後）

（うん、これは確かに面白くない。）

あれから三時間も経って瓶が三本空けられた頃。

日本は顔色一つ変えずに呑み続けています。

むしろ北朝鮮の方が危なくなってきました。

（なんで・・・こんなに・・・強いんだ？・・・。）

「よし、止めよう!」

そしてとうとう北朝鮮が降参しました。

「あら？もうですか？私はまだまだいけますけど・・・。」

（バケモンかよ?!）

これはラトビアと勝負が出来るかもしれません。

日本の特技を垣間見た北朝鮮でした。

新年です（後書き）

新年あけましておめでとございます。

更新できて良かったです。

「コンビでその1」

第三十七話「いつもより多くシリアスっています」

「あら・・・飲み物とお茶菓子が足りません・・・。」

それは、中国と香港、台湾、韓国、北朝鮮が遊びに来ていたときのことです。

なんと飲み物とお菓子が切れてしまったのです。

「えゝにほーん買って来てゝゝ。」

「北朝鮮さん。言われなくても買ってきますがその間変なことをしたら・・・斬りますよ?」

「うん、そう言われたらやれないYO」

若干アメリカ化して心に誓う北朝鮮でありました。

「では行ってきます。」

「行ってらっしゃい」

「行っ て来いなんだぜ！」

「とは言ったものの・・・。」

日本は今俗にコンビニと呼ばれるところに居ます。

おなじみセブンイオンです。

「どーせコンビニなんですけどね。」

とりあえず自動ドアをくぐりました。

「買うものは・・・ジュースと・・・あとはスルメとかりんとうですかね・・・？」

選択がおばあちゃん家でそんな感じです。

と、ここで日本はあることに気がつきました。

コンビニなのに人が少ないのです。

人はいることは居ますが、不良ぽい人が5、6人、あとは子連れ。

（な〜んか嫌な感じです・・・。）

さっさと買って帰りましょう、そう思って売り場に向かおうとした時です。

一人の男が店内に入ってきました。

結構顔はいい方です。

しかしそんなとりとめのない思考が次の瞬間破壊されました。

ターン・・・。

「きゃあああああー！」

なぜか平和な街中から銃声が。（注ここはスイス家ではありません

「あら・・・これはもしかや強盗・・・？」

「いまから店内に居る奴は全員人質だ。ケータイ、その他情報端末は全部捨てる。」

「おい、この人に逆らったらとんでもない目に会わせえ？」

「・・・。」

強盗よりは性質悪いようです。

コンビニでその1（後書き）

結論。

シリアス書けねえ！！

どうしたら書けるようになりますか？

コンビニでその2

第三十八話「フラグ立てんな」

く日本宅く

「日本まだあるか？」

「どう考えてもまだでしょ。5分しか経ってないんだし。」

「うんそうあるね・・・あっ！！！！」

「どした？」

「ジャ○プ買ってきて言うの忘れたある！！！！！」

「果てしなくどうでもいいんだぜ！」

「ちょっとケータイに電話かけるあるね。」

くコンビ二く

「えゝ一人ずつケータイなどは捨てるように。」

（これで通信手段がなくなりました・・・。）

ブー、ブー、ブー。

しかし何故かケータイが鳴っています。

かけた相手は・・・

（えっ・・・中国さん?!）

遠くの方で「にーにと呼ぶあるー!」と言ってる気がしなくもないですが、無視。

（こんなときに・・・。）

下手に出ても相手を刺激するだけなので切りました。

（あとで謝っておきましょう・・・。）

く日本宅く

「・・・？切れたある・・・。」

「あら珍しいわね。」

「なんか忙しかったんじゃない？あとからかけ直してみれば？」

「そうあるね・・・。」

早く気づけよ。

くコンビニく

「全員ケータイは捨てたな？では、次は人質となってもらおう。」

その言葉で親子連れなんかは涙目になっています。

母は子供を守るようにぎゅっとしていました。

（きましたか・・・。）

親玉らしい男と不良がめいめいに縄を持って手足を縛りつけにかかります。

「じつとしてろよ。」

と言っても店内に居るのは日本と親子だけなのですぐ終わりました。

（手足が拘束されましたか・・・まだ大丈夫ですね。）

何が大丈夫なんでしょうか？

く日本宅く

「これはおかしい的な。」

「もう何回も電話しているのに全然出ないあるよ……。」

「これは……。」

「ケータイをトイレに置き忘れたとか？」

「ああ、そうかも。」

早く気づけて！

くコンビー

「では、お前らはそこでおとなしくしている。変なことしたら撃つぞ。」

（刀がないのは大きいかもしれませんが……。）

当然こんな街中で刀を持ち歩いたら銃刀法違反で逮捕です。

（はあ・・・嫌なときに出くわしましたね・・・。）

警察はまだ来ません。

「でも・・・暇だな・・・。」

不良Aが呟きました。

「もっと・・・暇つぶしつか・・・。」

不良はなにかを探すように辺りを見回します。

そして日本と目が合いました。

「あゝこんなところに女が居るじゃん？」

「つつ・・・！」

日本は思わず後退ります。

（なんか嫌な予感が・・・）

続く？！

コンビニでその2（後書き）

余談ですがよしおはコンビニと聞くと知ってる方がいらっしゃるのかは分かりませんが、

「たまご下さい。」

「たまご一つ。」

のフレーズが頭に浮かんでしょうがないんです。

知らなかったらすいません。

コンビニでその3

第三十九話「バカだ」

日本は後退りました。

不良の自分を見る目がまぎれもなく好色の目だったのです。

「うああああん！！！」

と、その時でした。

突然親子の子が泣き出したのです。

無理ありません。

まだ小さいのに手足を拘束されて床に転がされている状態なんですから。

「ッチ・・・お前ら黙らせる。」

「菜穂子!!」

母親が叫びました。

そうして一人の不良が近づいてきて、鞆から何か取り出しました。

次の瞬間。

「ほゝら良い子でちゅねゝおゝよしよしほらガラガラでちゅよゝ」

鞆から取り出したものとは、赤ちゃんとかによく使うガラガラです。

しかも不良が赤ちゃん言葉になってあやす姿は正直言って、

(こいつ馬鹿だろ!!!!!)

な気持ちにさせるものでした。

「リーダー!泣き止みました!」

「っふ・・・こんなこともあるつかとおもちやを用意しておいた俺はやっぱり天才だな!」

（自前!?!）

「ほーらお嬢ちゃん飴ちゃんだぞ。」

しかも鞆の中から飴玉を出して渡します。

（大阪のおばちゃんか!?!）

「リーダー俺にもください!」

「俺も!」

「俺も!」

「っふ・・・しょうがないな・・・ほらよ。」

（バカだああ!?!?!）

日本は心の中で不良軍団をバカ軍団と認識を改めました。

「ん？なんだお前らも飴ちゃん欲しいのか？特別に分けてやらんこともないぞ。」

「いいえ私はさつき齒を磨いたばかりなので。」

日本は丁重にお断りしました。

（でも・・・何故警察が来ないんでしょうか？）

（まあ・・・携帯電話を取られてしまったからそれは当たり前でしょうけど・・・）

日本はどんな思考の渦へ沈んでゆきます。

（そもそもこの人達の目的は何なんでしょう？まさか暇潰しとか？）

（見たところ強盗ではないようですし・・・こればかりは分かりませんね・・・）

「日本宅」

「これはやばいある……。」

「日本さんが買い物に行ってからもう1時間も経っているわよ!？」

「行ってみた方がよくないか？多分近くのコンビニだろ。」

「事件に巻き込まれている的な。」

「それもありえるんだぜ!」

「じゃあ我が行くある!」

「なんかあったら呼べよ。」

ようやく動き出した亜細亜組です。

くコンビーく

「リーダーそろそろ・・・」

「ああ、分かってる。」

コンビニでその3（後書き）

明日から塾が復活するので更新時間がまた遅くなります。

そのところご了承ください。

コンビニでその4

第四十話「俺・・・この騒ぎが終わったら結婚するんだ・・・」

「えっと・・・一番近くのコンビニはここあるね・・・」

中国がセブンイ○ブンに着きました。

しかし何気なくコンビニを覗き込むと衝撃の事態が。

「えっ・・・あれは日本・・・が縛られているある！その周りには
変な男がっ・・・」

中国はさっそく行動を起こしました。

ピッポッパッ

「あゝもしもし警察の方あるか？なんか今近くのコンビニで強盗ほ
いものが・・・」

あーうん、間違っちゃいないよ、間違っちゃ・・・。

くコンビー

「なんか・・・思ったより楽しくないな・・・」

「そうだな・・・。」

「あつ・・・ちょっと待てよ・・・あつた!!」

「おゝそれは!!!!」

「トランプだよ。遊びの王様だ。」

「お前・・・やるじゃん！リーダーなんの遊びしたいですか？」

「俺は・・・ババ抜きだな・・・。」

「えっ・・・ちょっと古いかも・・・」

「なに言っただ！ババ抜き程面白いものはないんだよ！」

と言う感じで（不良たちだけが）和気藹々と和んでいたときでした。

突然大きなサイレンと人の動きが。

「えっ・・・あれはまさか・・・」

そう、念願の警察です！

（ついにきましたか！！）

誰が通報したのかは分かりませんがこれは好都合でした。

「なんで警察が来るんだよ！？ケータイとかは貰ったはず・・・」

「わからねえ・・・でもこれはやばいぞ！」

慌て始める不良。

「とにかく・・・どうにかしなければ・・・」

外からは「おとなしく人質を返して投降するようにー！」とか言うてます。

「こうなったら・・・」

「きゃっ!?!」

いきなり日本を掴み上げ首筋にナイフを付き立てました。

「この女が見えねーのか!?!お前らが一步でも動いたら・・・切るぞ!」

中には野次馬で「あれ日本さんじゃ・・・」と言う人も出てきましたが無視の方向で。

（はあ・・・仕方ないですね・・・）

日本は心のなかでため息をつき、それから行動を起こしました。

ボキバキゴキッ

何故か不良の下の方から鈍い音が。

「え．．．なに．．．いやあれ？」

それは日本が自分で手首の間接を外しているからです。

「よつと．．．こんなもんでしょうかね．．．」

そして間接外して縄を解きます。足も同じように。

良い子の皆さんも悪い子の皆さんもまねしないでネ

そして日本は呆けてる不良の首筋に手刀を叩き込みました。

「ふう．．．」

そして辺りを見渡すといつのまにか。

「すみませんっしたあああああ!!」

土下座の不良たちが。

「あれ・・・?」

それを好機と見た警察は入ってきました。

何故が入ってきた人の中には中国が。

「日本!無事だったあるか!?」

「なんでいるんですか!?」

〵後日談〵

「あの不良たちの動機は『ひと華さかせたかったんでえ!!』だそうです。」

「やっぱバカだあああ!!!!」

コンビニでその4（後書き）

今回はちょっとシリアスな部分がありましたね（どこがとか訊いては駄目です）

まあこんな話に四十話もつきあってくださりありがとうございます！
（え・・・お前が無理やり付き合わせたって・・・？・・・死にたいの？）

と言うことでこれからもよろしく願いします！

二次元ですね

第四十一話「やっぱり」

今日はG8会議です。

G8会議なのですが・・・。

「あゝ・・・それでは会議を始める!」

イライライラ・・・

「・・・・・・・・今日は地球温暖化のことなんだが・・・・・・・・」

イライライライライラ・・・

「削減目標は・・・」

イライライライライライラ・・・

「・・・・・・・・。」

なぜか凄い殺気を出している人がいました。

「なあ・・・日本？どうかしたのか？」

「いいえなんでもありません続けてください。」

「・・・・・・・・ああ・・・。」

どう見てもなにかあったようにしか見えません。

「それでだな・・・今削減目標・・・」

イライライライライライライライライライライライ
イラ・・・

「あゝ日本・・・・・・・・サン・・・なにか意見どうぞ・・・。」

「私は皆さんと同じでいいです。」

「ああ……そうか……。」「

會議を進めるイギリスは早くも挫折そうです。頑張れ！

勿論他の人も自分が殺られるので口出ししません。

頼りのロシアは・・・

「兄さんは私のもの他の女と喋ったら許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない……」

「つべ……ベラルーシここG8会場なんだけど……」

「許さない許さない許さないそう結婚結婚結婚結婚結婚血痕結婚・・・」

「ひいひい！！！！」

天然のクーラーに悩まされていました。

一方ここは日本宅。

相変わらず不機嫌（どころの話ではない）です。

「ああまったくもうあと一週間しかないのに時間ありません。」

不機嫌の理由はこの前北朝鮮とかが遊びに来たとき。

北朝鮮はコミケ用の原稿などに酒をかけてしまったのです。

コミケまであと一週間。

早く原稿を仕上げなければ。

当然北朝鮮は成敗されました。

そんなわけでG8会議なんか出てる暇なんて無いのです。（日本の心中では）

「早く仕上げなければ・・・早く・・・。」

そして3日後。

「できたあああああ！！！！！」

原稿完成。

ちなみに3日間家のなかに缶詰状態で。

あとは出すだけです。

「はあ・・・やっと・・・やっと終わりました・・・でもなんで記憶が曖昧なんだろう？」

どうも日本は二次元が絡むと暴走するようです。

～後日談～

「日本がもとに戻った？ひゃっほう！！これでまた新しい基地を作

れるね!」

「なにか言いました?」

「いいえなにも言っていないせん。」

「いやそうではなくてなんと聞いたか聞こえなかったものですから・・。」

あとしばらくイギリスは立ち直れませんでした。

二次元ですね（後書き）

最近は朝が早くなったので眠くてたまりません。

今も2回ぐらいキーボードの上で意識飛びかけました。

あつやせいのかみさまがあらわれた！

第四十二話「願いは」

「ほっほっほ、わしは神様じゃ。」

日本は目を開けるとなぜか変なものがいました。

「不法侵入者ですね。斬りますよ。」

「ちがうちがう神様！神様なの！」

「まじで！？」

そこでまた一人反応した者が。

「なぜ貴方がいるんです？」

なんとそれは北朝鮮でした。

「いや・・・俺もよく分からんし。」

大体ここがどこなのかまったく検討がつきません。

「ここは夢の中じゃよ。」

自称神様が答えました。

「夢？北朝鮮さんが居るのも夢ですか？」

そうであつたらいいと言う風に日本が訊きます。

「いや、お主らはいつしよの夢を見てるだけじゃ。そいつは本物じゃよ。」

「チツ・・・」

「なんかひどー！！」

「で、さっそくお主らの願いを叶えてあげよう。」

「はあ？」

「さあ、なんでも好きな願いを！」

神様はキラキラと効果音を出しながら願いを催促します。
っばいもの

「えゝなんでもいいのか？」

「勿論じゃ！」

そして北朝鮮はしばらく考えた後決めました。

「えっと、日本を跪かせて隷属させてみたい。」

「無理。」

神様即答。

「無理とはなんだ無理とは！」

「どう考えても無理じゃよ。」

「そうですよ！て言うか貴方心の中でそんなこと考えてたんですか！？」

「・・・妄想は・・・男子の特権だぜ？」

「妄想の種類が違います！」

「と言うことで無理。却下じゃ。他は？」

「えゝ世界征服？」

「いきなりスケールがでかくなりましたね！？」

「無理。」

「なんだよ・・・じゃあせめて日本を「無理。」

「最後まで言わせろよ！」

「じゃあなにが出来るんだよ!？」

とうとう北朝鮮がキレました。

願いの基準がおかしい気がしますますがそれは気にしないようです。

「このへっばこ神様！」

「な・・・なんてことを言うんじゃ! わしは神様じゃぞ!」

「こんなの神様違うし。もしかして落ちこぼれとか？」

「・・・神様ったら神様！」

「凶星？」

「神様ったら神様で神様なの！」

とうとう二人は喧嘩し始めてしまいました。

その騒動の外れ。

日本はその光景を見て眩きました。

「嗚呼・・・何処か静かなところに行きたい・・・。」

あつやせいのかみさまがあらわれた！（後書き）

どうでもいい小噺

エストニアがユーロ導入したらしい。

世界のお色気担当2（前書き）

注意！

この話は非常に下なんで苦手な人バック！！

世界のお色気担当2

第四十三話「キレた」

フランスは苦悩していました。

「うーん・・・やっぱりギリシャしかないな・・・」

あれから北朝鮮はいろんな意味で危ないし、イギリスは断固として断るからです。

「お色気担当・・・そんなに悪いかな・・・？」

そう言うことで回数だけのギリシャに頼みこんでみることにしました。

くギリシャ宅く

「あれ？ギリシャは？」

「ギリシャなら日本家だぞ。」

「ええっ・・・遠いな・・・」

空港やら税関やら通り抜けてやっと日本家へ。

「そうか・・・イギリスはアメリカを殴る為だけにこんな苦勞を・・・」

ちよつとイギリスの気持ちが分かったフランス。

「おいギリシャ居るか？」

「ん・・・。」

返事があつたので日本に無断で家の中へ。世間ではそれを不法侵入と言います。

「あらフランスさんいらっしやい。」

そこでは猫に囲まれて非常に和やかな日本とギリシャが。

「何の・・・用で・・・来た？」

「いやゝ考えた結果やつはお前だろ！みたいな結論に。」

「だから・・・何が・・・？」

「お色気担当だよ。」

「・・・ヤダ・・・。」

「諦めろって。」

「ヤダったらヤダ・・・。」

「子供かお前は。」

どっちが子供なんでしょうか。

「だってイギリスは嫌だって言うし・・・。」

「別にお色気担当なんて要らない気がします。」

日本が静かにつっこみました。

「ギリシャさんも・・・。」

「？」

「二次元にはまればいいんですよ!!」

「!？」

それからイギリスにも熱弁した二次元談義をギリシャにもぶつかましました。

「これからの時代は二次元ですよ!!!!」

「そんなんだから世界最下位なんだぞ。」

フランスが眩きました。その言葉を日本が聞いてしまったのです。

「だから最下位ですって・・・？」

「え・・・あ・・・うん・・・。」

「セック○レス大国で悪かったですねええええ！！」

「いやそこまで言っていない・・・。」

「国民の約三分の二が二次元にしか興味なくて悪かったですね！！」

「まじで！？」

「二次元のどこが悪いんですか！あんなに愛らしいし死ぬこともないですよ！？」

「生の方がいろんな意味でいいだろ。」

「それができないから二次元なんですよ！？貴方は日本男子を馬鹿にしているんですか！？」

「いやむしろそっちの方が駄目だろ。」

「コン〇ームなんて必要ないです！二次元で十分ですううう！！！」

「日本お前女だったはずだろ！？こつちでは。」

コラ、そこ紛らわしいことを言わない。

「そんなだつたら日本やめます！日本やめて東ティモールになつてやるううう！！」

「なつちや駄目えええ！！その国ほんとにあるからね！？訴えられるから！てか前にもこんなことが無かったか！？」

「・・・東ティモールは・・・やめた方が・・・。」

今日の教訓。

日本にデリケートな話題を言ったら駄目。

おまけ。

「そうか・・・日本は二次元にしか興味無いのか・・・そうか・・・」

落ち込む変態第二号。

世界のお色気担当2（後書き）

一言

またやらかしました。

携帯でその1

第四十四話「生意気な」

「おい日本居るか？」

いつものように北朝鮮が遊びにきたときのことです。

「あれ？居ないのか？」

クイクイ。

「誰だ俺の袖を引っ張っている奴は？」

そこには真っ黒な長い長い髪の毛の女の子が。

「ぎゃあああああ幽霊!？」

「北朝鮮さん失礼ですよ。」

いつのまにか日本が居て女の子は日本の後ろに隠れてしまいました。

「なあ・・・日本？その不気味な女の子はなんだ？祟られそうなんだが。」

「失敬な。この子はお隣のお子さんです。」

どうやら女の子はお隣さんのようです。

「よく遊びに来られるんですよ。」

「ふん・・・飴食うか？」

北朝鮮はポケットから飴を取り出し女の子に差出しました。

しかし女の子は日本の後ろに益々隠れてしまいました。

「あれ？」

「その子は人見知りで文章でしか会話できないんですよ。ケータイのメルアド教えて下さい。」

「ふん・・・ほらよ。」

それにしても髪が長くてまるで日本人形のようにです。不気味です。

ピロピロ

「お・・・来た。」

早速メールを確認します。

件名：

オマエ女装とかクソワロタｗｗはやんねーよバカじゃねｗｗｗｗ北
朝鮮終了のお知らせ¥（＾０＾）ノオワタ

あと日本姉ちゃん拉致んな。服のセンス悪！女装するんだったらま
しな服着れよｗｗｗｗ

どーせ部屋でもなんか妄想してんじゃないの？マジキモイキモイキ
モイ

「このガキ殺す！！！！！！」

「きゃー児童虐待ーたすけてお姉ちゃんー」

「喋れんじやないかてめえ！！！」

「こら北朝鮮さん！子供を苛めてどうするんです！許しませんよ！」

「違うむしろ俺が苛められた！ここに傷ついた！ガラスのハートに罅^{ヒビ}入った！」

「ガラスはガラスでも防弾ガラスでしょうが。」

「お姉ちゃん怖いよー助けてー」

「よしよし。」

「わかった。ならこつちもメールで勝負だ！！」

件名：

オマエって幽霊みたいだな。きも！

「送信・・・っと。」

ピロピロ

「・・・お姉ちゃん・・・こんなに酷いメール送ってきた・・・。」

「北朝鮮さん？」

「明らかにあっちの方が酷いメール送ってきたけど!？」

「なに言ってるんですか。メールではこんなに礼儀正しいんですよ!？」

カポッ

件名：今日は

今日はとてもいい天気ですね。散歩でも行きたい気分です

よければ今日は一緒にお散歩しませんか？とても気持ちよさそう・
・（笑

「詐欺だあああああ！！！」

さてこの少女、なにやら一波乱起きそうな予感です・・・。

携帯でその1（後書き）

どうでもいいですが話数が44でなんか縁起悪いです・・・。

携帯でその2

第四十五話「逆に五月蠅い」

ピルルッ

「きたか・・・カチカチカチ・・・送信！」

ピリリッ

「・・・、。。。送信。。。」

ピルルッ

「・・・くそこの野郎・・・・・・・・送信！」

ピルルッ

「・・・、。。。、送信。。。」

「貴方達・・・何してるんですか？」

さつきからこの調子です。まったく不毛な争いです。

「だってこいつが・・・」

「子供にキレてどうするんですか？貴方は一応大人でしょう？しかも国。」

「それはそうだけどこいつが・・・」

「言い訳は無しです。いい加減にして下さい。」

「お姉ちゃん・・・この人怖い・・・。」

「よしよし。・・・北朝鮮さん？」

「俺は悪くねえー！！！！」

と北朝鮮が喚いていたときでした。

「にほーん我あるよー。」

来客です。

「あらちゅう・・・兄さん如何したんです？」

中国と言いかけてましたよね？

「ああちよつと・・・北朝鮮、お前に荷物が届いているある。」

「何だ？」

とりあえず北朝鮮は荷物を受け取りましたが「重っ！！！！」

「なにこれ重い！！なに入ってんだよ！？」

中身を見ると・・・。

「つるはしと水道管とウォトカ？」

明らかにあの人からの荷物です。しかも底の方には雪？みたいなものが……。

「新たな脅迫か……。」

どうやらロシアからの脅迫のようでした。

まあそれはどうでもいいのでほっといて。

「どうでもよくないから！」

「あれ？その子はなにがあるか？」

ここで中国が女の子の存在に気づきました。

「この子は近所に住んでいる華^{はな}ちゃんです。」

「あいやー可愛いあるねー。」

「何処が!？」

「この子は人見知りでメールでしか会話が上手くできないんです。メルアド教えてください。」

「いいあるよー。」

すると早速メールが。

件名：

いちいち語尾にあるとか付けなくてもいいから。業とらしいしww

あいやーとか昔の映画ですか？

「なにあるかこいつはーーーー！！！！」

「どうしたんです？」

「こいつが酷いメールを送ってきたある！」

「だから言っただしょう。コミュニケーションが下手だと。」

「そう言う問題だったあるか!？」

ピルッ

「何あるか?。」

件名：

<本文はありません>

ピルッ

「ひい!？」

件名：

<本文はありません>

「何度も空メール送るのは止めるある!!」

さてこの少女、日本以外には容赦が無いようです。

「もう我帰るある!」

中国は帰ってしまいました。

「あら……。じゃあ北朝鮮さんも帰ってください。」

「どう言う流れ!？」

と、そこにまたもや来客が。

続く……かも

携帯でその2（後書き）

どうでもいい小噺

今アジアで一番経済成長が高いのが中国らしい。

中国さんはんぱないっすよ。

携帯でその3

第四十六話「触らぬ神に祟りなし」

と、そこでまたもや来客が。

「やあ、北朝鮮君居るかい？」

「げえ！！ロシアかよ！！！！」

今やロシアアレルギーになりつつある北朝鮮は苦虫を156匹ぐらいじくり噛み潰して味わって飲み込んだ様な声を出しました。

「ちゃんとプレゼント届いたか見にきたんだけど・・・届いた？」

「ええ届きましたヨ。」

ちよつと片言になりかけの北朝鮮。

「あと日本ちゃん？」

「はいいい!？」

今度は日本。日本も色々ロシアアレルギーになりつつあるようです。

「あのことだけど．．．やっぱり無理だつて。あれくれるなら別だけど。」

「はい．．．。」

「なんだよそれ。」

日本も日本でいろいろあるみたいですね。

「ねえちゃん．．．。」

「なんですか？」

「あの人誰．．．？」

華が問いかけました。

「ああ、あの人はロシアさんですよ。中国さんの隣にある国です。」

（まあ結局全部ロシアになるんだけどね。）

ロシアが心の中でこう言ったのは言つまでもありません。

「メール……。」

「ああ、えつとロシアさん？携帯電話持ってます？」

「勿論だよ。」

「じゃあこの子が喋りたいそうなのでメルアド教えて頂けませんか？」

「いいけれど……。」

了承を得たようです。

ここで北朝鮮は一つのことになりました。

（まさか・・・あいつロシアにまで陰湿悪メールを送るつもり・・・いや、絶対そうだ。）

さて、華の命運は！？

ピッポパッポ・・・。

「えつと・・・なにな・・・？」

（アーメン。）

件名：初めまして。

初めまして。都津川華と申します。

貴殿は日本お姉ちゃんのご友人だそうですね。

私は隣に住んでいる者です。これから宜しくお願いします。

「嘘だろおおおお！？」

どうやら子供でも危険な奴、危険じゃない奴の区別はつくようでした。

「うふふ、有難う　じゃあ僕はそれだから帰るね」

「くそう・・・釈然としない・・・。」

ご愁傷様。

「私も・・・帰る・・・。」

「はいまた遊びに来て下さいね。そして北朝鮮さんもさっさと休暇いとまして下さい。」

「前々から思っていたんだけど扱い酷くないか！？」

まあ、一件落着かもしれない。

「俺無視すんな！作者実は俺嫌いだろ！？」

携帯でその3（後書き）

はい、皆様いかがお過ごしでしょうか。よしおかです。

今の気分・・・塾崩壊しろ破壊される爆発しろみたいな気分です、はい。

まあ、それは置いといて。（自分で振っておきながら）

ここまでこれたのも皆様のお陰です。有難うございました！

（最終回じゃないですよ!?!）

武術舞踏会その1

第四十七話「勘違い」

ここはヨーロッパのどっかのどこか。

「なあ、イギリス。」

「何だ？」

「俺たちって最近マンネリ化してきてこう・・・華・・・？が足りない気がするんだ。」

「いきなり意味の分からないことを言い出すな、フランス。」

「でも、ほとんど男だし・・・普通のじゃつまらないだろ？」

「俺に聞かれても。」

「それで・・・開催しようと思っ。」

「舞踏会でもするってのか？そんなの・・・」

「そう、舞踏会だ。お前にしては華のある考え方じゃないか。」

「・・・・・・・・。」

そんなの無理に決まってるだろと言おうとしたイギリスはタイミングを無くし黙りました。

「じゃあ他の奴らにも知らせてくるわ。」

「決定事項かよ!？」

「あと、あんまり着飾った服は着てくんな。どっちかと言うと武装してこい。」

「はあ!？」

ここでイギリスは『武装・・・恋の武装のことかい?』とか気の利いた台詞を言える訳が無い。

「武装と言っても本当のな。」

「???」

イギリスは益々訳が分かりません。

「招待する奴は・・・日本と中国とロシアと・・・まあG8は決定だな。」

一方ここは日本宅。

「何でしょうか・・・。。。。舞踏会?しかも武装をしてこいつ?・・・?」
「どういことでしょうか・・・?」

「なにそれ面白そう付いてきつても良いか?」

「皆さんがOKでしたらね。」

北朝鮮は相変わらず日本家に居ます。国はどうした。

「しかし武装？・・・。あるでしょうか？」

軍服なんてもう何年も着ていないものですからあるかどうか分からないようです。

「一応探しましょうか・・・。」

「なにに！？日本の軍服！？見たい！！！」

「はあ・・・。別にいいですけど・・・。」

とりあえずクローゼットの奥の奥の奥の方を見ると・・・。

「ありました・・・けど・・・。」

あつたことはあつたようです。あつたのですが・・・。

「ひえ！？なにそれ！？」

クローゼットから出てきた軍服は、とにかくどす黒い血や汚れが絡み付いてすごい有様。

まるで襷褌はふち雑巾そのもの。

「……なにがあっただんだ!？」

「女性には訊いたらいけないことだってあるんです。」

いや明らかに女性関係ないだろと言つつつこみはしない北朝鮮でした。

「新調……しますか……。」

そして中国家でも。

「武装?ならチャイナ服あるな!」

ちなみにズボンは穿はかれますか?穿はかれませんか?

「穿くに決まってるある！何あるか一体！？」

いや、穿かない方が似合いますよ！絶対！！

「褒められてるあるか！？これは褒められてるあるか！？そして何で作者と会話しているあるか！？」

なんとなく。

「意味不明あるー！！！」

ロシア家。

「武装？普段着でいいよね。あと水道管とウオト力かな」

さすがロシア。『僕は普段から武装しているよ』と言う自己主張ですか。

「なんか五月蠅いはねっのいるね。」

いや何も。

「うふふ」

カナダ家。

「ねえクマ第五朗さん。」

「オマエドンドンモトノ名前カラ離レテイッテルゾ。」

「寒いね。何か。」

「ソウカ？」

やっぱり招待状は届いていないカナダさんでした。

アメリカ宅。

「H A H A H A ! 武装 ? そんなのカウボーイの奴でいいさ ! ! !」

それでいいのか人生。

ドイツ&イタリア。

「なになに武装？ドイツ頑張れー！！」

「早くも丸投げかイタリア！お前も出るんだ！」

「ええー！嫌だよう、武装なんて持ってないよー。」

「武装なら俺が貸す！」

「ヤダよう！。それなら自分で用意するー。」

「どう言う意味だ！」

「だってムキムキになりそうだよー。」

「ならんわ！！！」

「貴方達！静かになさい！！」

まとまらないイタリア、ドイツ。

さて、こんなので舞踏会は開けるのか！？

武術舞踏会その1（後書き）

最近ヨーロッパ組の出番が少ないので増やしてあげることになりました。

良かったね！特にイタリアとドイツ。

（何故かこの二人は主役の筈なのに、出番が圧倒的に少ない。ごめんよ。）

武術舞踏会その2

第四十八話「フランスの考えが分からない、どうしよう。」

「はい、と言うことでフランスに来てくれて有難う。」

「いやいやいやどう考えても早すぎだろ!!」

「そこは・・・ほら、ご都合主義って奴？」

「意味が分からねえ!!」

兎にも角にも略してともかく、舞踏会？の知らせを聞いて集まってきた者たち。

「あれ？アメリカは？」

「アメリカなら欠席。ご愁傷様だつてさ。」

「はあ・・・風邪かよ・・・。」

今の言葉だけで分かったのですか、凄いですね。

しかしある意味やばい光景な今回の舞踏会。

皆がみな武装と言うのもちよつと誤解されそうです。

「あつ・・・北朝鮮さんは結局駄目だったのですか。」

「ああ、あいつが居るとちよつと・・・。」

「それならこの小説は北朝鮮君と日本ちゃんでは無いのですが？」

「いいの。」

話が破綻していきます。

「で、説明なんだがぶつちやけ喧嘩しろみたいなことになるかもしれない。」

「はあ!？」

武装と言つ時点で嫌な予感がしていましたがいざと言われると引くものです。

「だいたいやる意味があるのか、こんなこと。」

「うん・・・オリンピックあるだろ？あれみたいのものだ。」

「なんだ？なら皆で棒高跳びしたりスケートしたりするのか？馬鹿らしい、俺は帰る！！」

「まあ待てよ。それでさ、皆で親交を深めようってわけだから。」

「・・・。はあ・・・。まあオリンピックなら許してもいいが。」

渋々納得？したイギリス。他はもうなんかどっちでもいい感じですよ。

「まあどうでもいいあるがさっさと始めてさっさと帰って蟹食^{かに}うある。」

「ええ、蟹の部分はともかく始めましょうか。」

そして、なんかグダグダで始まったオリンピック的な舞踏会っぽいもの。

「どういうネーミングセンスしてるんだ。」

ドイツがため息をつきながら静かにつっこみました。

「最初は……。銃を使うものだ。もちろん模擬銃だけだな。」

ルールを簡単に説明すると的の真ん中に当てた方が勝ち。

「銃？あんまり得意では……。」

「銃？ドイツ宜しく!!」

「おい！早いぞイタリア!!!!」

「銃あるか……。まあ普通あるな。」

「銃か……。得意分野だ。」

めいめい感想を言いました。

「最初は誰だ？」

「俺だッ！！！！！！」

イギリスが潔く立候補。

どうやら自信があるようです。

続く。

武術舞踏会その2（後書き）

やばい人数多いと纏まらない。

おまけに時間が無いから雑になってしまいました。

すいません。次は丁寧に書きます。

・・・精進せねば。

武術舞踏会その3（前書き）

今回は前回の反省を込めて少し丁寧に書いた・・・はず？

宜しくお願いします！

武術舞踏会その3

第四十九話「分かっていた。」

まあイギリスが立候補したはいいのですが……。

「わー頑張れー。」

「ふれー。ふれー。イギリスー。」

「期待しているあへん（本当は早く終われと思っている）。」

ギャラリィ、まったく、まっつたくやる気ありません。

薄々勘付いていましたが、皆面倒くさいようです。

「あー……。声援は有難いが……。なんと云つか気の抜ける……
・と言っか？」

そらそっだ。

「まあ、どうぞイギリス。的の真ん中に近づく程高得点な。弾は三発きっかり。」

「余裕だな。」

おおっと！イギリス選手いきなりの自信満々発言！ツンデレの他にナルシスト傾向も見られます！

「っ……。じゃあ貸せ。」

なんと高慢な言い方！もはや何様？

「貸・し・て・下・さ・い！！！」

「いやそこまで言わなくても……。」

若干苛つき……。いや、ヤンキー顔になりながらイギリスが銃を装丁！若干怖いです！
そとう

「（落ち着け俺、落ち着け俺……。）まずは一発目だ。」

Bannon!!

部屋に銃声が鳴り響きました。模擬とは言えども迫力ですね。

関係ないですがセダーンはスイスが特許を取っていますので。

「おお、真ん中まであと数ミリと言ったところか。」

ツチ……。以外に、以外に高得点ですね。本当に以外に！でもまだ分かりませんよ？

「（落ち着け落ち着け落ち着け……。）つ……。次は二発目だな。」

Bannon!

今回ももう少しで真ん中と言ったところです。ああこのじれったさは本人の性格の所為でしょうか？

「（俺は大英帝国俺は大英帝国様……。）……。次で最後か……。」

ダァンッ

あゝあ、最後まで真ん中に当たらないなんてやっぱりこれも本人の
ry)

「もうやめろよ！なんか俺に恨みでもあるのか！？なあ、なあ！？」

特に何もありません。ただ一番弄り易いキャラだし？

あらら、部屋の隅っこに行ってしまったよ？

「俺は大英帝国様だ・・・俺は大英帝国様だ・・・。ブツブツ・・・」

「・・・さあ、イギリスはほつといて次は中国だな。」

「えゝ我あるか？まあいいあるが。」

中国です。しかし意外なことに結果は某眉毛と似たり寄ったり。

案外難しいようですね。

その後、フランス、日本、と続きましたがいい所までいくのに肝心の真ん中には当たらないようです。

「はあ……。やっぱり西洋の道具は腕に慣れませんか……。」

「お兄さんも腕が鈍ったかな？」

ちなみにイタリアは辞退しました。お約束でドイツに「イーターーリーアー！」と叫ばれていました。

「じゃあ、ドイツか。」

「ああ。」

隠れた努力家（ドSなのが珠に瑕^{きず}）ドイツ。これは期待できそうです！

「壮丁して……。」

まずは一発目。

「っち……。外れたか……。」

二発目。

「……。はあ……。」

さすがのドイツでも難しいようですね。

そして最後、三発目。

ダァンッ!!

そしてその弾は、

「ええ!?!」

ど真ん中をぶち抜いたのでした。

「わあ、ドイツ凄い！……！」

「え？」

続く。

武術舞踏会その3（後書き）

最近新しいアイデアを練ってみた結果、新作は東方かボカロ口になりました。

無理ぽ。

武術舞踏会その4

第五十話「隠れた」

隠れた努力家ドイツが高得点を叩き出しました。

「ヴェードイツ凄いー！」

「ドイツさん凄いですね！」

「ムキムキの癖に！！！！！」

皆口々にドイツを褒め称えます。

「クリスマスでも思ったがドイツって以外と凄いあるね。」

中国も褒めます。

「で、次は僕だけど……。」「

ロシアが言いましたが、

「僕は銃には自信が無いから辞退するね」

（噓つけ！！！！）

全員が心の中で突っ込みましたがそれを口に出す程命知らずは居ません。

「あはは、ならしょうがないな。」

フランスが目を全力で逸らしながら言いました。

「ええ、自信がないのでしたらしょうがないですね。」

日本も額に汗を垂れ流しながらフランスに便乗します。てか前にもこんなことあったような気が。

「とにかくドイツが今の所の一位ってことで。」

フランスが最後に締めました。

「で、次は何あるか？」

「次は・・・まあ、最後位踊るか？」

「物騒な格好で？」

「てか終わるの早いな。その方がいいが。」

「勿論武装でだ。」

「そんなの聞いたことないある！」

「だからさー、相手を間違えて倒さないようにだ。」

「ほう？」

そこで皆閃いたのが・・・。

（ここで邪魔な奴を消せる！！）

「ペアは各自で決めるぞ。」

そこでこれまで死んでいたイギリスが反応。

「俺はフランスとがいい絶対。」

「奇遇だな俺もだ。」

どうやら両方の意見が一致したようです。

「じゃあ俺はドイツと〜。」

「しょうがないな。」

こちらは平和そうですね。

残ったのが、日本、ロシア、中国。

「じゃあ私は後でいいです。」

日本は辞退しますと、残るは必然的にロシア、中国。

「日本ちよつと待つよろし。我は日本と踊りたいある。」

「中国君、一緒にやろう?。」

「うっ・・・。」

「私はじゃあ。楽しんでくださいね。」

「楽しめないあるー!!!」

こちらは不穏な雰囲気。

「じゃあ、音楽を。」

フランスが音楽を流した瞬間です。

辺りに殺気が飛び散りました。

「いたたたたた！！お前態と踏んでるな！」

「いつてえ！ちよ、おま胴体蹴るな！」

「やっぱりドイツよりも日本がよかった。」

「悪かったな。」

「ぎゃああああ痛いある痛いある痛いあるそこは曲がないある
！！！！」

「うふふ」

わあ、カオス。

日本は先へ帰ったようなのでもうこいつらは好き放題やります。

「はあ、はあ、なかなかやるな・・・。」

「お兄さんの自慢の髪がこんなにぐしゃぐしゃに……。」

「ドイツ背が高いから俺ついていけないよ。」

「悪かったな。」

「痛い痛い痛いある……関節極めるなある……そこはほんとに命にかかわ……。」

「うふふ」

その後2時間ほどして皆解散したようです。ボロボロで。

どうでもいいけど最後まで北朝鮮は出なかったな。

完？

武術舞踏会その4（後書き）

記念すべき、50話目がこれです。

もうちょっと平穏な話にしたかったです。

上司に激憤！その1

第五十一話「デリカシーがない人」

国の仕事が一段落して、いつものようにネットをしている日本。

「はあ……。これは面白いですね……。」

ニコニコ動画原宿や2ちゃん○ねるやよつつべなどでネットエンジン中ですね。

ピンポン。

と、来客が。

「はい？誰でしょう？」

「日本。」

「え！？」

この声は日本の今の上司です。

どうして来たのでしょうか？

「何しに来たんでしょうか？」

日本の態度は少しとげとげしいです。詳しく書くとあれですが色々
やられたので。

「あゝ……。なんと言うか……。」

と、上司が言おうとしたとき。耳に入った音楽。

「二次元っていいな」

「さんさん二次元よばいばいばい」

あの「人間っていいな」のメロディーで紡がれるのは二次元マン
セーの歌詞。

完璧に駄目にんげ・・・。

「あ、ちよつと動画消してきますね。」

上司に可哀想なものを見る目で見られた日本は慌てて消しにいきま
す。

「あ・・・それで本題なんだが・・・。」

「はい。」

「お前、自分の性別分かってるか？」

「え・・・？まあ、女だったと思うんですけど・・・。」

「そう、女だ。」

「でもそれがどうして・・・。」

「今日本は晩婚化、少子化、高齢化と言う問題を抱えて子供が足りない状態だな。」

「まあ、そうですね。もっと大きな問題もある気がします。」

そして上司が切り出した事とは……。

「子作り……してくれないか？」

日本の心に原爆を50弾ほど投下していきました。おおっと日本の精神は壊滅寸前だ……！！

「今とても信じられない事柄を聞き間違えたと思うのでもう一回正しく言って下さい。」

日本は混乱している！

「だから……子供作ってくれないか？」

今度こそ日本は精神が破壊しつくされた！HPはもうない！

「ななななんでわた……私がここここ子作りをしなければならぬのデスカ！？」

一時的に日本語が不自由になってる日本。

「ほら、普通の相手じゃなくてさ・・・。」

「？」

「国とさ、結婚したら一石二鳥じゃないか！」

「! ? @ : > || } ? : 。」

一時的に地球語が不自由になっている日本。

「お勧めはロシアとか北朝鮮かな・・・日本？」

「・・・。」

一時的に魂が散歩している日本。

「っそんなこと・・・。」

やっと平静？になった日本。

「いや、ロシアか北朝鮮のどっちかがお勧めだから他はちょっと・
・。」

要訳：そのどっちかと結婚or子作りしろよ！

「……………」

日本は耐え難い屈辱に唇を戦慄わななかせました。

「……………」

「ん？」

「絶対嫌です!!!!!!!!!!!!!!」

あまりもの大声に上司が体を慄おののかせます。

「いや・・・せめて考えるだけでも・・・。」

「貴方は私を侮辱しているんですか！？帰って下さい！！！」

普段感情を表に出すのが少ない日本が怒りを露あらわにしている。

「まあ、とにかく考えといて。」

これはちょっと分が悪いと思った上司は一旦引くことにしました。

「はあ、はあ・・・。」

日本は叫びすぎて肩で息をしています。

「そんな・・・子作りなんて・・・。」

そんなすももも〇もも！みたいに簡単に出来るわけありません。

「最悪です・・・。。。」

続く。

上司に激憤！その1（後書き）

学校で友達がほとんど中学受験なので退屈で堪りません。

しかもオタ話できる友達が中学受験の子しか居ないと言う・・・。

ああ、早く受験終われ！！と日々願っております。

上司に激憤！その2

第五十二話「殺気がやばいす。」

それは日本の家に近づく程に濃くなっていきました。

「やばい、やばいぞ．．．。」

北朝鮮は恐怖していました。

恐ろしい殺気に。

それは禍々しく、歩を進めようとするたび纏わりついてくるのです。

「いったい誰が．．．。」

背筋を震えが襲います。冷や汗が止まりません。

「うつ．．．負ける．．．ものか．．．。」

それでもしぶとく足を動かす北朝鮮。

その甲斐あってか、ついに日本の家の前まで来ました。

「うあ……。なんだこれは……。」

しかし殺気は益々勢を増すばかり。

「それでも俺は……。進む……！」

いや帰れよ。

「おるあああああ……！」

気合で扉を開けます。ガコツとか不吉の音がしたのは気のせいでしょうか。

「はあっ……！！……！」

「うわあああああああああ……！！……！！……！」

そして何故か気合の呼吸とともに日本刀が北朝鮮の頬を切り裂きました。

「いったあああ！？いったあ！？普通ここは『掠めました』だろ！？」

そんな生易しい攻撃じゃなかったですからね。むしろ頬でよかったです。

「って誰だよ！？」

「・・・北朝鮮さん！？」

北朝鮮を攻撃した相手はなんと日本です。軍服を着て気合十分ですね

「すみません。ついあの方だと思って・・・。」

「俺間違いで攻撃されたの！？空しいな！！！」

未だに北朝鮮の頬から血が・・・。

「す．．．すいません、今手当てしますから．．．。」

それからガーゼ、消毒液などを持ってきて手当てしました。

（うん、日本の手当て受けれるなら怪我しても．．．「痛あああああ
あ！！」

ドンマイ。

「てか誰攻撃しようとしてたんだ？」

「．．．。」

言った瞬間日本の瞳から一切感情が消え代わりに激しい憤怒^{ふんぬ}が宿りました。

「やっぱいいですすいませんした！！！」

「いいえ、始末しようとしていたのは上司です。私の。」

「は!?!」

始末って言い切りましたね。

「実はですね……。」

それから今までのことを話しました。

「結婚!?!しよう!?!」

「死んで地獄に堕とされ無限の責め苦を受けても嫌ですね。」

「そこまで!?!」

とにかく北朝鮮とは『死んで地獄にr y』ても嫌らしいです。

「で、今までのことも合わせて堪忍袋の緒が千切りしされたので激情に任せてしまおうと。」

「はい、しかしそれも何かと問題が起きそうですね……。」

そして小さな声でぼそっと。

「まあ、分からないように始末すればいいですよ。あの上司、一回八つ裂きにしないと気が納まりません。」

（怖あああ！？）

かなり激怒しているようですね。

「しかし、このままでは本当に殺^やってしまいそうなのでしばらく他の方にお世話になろうと思っんです。」

「はあ！……？？」

しかし、そんな中で日本が爆弾を投下していったのです。

続くお。

上司に激憤！その2（後書き）

やっと友達が中学受験終わりました。

これでまたオタ話できるぞー！（駄目だなこいつb y北朝鮮）

上司に激憤！その3

第五十三話「にほんは　みを　まもった！」

「と言うことで、誰かの家にですね……。」

「俺ん家は……うん分かった、他にしようか。」

しかしこの日本、かなり怒っていますね。普段冷静な日本がここに居たら上司をぶっ殺してしまいそうで怖いと言っているのですから。

「一番落ち着けそうなのは……ギリシャさん家ですかね？」

「そもそもあいつ自体が落ち着いているどころかゆるゆるだからな。喋ってる睡眠なくなる。」

「じゃあ、頼んで……。」

ピンポン。

「来客だぞ。」

よりによってこのタイミングで来客。絶賛フラグ立て中。

「出るぞ〜。」

「あつ・・・勝手に・・・。」

ガチャ。

「はいはい〜・・・ん?」

北朝鮮が勝手に出た相手は予想していたかも分かりませんが日本の上司でした。

「つつ・・・!!!!」

「うああああやめる日本落ち着け!!!」

すぐさま刀を振り翳^{かざ}した日本。慌てて北朝鮮が止めますが。

「痛あああああ!!」

刀が今度は肩を掠めました。

「今度は掠めるでよかった!とか言ってる場合じゃねえわ!日本やめろおおお痛ああああ!!」

何故か一人で漫才をしている可哀想な方が一人。劇団ひーりですか。

「るせえ!おらああ日本落ち着け、逮捕されてーのか!!」

「この人は!許せ!ません!!」

「だから冷静になれ、殺人罪だぞ!」

「なら!せめて!一回!微塵^{みじん}切り!に!!」

「それ最早死んでるから!!」

「なら!宇宙旅行に行ってブラックホールに!呑み込ませて!逝か

「それでも！いいですか！？」

「いいわけあるかああああ！！そして例えが複雑すぎるわ！！あといくの漢字違う！！」

「とにかく皆落ち着いて・・・。」

「おずおずと言い出した上司。」

「全部お前のせいだろうがああああ！（でしょうが）」「」

「超人的な速さで突っ込みが入ります。」

「今回のストーリーのテーマはカオスと今決めた。」

「続くよね。」

上司に激憤！その3（後書き）

最近は日中関係・日米関係が悪いとか北朝鮮がどうとか忙しいですね。

しかしこの小説はこんなことは一切！関係なくやっていきます！

なんかすいません。

上司に激憤！その4

第五十四話「だが断る」

「・・・と、貴方たちは今回の件だけではなく他にもいろいろやってきました。」

「そうかもしれないね。」

「『かもしれない』じゃなくて返事は、はいです！」

お母さんですか。

「まあまあ日本、反省しているようだし・・・。」

日本がくわつと北朝鮮の方に顔を向けました。

「ひえ！？」

「その考えがこの人を付け上がらせるのです！貴方は馬鹿ですか！？」

「うん馬鹿だと思う。」

「なんでも認めればいいと言つものではありません！」

「サー・イエッサー！」

「なんの返事ですかそれは!!」

「でもさ、本当に少子化とか問題だし……。」

「だからと言って!!」

「ひえ!?!」

と、ここで日本は呼吸を整えます。

「はー……。だからと言って、ロシアさんとか北朝鮮さんとは結婚、ましてや子作りなんてする気は全く、まっつたくありませんから!!!!」

大事なことなので二回言いました。

「でもその方が国民の為に……。」

「ええ貴方たちはいつもそう言いますよね。何か言えば国民の為国民の為。でも本当は国民の為ではなく自分たちの利益の為でしょう!? 貴方たちのそう言うところ、大嫌いです!!」

「まあまあ日本。そうかつかと……。」

「黙ってください!」

「サーセン。」

「でも、本当に……。」

「いいえ、でも私だって国といえども人です。そんな……こ、子作りなんて……。」

「俺のベツトはいつでも開いてるぜ?」

「黙れ!!!!!!」

日本の敬語崩壊。

「でもね、これは本当に国の為になるよ？本当だよ？」

なおも言い^{すが}絶る上司。そこで不吉な音が。

プチイイイ!!!!

堪忍袋が切れたどころか微塵切りにされたような音が。

「もういいです!!!!もう私出て行きます!!さようなら二度と会わないことを願います!!!!」

「にほーーーーん!?!」

と言に残し出て行ってしまいました。

「…………どうすんだよ…………。」

完？？

上司に激憤！その4（後書き）

日曜に塾のテストがあるんで憂鬱です。誰かなんとかしてください。

お国に泊まるう！その1

第五十五話「わかってくれ。」

「あ・・・オーストリア、演奏中邪魔なんだが・・・。」

「早くしなさい。」

「・・・今何時か分かるか？」

「当たり前です。今は夜の12時ですよ。」

「なら、ちょっと今の時間にピアノはないんじゃないか？」

「芸術に時間は関係ありません。」

「はつきり言つと五月蠅うるせいんだが。」

「いのお馬鹿さんが！！」

現在時刻夜中の12時。ドイツの家からは何故か優雅なクラッシックが聴こえてきます。

「いいかげん眠たいというか……。」

「なら寝ればいいでしょう、このお馬鹿さんが。」

「だからお前がだなー……。」

このような会話を惰性で続けるオーストリア&ドイツ。

「だからいい加減やめてくれないか。」

「もしかしたらこの時間帯に來客があるかもしれませんがしょう。プロイセンのお馬鹿とか。」

「ああ……兄さんなら在りうるな。」

納得されたプロイセン。どんまい！

ピンポン。

と、噂をすればなんとやら。来客のようです。

「まさか本当に兄さんか？・・・いや、この前みたいに宅配かもな・
・。。。」

ああ、ドイツが如何^いわしいものを頼んだ業者ですか。

「・・・・・・・・・・（無言で懷から愛用の鞭を取り出す音）

いえーいなんでもないぜ

「じゃあちよつと出てくる。」

「プロイセンのお馬鹿ならつつかえしなさい。」

「・・・・・・・・」

とにかく出ます。

「すみませんこんな時間帯に・・・。」

その相手はなんと日本でした。

「!?!日本か!」

ドイツは驚きを隠せません。日本がこんな時間帯に来るとは思わなかったからです。

「ちょっといろいろありまして・・・。」

「ああ・・・とにかく中に入れ・・・。」

なんで日本が来たのか。なんでこんな時間帯なのか。ドイツには謎だらけです。

「?なんで日本がここにいます?」

オーストリアも珍しく驚いていますね。

「事情を少し簡単に話すと・・・。」

「ああ。」

「上司がブラックホールでロシアと結婚が北朝鮮で子どもで最悪でしたのでお暇いとましました。」

「もうちょい分かりやすく頼む。」

かなり日本は混乱している！

続く。

お国に泊まるう！その1（後書き）

日曜日か近づく・・・日曜日が来る・・・。ごきげんようよしおかです。

皆さん元気ですか私は元気じゃないです。精神が。

では失礼。なにが言いたいのかわからなくてすみません。

お国に泊まるう！その2

第五十六話「ドイツ頑張れ（キラッ）」

「・・・で、何だ・・・つまり上司に憤慨してここまで来たと。」

「はい、しばらくあの人も反省したらいいのです！しばらくお世話になります、すいません。」

かなり、かなり怒っています。ドイツも些いささか引いています。

「いや、俺は良いが。オーストリアはどうなんだ？」

「私も別にいいですよ。」

「ありがとうございます！」

声は明るいですが実は内容はテラカオス。

「じゃあ、とりあえず私は・・・。」

「ああ、少し待っている・・・部屋を用意するから・・・。」

ここで少し今の状況を確認しよう。

一つ屋根の下、男女比2：1。

これはなにかありそうと言ったところかのラブコメみたいな設定。

ははは、しかしラブコメよ！相手を間違えたな！この相手でいちや
いちやできると思ったか！

意味不明ですねーせん。

「では申し訳ないですが・・・少しの間だけお世話になります。」

「部屋の手配はできましたようです。貴女は早くお休みなさい。」

「俺はいいのか俺は？」

華麗に無視。さすが貴族。

「ではお言葉に甘えて。失礼します。」

「ああ。」

日本はさつさとドイツが用意した部屋に退きました。

そのあとはまるで日本がないような^{のどか}長閑な時間。

要するにいつも通り。

「さて、私もそろそろ・・・。」

「ああ・・・。）やっとか・・・。」

ドイツはようやく眠りにつくことができたとな。

めでたしめでたし。

お国に泊まろう！その2（後書き）

ああ・・・・・・・・なんか・・・・・・・・さようなら。

お国に泊まるう！その3

第五十七話「どっきどき」

「はあ・・・オーストリアは・・・。」

ドイツはやつと訪れた平穩に安堵していました。

「でも・・・日本も大変だな・・・。」

自分も上司で悩ませられたことがあったのでその苦労がわかります。

「はあ・・・ん？これは・・・。」

と、ドイツが廊下になにか落ちているものを発見しました。

「これは・・・日本の携帯か・・・。」

それは日本が命の三番目に大事にしている携帯。二番目はネット。

「これは大変だな・・・届けないと・・・。」

携帯は勿論連絡にも必要です。しかし日本が曰く、『写メには完成したプラモ、ボカロの写真、

東方けいおんイカ娘そらおとコードギアスry)があ！着メロも・・・』

と必死な様子で日本が語っていました。

「えっと・・・日本の部屋は・・・ここだな。」

しかしドイツにある考えが浮かびます。

（就寝時の女性の部屋に入るのは・・・マナーとしては如何なのだろうか・・・？）

ドイツにとっては女性の部屋に入る男性は夜這い目的と言う数式が出来上がっています。

（いやしかしこれは携帯を落としたのだから仕方ないだろう・・・いやしかしこんな夜中に

女性の部屋に入るのは勘違いされかねない・・・いやいやでも携帯を失くしたら日本は

困るだろう・・・あつても勝手に部屋に入られても日本は困る・・・でも失くしたら
困る・・・どっちも困るじゃないか！これは正にダブルバインド
！あああ・・・）

ちな
因みにダブルバインドとは二重拘束、こつちを立てればあつちが立たなくなると言う意味です。

（いやいやいやでも携帯を届けなくてもそれではマナーが守れないしかし届けたら日本に喜んで
もらえる・・・いや駄目だああ！やっぱりここはマナー重視で・・・でももし携帯から

電話が掛かって来たら・・・）

ドイツはしばらく悶々と悩んだ末、携帯を届けることにしました。

「あ・・・あの・・・失礼する・・・。」

ギイツと扉が開きました。

そこには安らかな顔で眠っている日本が。

「わ・・・し・・・失礼・・・。」

ドイツは真っ赤な顔でおろおろします。なにしてるんでしょうかこの人は。

「日本・・・？すまんが起きて・・・くれないか・・・？」

「う・・・ん？はい・・・？」

（びくっつっつー！！！）

日本が目をつめたげに擦りながら体を起こします。ドイツや他の国に見せたことのない表情です。

「・・・ドイツさん・・・？どうされたんです・・・？」

「あ・・・・・・いや・・・携帯が落ちていた・・・・・・。」

「まあ・・・。ありがとうございます！」

「あ・・・いや・・・別に・・・。」

あんたはどこかのツンデレ眉毛ですか。

「じゃ・・・じゃあ・・・。」

「はい、ありがとうございます！」

ボタン。

（俺は・・・やってしまった・・・。なんで薄い着物一枚なんだ？
ちよつと谷間が・・・。）

うああああ俺は何を考えているんだ！！髪の毛も眠っていたの
にさらさらだったな・・・。）

いやそんなことばかり考えたらイギリスみたいになってしまう
！落ち着け・・・。）

すでになっていると思いますが。

「つつ・・・寝るか・・・。」

ドイツがまだ顔を赤らめながら部屋で眠りにつこうと思っていたとき。

「きゃあ!?!?.....て.....返してください.....いや!?え.....ちよつと.....」

.....え!?!?.....なんで.....きゃあああああ!!!」

「!？」

日本の部屋から悲鳴が。

続

お国に泊まろう！その3（後書き）

明日は公開テストです。頑張れ私明後日からは自由の身だ・・・。

お国に泊まるう！その4

第五十八話「テラカオスww」

「大丈夫かにほーーん!？」

ドイツは慌てて日本の部屋へ飛び込みました。さっきまで悩んでいたのは何処へ。ああ何処へ。

「ド・・・ドイツさん・・・・・・・・。」

状況描写その1。北朝鮮に押し倒されている日本。

状況描写その2。窓から入ってきたコルコルの人じゃなくてロシア。

わあーなにこれーおもしろいー（状況が）

「やべつ・・・・・・・・。」

「いい加減離してくださいっ!!!!!!!!!!」

ドカッ

「ごはああああ!？」

北朝鮮KO。

「日本これはいたい……。」

「一息で説明すると、いきなり窓から北朝鮮さんが入ってきて日本刀を奪って私を押し倒して

ロシアさんが入ってきたのです!」

「よく一息で言えたな……じゃなくてなんでいきなりこいつらがやってくるわけだ!？」

「それはね……。」

ロシアが話します。

「日本の上司の人に連れ戻してって頼まれたんだ。……ひまわり
いっぱいくれたよ」

どうやらひまわりで釣られたようです。

「俺は秘蔵の日本のおふぎやあああああ……！」

「黙ってください永遠に。」

もう一回KO。

「だからね戻ってくれ「嫌ですね。」」

0・1秒で断られました。

「いやいやこっちにも「断ります。」」

「ちょっと最後まで「拒否します」言わせてよ！」

「善処します、また今度、次に回します、拒絶します、無理です。」

否定語を並べてみました。

「・・・駄目だったら力ずくでもだつて。」

「へえ、あの上司だからロシアさんに頼んだんですね。北朝鮮さんはともかく。」

「うん。で、返事は？」

「答えはノーです。」

ノーと言える日本人。

「じゃあ・・・。」

「ええ・・・。」

「あー取り込み中悪いが・・・。」

ドイツがおずおずと。

「俺の家で暴れるなああああああ!!!!」

それは心からの叫びでした。

続く

お国に泊まろう！その4（後書き）

公開テスト終わったぜええええ！やったああああ！いえいひゃっほう！

テンション上がりまくりorz

お国に泊まるう！その5

第五十九話「俺、この決闘が終わったら結婚するんだ……。」

ひゅっつっつ。

何故か一陣の風が吹きました。

「一回君とは決着をつけたかったんだ。」

「ええ、私もです……。」

あれからドイツの家を離れてここはロシア。とにかく寒いです。

「この勝負のルールは？」

「そうだねえ……先に倒れた方が負け？」

「分かりました。」

君たち、なに本気で決闘しようとしてるんですか？そんなことしたら・・・。

「手加減は無しでいいね？」

「ええ・・・大和撫子たるもの、手加減は無用。」

手加減しろよっ！これただの日本を連れ戻す為の戦いだからそんな本気になつたら・・・。

「では。」

「いざ。」

双方が武器を取り出しました。日本は刀、ロシアは銃と水道管。水道管？

てか早く止めないとやばいぞ・・・。

ダアンッ！

銃が放たれましたが日本は刀で弾き返します。

日本は次々に放たれる銃弾をかわしながら一気にロシアへ切り込みました。

「はあっ！」

「おっと・・・。」

振り下ろされた刀をロシアは水道管で受け止め、刀の勢いを利用して水道管を切り込ませます。

その水道管が体に届く前に日本は地を蹴って後ろへ退避しました。

すかさず銃弾が放たれますがそれを刀で弾きます。

今度はロシアが一気に攻めます。

銃を撃ちながら一気に日本へ！

日本はその弾を上手くかわし、逆にこちらから向かって、刀を切り

込みました。

「なかなかやるね。」

「そちらこそ。」

日本は普通に着物で、大変動き難にくそうですが。

しかしこの対戦、日露戦争を彷彿とさせますね、はい。

続く

お国に泊まろう！その5（後書き）

うああああニコニコしてたらこんな時間にiiiiii早く学校いかな
いとおお！

やばいよやばい！

お国に泊まるう！その6

第六十話「やっちまった60話目」

前回までのあらすじはめんどくさい。

「ふっ・・・っはっ」

「おっと・・・。」

なんか凄い勢いで打ち合ってますねー。

具体的に言うと殺気で土埃が舞ったり、銃弾と刀身の摩擦で火花がバチバチ散ったり。

日本がいきなり跳躍してロシアへと切りかかりますがそれをロシアが軽くないしたり。

だんだん状況が悪化してきているのは気のせいであって欲しい。

「なかなか決着が・・・。」

「つかないね。」

当たり前じゃねえか。

「はあ……どうすれば……。」

「ちゃん……ろ……。」

バイーン。

「あれ？なんか聞こえてきませんか？」

「そうかなあ……？」

「ロシア……ロシアちゃん！」

ボイーン。

「あれ？なんかロシアさんと呼んでいるようですが？」

「あはは。誰だろうね……。あはは……。」

「ロシアちゃん！」

バイーン。バイーン。

「静かにしろっ！兄さんが驚くだろう！」

「なんかベラルーシさんのような声も聞こえて……。」

「うん僕は知らないよ？それより再開しよう……。」

「ロシアちゃんっ！」

バイーン。

「わぶっ！？」

「ごめんね〜！あんまり会いにいけない駄目なお姉ちゃんで……」

「ごめんね・・・でもっ・・・。」

「わぶっ・・・ちょ・・・苦しいです・・・わっ!？」

「バイーン。」

「姉さんそれ日本ちゃん・・・。」

「兄さん!」

「わああああ!?!ベラルーシ・・・。」

突然現れたベラルーシと不審な爆乳のお姉さん。いったい何故現れたのでしょうか?

「う・・・ロシアさん、この方は・・・?」

「うん・・・一応僕の姉さんのはずのウクライナ姉さん・・・。」

「うっ・・・道に迷って・・・やっと会えたのに・・・なんで間違えるの!?!なんで私ってこう!?!」

ボーン。

「ちょっとは黙れっ！私が兄さんの家に行くついでに連れてってあげなきゃどうなっていたと・・・」

「ロシアさん・・・あの・・・あっちに行ってあげた方が・・・。」

「それよりも続きをしようじゃないか。」

「うっ・・・うっ・・・ロシアちゃん・・・ロシアちゃん・・・。」

「兄さんっ！今日こそは結婚式場へ連れていくわよ！」

「なんか呼んでますけど・・・。」

「僕は知らない・・・全然知らない・・・。」

突然現れたのはウクライナさん。ロシアのお姉さんです。

とてつもない巨乳で歩く度バイーンやらボーインやら効果音が入ります。

「兄さんっ！早くっ！」

「ロシアちゃん・・・ロシアちゃん・・・。」

「はあ・・・ごめんね、今日はちょっと無理みたい・・・。うん、ごめんねほんとに・・・。」

「いやいいですけど・・・。」

と言うことで姉妹に困らせられているロシアを残し、ロシアをあとにしました。

（ロシアさんの家族って・・・なんか・・・濃いですね・・・。）

そう思った日本でありました。

とりあえず、一回ドイツ宅へ帰ろうと思いかいます。

。たいして動いていないのに疲れてるのは気のせいでしょうか・・・
)

お国に泊まるう！その6（後書き）

なんか最近ベラルーシがバカ○スの翔子に似てきたような・・・？

お国に泊まるう！その7

第六十一話「だんだんめんどくなってくるww」

「はあ・・・で、戻ってきたと・・・。」

「はい、深夜だと言うのになんとも・・・。」

そう、忘れていましたが今は深夜です。深夜の2時。

「まあ・・・っは！いけません、もうこんな時間ですか！」

「どうかしたのか？」

「アニメが始まります！」

「・・・そこにテレビがある・・・。（また二次元か・・・。）」

「ありがとうございます」

ッピ。

「・・・、チャンネルまわして・・・・・・・・あれ??」

「あー……。当然のことだが日本のテレビ局はとつてな……。」

「いやあああああああああ!??」

「っひ……。!??」

「見れないんですかあ!??私はあの子が見れないんですかあああああ!??あの子が動く姿さえ

見れないんですかあああああ!??なんで、なんでですか!??なんで日本のテレビ局じゃ

ないんですかあ!??私は……」

ブツン。

日本の何か大事な回線が切れました。

「嗚呼……。そうだ……。そうすれば・・・・・・・・。。。」

ゆらつと立ち上がり荷物を整える日本。まるでゾンビ。

「・・・・・・・・日本？」

壁際に避難していたドイツは恐る恐る訊きます。

「私・・・帰ります・・・。私は動くあの子を見たいんです・・・
わたしは・・・。」

ゆら、ゆら、ゆらあ。

「ああ・・・・・・・・そうだな・・・き、気をつけて・・・。」

柳のように体を揺らしながら日本、もといゾンビは出て行きました。

「な・・・なんだったんだ・・・・・・・・？」

「悪夢を見たのだとお思いなさい。」

「そ・・・・・・・・そうだな・・・。」

ご愁傷様〜。

因みに北朝鮮。

「え・・・ナニソレ・・・俺の苦勞は・・・？おい二次元才子もい
い加減にしろ作者あああ！

これじゃ俺やられ損じゃない！？そうじゃない！？ちょっと空し
いよねうん。・・・

・・・はあ・・・。」

完。

お国に泊まろう！その7（後書き）

どうでもいいですが今日私の誕生日なんですよ・・・。

うん、全然気にしてないよ？家族にマジで「今日？なんかあったっけ？」とか
言われても全然気にしてないよ？

ほんとに全然気にr y)

ツンデレとは

第六十二話「私は黒猫が一番好きです。」

「なあ、日本！ツンデレって萌えるよな！萌えるよな！？」

「はあ……。」

そついきなり北朝鮮が言ってきました。

「なあ霧乃のツンデレって萌えるよな！？」

どうやら日本のライトノベル、俺の妹がこんなに可愛いわけがないを読んだようです。

「まあ、霧乃ちゃんはツンデレが売りですからね。普段は兄に対してのツンツンとした態度、
しかしいざデレてみるとのギャップが萌えます。あと強がりでおたくなところとか。」

分からない方すいません。マジですいません。

「でさ、日本。そこで頼みが……。」

「なんですか？」

「シンデレになつてくれないか？」

「却下。」

「酷いな、でも日本が俺にどんな暴言を吐いてもシンデレとして受け取るから」

「頭がお花畑な人ですね。」

「でもそれならいいだろ？」

「む……まあ、いいでしょう。」

と言うことでシンデレ開始。

「私、貴方のこと大っっ嫌いです。」

すべての嫌悪感を籠めたような声ですね。しかし北朝鮮は幸せそうです。マゾヒストか。

「氏んでください。」

「うんうん。」

「私の眼を汚さないでください。」

「う．．．うんうん。」

「この世界に存続しないでください。」

「う．．．？」

「血肉残さず消え去ってください。」

「え．．．ちょ．．．。」

「六道輪廻しないでください。」

「それはあまりにもひど・・・。」

「八階層地獄の最下層に堕ちて永遠に悶え苦しんでください。」

「貴方みたいな人は纏足でもされ「ストッーーーーープ!」!」

「なんですか？まだまだ罵倒語はあると言うのに。」

「もうやめて。お願いだからやめて。しかもなんでこんなに罵倒で
きんの!？」

「普段から考えていることです。」

「ひどい！ひどい！日本人は罵倒句が少ないって思っていたのに！」

「ふふ・・・。」

「てかせめてツンデレならデレてよ!」

日本はしばらく考えたあと、ニコっと、それはそれは素晴らしい笑顔で微笑みました。

「この世から骨肉血肉残さず消えてください」

「デレてなあああああい!!!!!!!!!!!!!!」

ツンデレとは（後書き）

一回やってみたかったこのラノベネタ。

ヤンデレとは

第六十三話「ヤンデレ兄妹」

「なあ、日本。ヤンデレってどう思う？」

いきなり北朝鮮がそう言ってきました。

「は？ヤンデレ？」

「そう、ヤンデレだ。」

「ん〜・・・萌えるものは萌えますねえ・・・。」

「っは???マジかよ!??」

北朝鮮は信じられないような顔をし、後退っています。

「な・・・何か？」

「だって怖いだろ！？ヤンデレ！『愛って痛いんだよ！？だからもつと愛して！』とか！」

「ああ……。そら〇とを観たのですね……。」

どうやらそれが怖すぎてトラウマになったようです。

「怖い……。ヤンデレ怖い……。」

少し幼児退化中。

「あははっそんなヤンデレ位で……。そんな……。ね……。」

「だって日本がヤンデレになったら……。『貴方を殺して私も死ぬわ！』とかさ！」

「それは天地が逆転して石から花が生えオタクが日本から居なくなるよりもありえませんか。」

「うっ……。ヤンデレ怖い……。」

よほどなトラウマみたいですね。

「でもツンデレならともかくヤンデレなんてそうそういるわけが・
」

「そうだよな！」

しかし日本は途中で言葉を切りました。

「いるわけが……いるわけが…….いる…….」

「っは!？」

身近に一人いたのを日本は思い当たってしまいました。

「いましたね…….それも一人ではなく二人…….」

「え…….誰だよ…….？」

「ベラルーシさんとロシアさんです…….」

「ああ・・・・・・・・。あいつらか・・・・。」

通称ヤンデレ兄妹。特にベラルーシは有名です。

「でもあいつなんてせいぜい結婚結婚言っただけだろ？」

「いやそれが・・・・。」

そして北朝鮮は知ります。恐ろしい事実をつ・・・・！

・ロシアがベラルーシ対策にドアを閉め居ないふりをしていたのに
も関わらず

「このクソドアノブがあっ！兄さんと私を邪魔するか！」と言いつ
ドアノブを破壊。

そのあと「にいさーん・・・私たちを隔てていたクソドアノブは
もうないわよ・・・・。さあ

けっこんけっこんけっこんけっこん結婚けっこん・・・・」「帰っ
てえええええ！」

・赤い文字で結婚結婚結婚と刻まれた怪文章をロシア宅へ投下。な
んらかの呪いか捨てられず。

・ロシアが公園でまったりとラジオを聴いているのに後ろから襲撃。
ロシア避けられず。

・G8に行く途中ロシアに付いてくる。日本と喋っていると嫉妬し
天然のクーラー並みの冷気を
発し続ける。そのあと痺れを切らしたか日本の服の中へ進入。二
人羽織を披露。

・ご丁寧に赤文字で好き好き好きと柄の部分に彫られたナイフを
プレゼント。なんらかの
呪いで捨てられず。

「・・・と、私が覚えてるだけでもこれだけあったと・・・。」

「ひiiiiiii！？ヤンデレ怖いよ・・・ヤンデレ・・・。」

結局北朝鮮のトラウマを増やしただけのアニメでした。

因みに作者はそらおと好きですよ！あ、言っちゃった・・・。

ヤンデレとは（後書き）

ツンデレ、ヤンデレときたら・・・。

クーデレとは

第六十四話「居ないよね。」

「なあにほーん。」

北朝鮮が気の抜けた声で言いました。

「なんですか？」

「ツンデレって誰だ？」

変な質問ですね。

「え・・・何をいきなり・・・？ツンデレならイギリスさんじゃないですか？」

「だよなあー・・・ヤンデレはロシア兄妹・・・。なら、クーデレは？」

「ク・・・クーデレですか？」

「うん。誰がいるか？」

言われてみればツンデレは眉毛、ヤンデレはコルコルと結婚の人。
しかしクーデレ・・・。

「そういえば私たちのなかでクーデレっていましたっけ？」

「そう、それなんだよ・・・。どうしてもクーデレだけが居ないんだ・・・。」

「まあ考える必要も無いと思いますが・・・でも今思い当たるのは・・・。」

「なんでクーデレだけ？ バランスが悪いじゃないか。」

「それはそうですね・・・。」

否定はしない日本。

「クーデレ・・・クーデレ・・・クーデレ？」

北朝鮮は頭を抱えて唸っています。そこまですることないんじゃないじゃあ・
・・？

「・・・・・・・・・・・・・・・・っあ！一人いました！」

「誰だ！？」

「アイス・・・・アイスランド君です！」

「あいすらんど・・・・ああ！でもなんであいつが・・・・？」

「例えば・・・・。」

・お兄ちゃんと呼ぶのを嫌がり一度出て行くがそのあと戻って来て
シネのサインをしながらも言う。

・デンマークをつざがりながらも拒否はしていない様子。

「などと言う行動からこれはクーデレだと！！！！！！」

「ん．．．でも、クーデレって一歩間違えるとツンデレだよな
ゝ。アイスランドも微妙．．．」

ズガガン！！！！

にほんは はげしい しょうげきを うけた！ まっしろになっ
ている！

「日本？にほーん？大丈夫かー？生きてるかー？」

北朝鮮が日本の目の前で手をふらふらさせます。

「……、……、……は！」

にほんは
きが
ついた！

「それをいって駄目ですっつっつっつっつー!」

「はいいいい！？」

「そんなツンデレばっかる増える世の中嫌いです！もう二次元も信じられないいい！……！」

「にほ………ん………！………！？」

結論。クーデレは絶滅危惧種。

クーデレとは（後書き）

昨日バカテスの9巻買いましたー！発売されて嬉しかったです！

アキちゃんまた出ないかなあ・・・。

あ、あと昨日日英同盟結成おめー。

デレデレとは

第六十五話「外道」

「いや・・・かわええなあ・・・。」

今日も北朝鮮は日本の家でぐるぐる。最早二ート。

「はあ・・・貴方もいい加減に・・・。」

「いやゝデレデレカワイイわゝ萌えるゝ。」

「デレデレ?。」

突然日本の眼が光りました。

「デレデレっていいよなー・・・。」

「デレデレ・・・?デレデレですか・・・!。」

「お・・・おつ、デレデレだ・・・。だって萌えないか・・・?」

「それは邪道です!」

「はあ・・・?」

「私は断じて!認めません!」

ずっと顔を近づけてくる日本。北朝鮮は後退ります。

「いや・・・。でも普通にいいだろデレデレ・・・。」

「この馬鹿者があああああああああ!.....!!」

「はい!?」

いきなり日本が叫びました。

「いいですか!?ヒロインの王道はツンデレ!稀にヤンデレ!希少種のクーデレ!それ以外は認めん!

デレデレなど面白くもない！そんな奴はヒロイン失格だああああああああ！」

価値観の暴走により一時的に敬語が使えない日本。

「いやでもデレデレいいじゃないかデレデレ。むしろツンデレより・
・。」

「ななななななな！」

「はい深呼吸。すーはー、すーはー。」

「・・・つつ・・・例えば桐乃からツンデレをとるとただのオタク
なお兄ちゃんっ子に！

輝夜から永淋をとったら駄目オタに！イギリスからツンデレをと
ったら面白くない！

美波からツンデレ？をとるとただの愛情が激しい子に！どうでし
よう！？悪夢でしょう！？」

「ちょっと待った変なの混じってたから！」

「それでもデレデレに走るつもりでしょうか！？」

「うん確かに「本官は断じて認めないぞおおおおおおお!!」
!!」今俺肯定したよね!？」

「そんなふとどき不届きものあ!？、。>@{¥-・、+」

「はい落ち着けー。ひっひっふー。ひっひっふー。」

「それは何かが産まれます!」

結論：日本は二次元が絡むとやばい。

「うん今日で思い知った。」

作者はデレデレも好きですけどね。

デレデレとは（後書き）

今日はマジギレしました。

先生に。学校の。

パソコンがフリーズしました。

第六十六話「フリーズした。」

えっと皆さんごきげんよう。よしおかです。突然ですがパソコンフリーズしました。

正確にはフリーズしていました。そこで、この体験を北朝鮮君と日本ちゃんのキャラに当てはめて今日はお送りします。

よしおか：北朝鮮

友人：日本

お父さん：中国

「はぁ・・・よしパソコンしようー!」

いつものようにネットをしようとしていた私。

・・・、

「終了しろおおおお！いや違う終了して下さい！お願いします！」

終了してくれない。嫌がらせとしか思えません。

「しかもなんだよこれ！？プログラムの強制終了中です！？分かった。だがそんなにいらない。」

なんかプログラムの強制終了中ですゝみたいな窓が10個位開き、他の作業をさせてくれません。

「こうなったら日本に電話だ！」

そして友人にヘルプを。

「あーもしもし日本？なんかパソコンがやばいんだが・・・。」

「どうしたんです？」

「なんかパソコンが・・・（事情説明）」

「ああ、それならなったことがあります。」

「解決策は!?!」

「再起動してください。」

「分かった!」

カチッ（スタートを押す音）カチッ（終了セッションを開こうとする音）カチカチカチカチカチ・・・

「いやいやそれ自体が開けないんだけどおおおおおおおおお!?!」

「・・・はあ・・・。これはしょうがないですね。強制終了してください。」

「それもできねえんだよ!?!!」

「はあ!?!?」

「いやマジで。」

強制終了もできない。窓は開き続ける。動かない。どうすればいいのでしょうか？

「じゃあもういつそ元栓抜いてしましましょう!」

「そうだな!そしたら楽になるよな!」

だんだん混乱してきて変になってきた私たち。とりあえず元栓を抜くことを実行に移します。

「えっと・・・コレかな?」

抜こうとしたその時。

ピピッ

「なんか変な音したあああああ！」

「かまうものですか！」

「そつだな！えい！」

とりあえず何かの線を抜きます。

ブチッ

「あ。なんか画面がブラックアウトしたわ。」

「切れましたか！？」

「いや画面だけだ。」

私が抜いたのは画面の線で、本体ではなかったようです。

「もうだめだ！中国に訊く！」

「そうしたほうがよろしいでしょう。」

で、父に電話。

「もしもし？なんかパソコンが（以下略）でさー……。」「

「いったい何をしたらそうなるあるか……。なら一回『黄金のキー』を試してみるよろし。」「

「分かった。」「

黄金のキーとはアルト、デリート、コントロールの三つのキーのことです。これを同時に押せば
大抵のことは解決する（一部誇大）ようなのでした。

タンッ（キーを押す音）

変化無し。

タンッ

無視。

タンタンタンタン・・・・

「無視かよおおおおおおお！」

「もうなんですか。私が悪いなら謝りますから。御免ね変な小説と
か動画とか見て！御免なさい！
すいません！許してください！」

「しょうがないあるな・・・これは最終奥義・・・」

「最終奥義？」

「強制終了ある！」

「同じだろおおおおお！」

「いや、絶対長押ししたら強制終了されるはずある！」

「むー・・・まあ駄目もとで・・・。」

押します。押し続けます。

「長い……。」

しかしとうとう。。。

「やった！……！！……！！強制終了できたあああああああああ
！」

「よし！それならもう一回起動するよろし！」

「ああありがとう！」

そしてお礼を述べ、再起動。

途中まで順調でした。

「ん……。なんだコレ？カウントダウン？」

しかし謎のカウントダウン。

「つてえええええ！なんか英語がいつぱいでてきたあああああ！！」

ワタシエイゴワーカリマセーン。

「日本たつて。ヘルプミー。」

「ああもう終わりましたねw」

「まってなんで半笑いなのかな？」

その間にも英文は私に何かを訴えてきます。分からないから。

「もうオワタ・・・駄目だ・・・。」

と！そのとき奇跡が！

あの英文の画面が切り替わり普通の起動画面へ。

そしてデスクトップ画面へゴールイン！！！！

「よっしゃあああああああああ！」

「よかったですね。」

そして今に至る。

とにかく友人と父へ。ありがとう！！！！

でもまたいつなるか冷や汗ものです・・・。

パソコンがフリーズしました。（後書き）

いやマジで今日学校から帰ってきたらこうなっていました。原因不明。

お知らせ&節分

第六十七話「はあああ……。」

今日は二月三日。節分です。

しかしそれを知らない北朝鮮。今日も遊びにきました。

「おい日本遊びにきた……って………?」

そして北朝鮮を出迎えたのは非常にシユールな光景。

なにかぶつぶつ言いながら豆のようなものを地面に向かって投擲している日本。

普段なら絶対食べ物を粗末にしないことは勿論のこと、ましてや地面に投げるなど言語道断。

そんな日本が食べ物を粗末にしている……このデータから北朝鮮が導き出したことは……

「イギリスに白い粉を飲まされたか・・・ロシアに調教されたか・・・パソコンがフリーズしたか・・・そのどれかだろうな。」

「絶対違うのでご安心を。」

見ると日本が呆れたような顔をして北朝鮮を出迎えました。

「あ！日本。どうして食べ物と地面に叩きつけているんだ？」

「えつとですね・・・これは節分と言って邪気を追い払う行事です。邪気のかわりに豆を撒いて清めます。その際に『鬼は外、福は内』と言うのですよ。」

「へ〜〜〜え。なんか面白そうだな。でも鬼は外って言っ意味あんの？」

「それは日本には言霊というものがあり、言葉には力があるとされています。」

「・・・日本家って面白いな。参加させて〜。」

「まあいいですよ。」

ここから豆まきの様子。

「鬼は外！。鬼は外！。」

「おには・・・いつてえ！ちよやめ・・・痛い痛いやめてやめてなんで俺にぶつけるの！」

「だって鬼は外おにがひがひなんですから」

「それ暗に俺のこと鬼って言うてるよね！？」

「そして豆を撒き終わったら福豆といって歳の数だけ食べるんです。」

「俺どんだけ食べればいいんだ！？」

「頑張ってください。私はそれ以上食べなければいけないのですから。」

「俺ダンボール箱にいつぱいの豆なんて初めて見た！こわ！」

「ふっ……。」

「あれなんか日本が格好いいぞ！？」

そして豆まきの次は恵方巻きを食べます。

「今年の恵方は南南東。ニューカレドニア、天国に一番近いといわれている島です。」

「物知りだな！？」

そして無言で太巻きをもしゃもしゃやります。

「てか変な行事だよな。日本人が一斉に無言で太巻きを食べるって。」

「黙ってください！」

今年の節分は賑やかになりました。

完。

ここからお知らせ。

えー……。私よしおかは今日ある男子の巻き添えになっ
て手首を捻挫しました。

利き手が右で捻挫したのは左手です。左手動かせません。

なのでキーボードが打ち難いのです。

もしかしたらこの小説もあまり更新できないかもしれ
ません。すい

でもできるだけ頑張ります！

お知らせ&節分（後書き）

一言

男子の左手と私の左手交換してほしい。マジで。

自己設定。

<http://mitenin.net/imagemanage/viewimage/icode/17764/>

北朝鮮のビジュアルイメージ。友達に頼まれたので頑張つて書いた
はいいですが・・・。

うん、ごめんね

下手ですいません。本当にすいません。

足りないところは妄想でカバーしてください

個人的に北朝鮮は鬘かぶってます。ほんととはもっと短いです。

顔は色白くて男って感じがしないとか。あえて言うなら優男。

服は基本的にズボンで。スカート穿きはじめたらほんとの変態じゃないですか！

（今でも十分とか言っな！）

髪の色は栗色。髪とつたあとも栗色な。

自己設定。(後書き)

恐れ入りますすいません。

ネット対戦

第六十九話「まさか」

イギリスが仕事のことで日本に連絡をしました。

「ああ日本、この前のことだが・・・。」

「今忙しいんです！あとにしてください！」

「は？」

そして0・1秒で切られました。

「ちょ待て！今・・・。」

さて、日本になにが起きているのでしょうか。

く日本宅く

「何ですかこれ！このウイルス！私のパソコンをハッキングするのはいい度胸ですね！？」

日本は額に汗を垂らしながらウイルス除去をしています。

謎のウイルスが日本のパソコンに侵入し、荒らしまわっているのです。

「何ですか！？私のパソコンのウイルス対策は万全なのに！？」

伊達にIT大国と云われているわけではありません。ウイルス完備は万全のほうです。

「こんなことできるのは……。」

1・ロシア

「いませんね。誰でしょうか。」

会いたくないからスルー。

と、そのとき電話が。

「イギリスさん！仕事の話なら後にしてと言ったでしょう！？」

「いやー。俺だよ俺。」

「この声は・・・北朝鮮さん！？」

「そう。突然だが今お前のパソコンにウイルス侵入してないか？」

「絶賛侵入中ですよ！」

「それ俺がやったから。」

「は？」

日本の時が止まりました。

「もう一度お願いします。」

「だからそのウイルス俺がやったって。」

「手前がやったんかちよつと後で家の裏こいやああ？」

八橋はログアウトしたようです。

「っひ！？いや日本とIT勝負しようと思って」

「上等ですコノヤロー。喧嘩売ったからには覚悟しときなさいこの阿呆！」

もしもし日本さんー？キャラ違いますー。

「こわっ・・・でもこのウイルスはな、そこらのウイルスとは違うんだよー！」

どんなウイルスだ。

「分かりました。」

ガチャン。

電話を切り日本は出かける為に服装を整えました。

北朝鮮宅

「ふふ。流石の日本もこれには……。」

一人でにやついている変態。

「えっと貴方のパソコンってこれですか？」

「うん。そうだけど。」

•
•
•
○
•
•
•
○
•
•
•
○
•
•
•
○

「って日本！？なんでここに！？」

「いや、ウイルス駆除するの面倒くさいので。大本から殺^やつてしま
いましょうと。」

「うんその刀をとりあえず下ろそうか。そして深呼吸してお家に帰ろうか。」

「いつせーのーでー。」

「いやなんでパソコンに向かって振り下ろそうとしてるのかな？そのパソコン高か・・・」

「えい！！」

ドカツ

「ああああああ俺のパソコン！？」

「ではさようなら」

「うつ・・・俺の・・・」

教訓：日本に喧嘩は売るな。

おまけのイギリスさん。

「日本に嫌われた・・・日本に・・・。」

おしまい。

ネット対戦（後書き）

現在右腕強化月間中。

「そうですね・・・？どうされたのですか？」

「うああああん日本なんて嫌いだあああああ！！！」

「アメリカさん！？」

そして冒頭に戻る。

「鯨は友達なんだぞ！友達なんだぞ！」

そして半泣きで鯨が友達であることを訴えてくるアメリカ。

「そう言われましても・・・捕鯨は・・・なんと言うか日本の文化みたいなものでして・・・。」

「じゃあ君は友達を食べるのかい！？カニバリズムかい！？」

「ひ・・・人聞きが悪いですね！！！！」

「うあああああああ日本の馬鹿あああああ！！！！！！」

「イギリスさんですか貴方は!？」

そして言うだけ言って去っていったアメリカです。

「はあ……面倒なことになりそうですね……。」

次の日。

「おい、日本。居るか？」

突然イギリスが訪ねてきました。これはもう悪い予感しかしません。

「はあ……。どうされたのですか？」

「実は捕鯨のことに關してなん「お断りいたします。」」

間髪入れず返した日本。やはりフラグ的中。

「いやでもな、こっちにも「また今度と言う事で。」」

「・・・なあ日本、知っていると思うが日本には慇懃無礼と言つ言葉があるのだが・・・。」

「勿論知っていますよ?。」

「・・・俺はアメリカに頼まれたただだ。べ・・・別にアメリカの為じゃ「ツンデレ乙。」」

この日本容赦ねえな・・・。

「う・・・日本でもさ、俺もさあんまり捕鯨は良くないと「善処します。」」

「でも考える位は「今回は縁が無かったと言つことです。」どうかの面接か!?。」

今日のイギリスは突っ込みが冴えますねー（棒読み

「よしぶつちやけるとだな、つまり鯨獲るなと」（＾p＾）「大丈夫か日本ー!?!?。」

にほんは　ちをはいて　たおれふした！

「大丈夫です。とりあえず鈍器（バールのようなもの）を取ってこなければいけないので。」

「とりあえず落ち着こう。」

日本が冷静を取り戻すのはそれから15分後でした。

続く

鯨その1（後書き）

学校で臨 この字習ったんですけど、その例文のところに某デユラ
ララ！！

の臨也って書きたいのって私だけですか？

鯨その2

第七十一話「熱？そんなものあるわけが」

「断固拒否致します。」

あれからアメリカもやってきて日本に鯨を獲らないように説得をしますがなかなか折れません。

普段アメリカにはうだつの上がない日本ですが・・・。

「でもさー、鯨はやはり知能があるだろ？それを食べるのは拙くないか？」

「所詮は哺乳類。人間よりも勝っている訳ではありません。それに何度も申し上げたはずですが鯨の捕食は我が国の

文化です。それをとにかく言われる筋合いはありません。」

いつになく辛辣な言葉で反論する日本。このことからかなり本気であることが伺えます。

「う・・・。」

そんな日本に反論できないイギリス。

「とにかく駄目なんだぞ！」

しかしAKYアメリカはそんなことお構いなしに反論。

「……お断り致します。」

「いや、認めないぞ！」

そしてアメリカと日本の間に絶対零度の空気が漂ってきました。

「まあ、とりあえず冷静に話し合いをしよう……」「イギリスは黙
ってる（下さい）」「」「」

「……べ……別に哀しくなんかry」

イギリスが立ち直るにはもう少し時間がかかりそうです。

「どうしても譲れませんか・・・。」

「そうみたいだな!」

「分からぬならば・・・。」

「「実力で・」」

そして日本はお馴染み日本刀。アメリカはどこからかバズーカを取り出しました。

「ちょwwwおまwww」

イギリスが止めようとしますが、

「「眉毛は黙ってる」」

二人に切り捨てられました。

・・・作者は何も知りません。

続
い
た
ら
い
い
な

鯨その2（後書き）

さよなら。

あと祖国誕生日おめでとう。

鯨その3

第七十二話「完全復活」

ここは日本の家の外。

そこでは二人の人物が対峙していました。

「前々から貴方には言いたかったんですよ……」

「H A H A H A！面白いジョークを言うじゃないか！」

まあアメリカと日本なんですが。

「きつと君も後悔すると思うんだぞ！」

「それは……。」

日本は刀を握り直しました。

「こっちのセリフです。」

そしてアメリカを鋭く睨みつけます。

普段アメリカにはうだつの上がらない日本ですが、今回はかりは譲れません。

そう、・・・食べ物に関しては！！！！！！

「なんかかつこいいようであつこよくないような!？」

「「ツンデレは黙れ」」

・・・。

「・・・。日本。もう一度言つよ。捕鯨を止める気は?。」

「ありません。」

何故か日本とアメリカの間の温度が10度近く下がりました(体感

的な温度で)

「それならば、」

「それなら、」

「「実力で。」」

ここで周辺壊滅フラグが立ったのは言うまでもないことで。

「もう止め」「不憫は黙れ」「」

眉毛が切り捨てられたのは言うまでもないことで。

こんなときに限って頼りになる国は居なくて。

さて、後に残るは機嫌が悪いアメリカ&日本。

このことから推測できることは。

「マジでやめろ！このままじゃ・・・。」

いろいろ破壊されますね。

続く

鯨その3（後書き）

こんにちはお久しぶりですよおかです！

しばらく書いてなかったから小説の書き方忘れるr y)

鯨その4

第七十三話「これってバトル小説だったけ？」

アメリカが銃を構え日本が日本刀を構えました（ややこしい）

まずアメリカが先に動き銃弾を放ちます。その単純な動きはすぐに避けられました。

「鯨は、知能があるんっ・・・だぞ！そんな、ものを、捕食するのは、グロテスクだと、思わない、かい！？」

「そう言うアメリカさんもお家でハッピーツリーフレンズとか言うグロテスクなアニメを放送なさってらっしゃる！」

「あれは、知能が無いから、いいんだよ！」

「・・・・・・・・。」

双方打ち合いながら会話を続けます。

しかしだんだん会話が少なくなつて激しくなつてきました。

具体的に描写すると砂埃が散つたり日本の着物が汚れたり瓦が飛んだり・・・瓦？かわらあああああ！？

・・・犬が吠えたり何故か誰かが泣いていたり。

ぶつちやけテラカオスｗｗｗｗ

・・・・・・・・ってレベルじゃねーぞ！！！！

アメリカと日本。その二人が大暴れしたら止められる者はおりませ・
・
・
・

「はあ・・・。ほんと誰か止められないのか・・・？」

イギリスあ溜息をつきました。そしてある考えが―

「・・・・・・・・いや、それは流石に・・・・でも・・・・・・・・いやいやいや・・・・・・・・・・」

数分間の葛藤の末イギリスは意を決したように北へ向かいました。

「で・・・報酬は？」

「・・・・・・・・・・報酬？」

「ただで物事をやるサービスはないよ？」

「・・・・・・・・なら俺の秘蔵の写真、日本のはんら」そついうのはいいから。」

「ならどついうものだ？」

「例えば・・・・・・・・このことが終わったらなんでもしてもいいとか？」

「・・・・・・・・（日本ごめんまじごめん）・・・・・・・・分かった・・・・。」

「うふふ。やったあ」

なにかが、始まっています。

鯨その4（後書き）

出才子で候。特に意味はない。

なんか個人的に露によ日絡みが好きなんです。

なのに何故少ない…！

鯨その5

第七十四話「ラスボスあらわる」

「ねえアメリカさん。」

「なんだい？」

「一回戦闘を止めませんか。今はそれより大事なことがあるはずですよ。」

「ああとても同意なんだぞ！俺たちが戦うべき相手は……。」

「ロシア（さん）だね（ですよね）」

緊急警報。緊急警報。前方にロシアらしき人物を発見。片手にはどうも水道管らしきものを所持しています。

「アメリカさんなのであの危険人物がここにいるんですか!？」

「おk。じゃあいちにの・・・」

「さ、つーかまえた」
「んんんんんん！？？」

はいダウト。

「駄目だよ喧嘩しちゃあー。みんななかよくしないと。」

「はい喧嘩なんて二度としないんでその腕を掴んでいる手をお願いですから離していただけますか？」

「そして俺の首筋に当てている水道管をどけるんだぞ！」

「うふふ。駄目。」

「お前らが喧嘩なんかするから」「このツンデレクソ眉毛のアホー――――！！！！」「」

「離してください離してくださいーだーさーいー!!!!」

「いい加減どけるんだぞ……なんで益々あててくるんだい！」

「？」

「そうです！こんな老人を苛めてなにが楽しいのですか！？老人虐待で訴えますよ！？」

「ヒーローを苛めては駄目なんだぞ！」

喧々囂々とまくし立てますがロシアは全然動じてないようです。

「じゃあもう喧嘩しない？」

「「善処します」「」

「・・・なんでアメリカ君まで・・・。」

「まあ、もういいんじゃないか？また捕鯨のことはキチンとしたところで言うことにして。」

珍しくイギリスが良いことを言いました。

「ほんとに喧嘩しない？」

「「「おk」」」

「．．．．．なんか心配なんだけど．．．。」

「まあ、そう言うことで。」

なにか不満そうでしたが一応ロシアは手と水道管を離しました。

「はあ．．．。」

「ふう．．．。」

日本とアメリカがそれぞれ息をついて、アメリカは帰路につきました。

「はあ．．．。疲れました．．．。今日は家に帰って．．．。」

「お邪魔するよー。」

「なんで貴方がいるんですかあ!？」

「俺も。」

「眉毛は帰れ。」

「応終？」

鯨その5（後書き）

あー瑞によ日読みたい露によ日みたいー。

欲望が渦巻く今日この頃。

鯨 後日談？その1

第七十五話「図々しいんだぜ！」

「いやとにかく帰ってください。」

「お・・・俺は別に日本に香りがする家に入りたいとかそんなこと
「ツンデレてか変態orz」」

「僕はイギリス君に二人の喧嘩を止めるかわりに二人に何でもして
いいって言われたから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・イギリスさん？」

「や・・・それは・・・ほら、方便っていうじゃ」「コルコルコルコ
ルコルコルコルコル」・・・。」

「・・・分かりました。じゃあ帰れ^^」

「えーやだー^^」

えっと、状況説明します。

なんかかんやで一旦落ち着いた鯨騒動。仲介した？ロシアが帰ってくれない（オマケの眉毛）

日本めっさ帰ってほしい。とこんなもんです。

「まあ、とりあえずご帰還願います。」

「・・・俺はかえ」待て眉毛。私をこの・・・なんと言いますか危険人物とで残していくつもり」だ」

帰れ帰れ言ってた日本ですが危険性に気づいたようでした。

同時にイギリスも自分がこのままいることの危険性に気づいたようです。

「離せ俺は帰る。」

「いやまってくださ」いいよー ばいばい。」

はいとても嫌です。」「

「いやいやせめて考えようよー・・・。」

即答するほど嫌なようです。それこそ普段厭わしく思っている北朝鮮を呼ぶほどには。

「いや折角二人つきりなんだからなんか愉しい事しようよー。」

「そのたのしいの漢字に不幸な予感がするのでやめときます。」

「うふふ」

作者も不穏な予感しかしません。

続くのです。

鯨 後日談?その1(後書き)

一言

作者の欲望が爆発してこうなった。

作者の暴走は続く。

鯨 後日談？その2

第七十六話「誰か助けてb y日本」

「では私はとりあえずお茶を淹れてきます。」

「と言いつつ身支度を整えてるけど。」

「私は整理整頓が大好きなんです。」

「十分綺麗だと思うよー？」

「いやいやそれは所詮見かけだけのもの。私的にはまだまだなんです。」

「今やらなくてもいいんじゃない？」

「客人が来ているから尚更です。」

ギシギシ。空気が軋んでいる気がします。

「折角だからさー。お話しない？」

「何をですか？ああ分かりました卑猥な話なんですなそれとも中国さん家の官刑並のグロ話ですか？」

「ちょっと待つてなにをどうしたらそんな思考に行き着くのかなー？」

微かにイラついた風のロシア。その空気を敏感に感じ取った日本は一步後退りました。

「僕一度ゆっくり君とお話してみたかったんだ 嬉しいな。」

（本人の了承無しですか・・・？）

「でも・・・なんで嫌がるのかな？」

（それは私が貴方を苦手だからです！！）

「まあ、幸い二人つきりだしね」

そう言ってロシアと日本の距離が些か縮まりました。

日本はその分だけ後退ります。

「近寄ったら叫び声をあげて華ちゃんを呼びますよ。」

「何で？僕何もしないよ？」

（嘘おっしやい！！！）

日本は心のなかで激しく突っ込みましたが口には出しませんでした。
てか出したら終わる。なにかが。

「アハハハハハ。では私は全力で今からトイレへ」「逃がさないよ？」
「ええええええええ！！？」

ロシアは全力で走ろうと思っていた日本の手首を掴みました。

「いや本とマジでトイレ行きたいんで離してください。婦女暴行で訴えますよ？」

「そう口には出しながらも何故か風呂敷を担いで走りこみの体制をとってるけど？」

「気のせいじゃないですか？」

日本も全力で惚けます。まあ身の危険（いろいろな意味での）さらされているのでそれも当然ですね。

「あはは。またそんな惚けちゃって」

口元は笑っていますが目は恐ろしいほど笑っていないロシアさん。

（やばいですね……。これは本気で怒らしてしまいましたか？）

何を今更。

「てかロシアさん掴んでる手首若干痛いてかいたたたたたたた！
！！！！」

なんか手首がギシギシいつてる気がしますが作者の気のせいであって下さい。

てかこれアメリカとは別の意味でやばいんじゃない的な？（香港違います）

「あははは。気のせいじゃない？」

「とか言いながら益々強く握り締めてレベルじゃ痛いたたたたたた痛い痛い！！！！」

なんか日本が北朝鮮みたいになってきました。それがバカテスのあきひry)

「うふふ。離さないよ？力では君僕に適わないでしょ？」

「なら離してください。老人は労わるべきですよロシアさん？そろそろ間接がやばいですロシアさん」

続くんじゃ。

鯨 後日談？その2（後書き）

もうなんか鯨関係なくなね？

あと何故オーストラリアを出さないかと言うと本家でキャラが固ま
ってないから
です。

それで出すのは失礼かなとか思いまして。

鯨 後日談？その3

「ラッキーセブンティーンセブン」これはただ嬉しかっただけで意味はない。第七十七話」

(なんで・・・なんでこんなことに・・・)

そのとき日本はとてもとても後悔していました。

すべてはあの某ツンデレのせいなのです。

そう．．．あいつが余計なことをしなかったら．．．

状況説明：日本刀V S 水道管&呪い

(これは夢なんですかねわかりますっ……!!!!!!)

「これは現実のことだよー？」

「心読まれた!？」

流石ロシア。読心までも身につけているとは。

「ふ……ならご帰還願います。いい加減にしないと家が崩壊します。」

「もともと崩壊してるようなものじゃない？」

「さり気に酷いですね!？」

まあさんざ暴れまくったあとのこれですからね。

「まあ結局ロシアになれってことなんだけどね」

「だが断る!!!!!!」

即答ですね。

「君に拒否権はないよ?」

「知らないんですか?日本ではこの言葉を発動することによりどん

な誘いでも跳ね除けられます!」

「でも勝てるという確信がないなら死ぬ気で用いること。」

「なんで知ってるんですか!？」

「ということで今その発言により君の死亡フラグが立ったということになるんだよ?」

「ロシアンルールk t k」無理やり乙。」

「そんなこと逝っちゃっていいのかなー?」

「よし叫ぼう。中国さん呼びます。」

「あはは。面白い考えだね?携帯でもつか「にーーーーにーーーー
!-!-!-!」」

「……………何してるの?」

「呼んだだけです。」

「いや僕もそんな原始的な呼び方とは思わなかったよ？ 第一そんなので来るわけがないじゃないか」

「にほんにーにあるよーにー!」

「ちょ……抱きつかないで頂けますか？」

Γ

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

O

L

亜細亜事情は分からない。そう思ったロシアであります。

「ってなんで俄國ロシアがあるあるかー!？」

「というわけでーに頑張ってください！」

「いくらなんでもそれは無理ある――！」

続
い
ち
や
い
ま
す。

鯨 後日談?その3 (後書き)

やばアリプロの曲ばっか聴いてたらギャグが無くなってきたorz

頑張ります。

鯨 後日談？その4

第七十八話「ジョーカー扱い」

「やあ中国君。こんなところで奇遇だね」

「どう考えても故意にあるが！？」

「ではーに。私はちょっとファミリーマート行ってきますので！」

「オイちよつと待つある。まさかにげ」にーにお願い」「こんなときばかりにーにと呼ばれても嬉しくないあるー！ー！」

「だって、ホラ、ロシアさんも中国さんとお話したいんですよ！だから邪魔者の私は消えます。」

「うん僕も中国君とお話したいよ。」

「はい決定！お二人ともさようなら！！」

日本は全力疾走でこの場を離れようとしたが、

「逃がさない（ある、よ？）」「」

二人にがしつ、と掴まれました。

「我だけ残していくつもりあるかこの薄情娘！」

「勿論です！」

「ちょｗｗｗｗおまｗｗｗｗ」

「僕日本ちゃんとも話したいなーなんて。」

「善処します。」

「逃がさないよ？」

「いやだから善処しますって。」

そう言いながら一度はしまった日本刀をまた取り出す日本さん。

「日本……。諦めるある。すべてはお前が鯨のことで暴走したせいあるよ。」

「でも……」

「そつだよ日本ちゃん。人生塞翁が馬って言うじゃないか」

「いやいやなんで貴方が私のうちの言葉をてか使い方が何かおかしいです!？」

「全ては流れる川の如く気紛れある……。」

「何ですかその無駄にカッコいい名言は!？」

日本は突っ込みすぎてここで一回呼吸を整えました。

「はあ……。とにかく中国さんはともかくロシアさんはご帰還願いますって何度言っただしょうか。」

「大丈夫。君が僕のうちに来れば万事解決」のはずはありません

「!」

よくて監禁18禁エンド。悪くて猟奇成人向けエンドですかね。

「いやですつつつつつつつつ!?!?!?!」

日本は半泣きでふるふると首を振ります。

「ロシアさんは野生のレナさん、もしくは魅音さんですからね・・・」

まあロシアさんは猟奇ヤンデレ系でいいですか。

「んー?何か言っただけ?」

「いいえ何も。」

(でもこのままでは誰かが来ない限り・・・、・・・、・・・、あ
あ恐ろしいです・・・。)

日本は思案を巡らせます。

（そう、誰か日常的にこの人物と接触していて尚且つ体制がある人物・・・）

と、そこで日本の脳裏にある人物が・・・

（・・・駄目もとで呼んでみましょうか・・・。）

日本は懐から携帯を出しその人物にメールを送る用意をしました。

続く

鯨 後日談?その4 (後書き)

性懲りもなくまたBGMアリプロ。

だからギャクがないんだ! (と言っいいいわけ)

鯨 後日談？その5

日本がある人物にメールを送ったと同じ頃。

中国は帰るに帰れない状況に陥っていました。

「中国君。何でいきなり出口の方へ向かうのかな？」

「それはちよつと自由を得るために羽撃くためある。」

「意味の分からない例えを持ち出すのはやめてくれないかな？」

ロシアが見張っていて逃げるに逃げれないからです。

（ああもつこんなことになるなら数分前に自分に「バカジャーネーノ
ww」とか言つて来るのをやめさせればよ かったある！！）

それはあの有名な自称ネコ型ロボットじゃないと無理。

「まあまあ中国さん、気楽にいきましょう。」

「どの口が申すあるか――――！」

ごもつとも。

「だーいじょうぶですって！」

「白々しい演技はやめるよろし！」

当の日本、手をヒラヒラと振ってさっきまでとは違ってかわり気楽
そうですね、はい。

それもメールの相手がよほど信頼のある相手だからなのでしょうが？

「どうしたのかなー？」

「いや別にこれといっては。」

「電話は通じないはずだよ？何故かと言うと僕が予め切っておいた
から」

「「いつのまに!?!」」

「それはお約束b y作者だって。」

まあ漫画でよくあることです。あんまり気にしないでください。てか気にしたら負け!!

(中国さん、中国さん)

(日本?にーにと呼ぶよろし。何あるか?)

(もうすぐで助けがくるはずですよ。それまでロシアさんの注意を惹きましよう。特に窓から。)

(窓・・・?まあいいあるが。いったい誰が?)

(それはですね、「なに二人で話してるのかなー?」ちゅちゅちゅ中国さん!いい天気ですねええ!」

「そそそそつあるな!いい天気すぎて困るあるー!」

「あ、本とだ、窓から見ると冬なのに暖かそうだねー・・・羨ましいな・・・。」

（中国さん！窓から注意を！）

「そそういえば日本は休日は何してるのがあるか!？」

「休日でしたらPC・・・じゃなくてギャルゲー・・・でもなく泣きゲーいやいやアニメ鑑賞嘘だけど
ではなく読書です。」

「今ので大体承知したある。」

「へえ・・・なんかうーん・・・ニートみたいだね」

「・・・働いたら・・・負けだと思っんです」

「逝ってよし。」

と、表面上はなんとか穏やかな三竦み？ですが、その平穩かどうかは知らないものを破る音が。

バリーン！！！

「これは・・・窓ガラスが割れた音！」

「ついにですか・・・」

「・・・なにかなー？」

続く

鯨 後日談?その5(後書き)

眠い。

BGMやはりアリプ
ry

鯨 後日談？その6

第八十話「あとは任せた」

「きました！」

「だから誰が！？」

「俺 参上！！！！」

その人とは・・・

「北朝鮮？」

「イエス。」

「え・・・北朝鮮・・・？」

「はい。」

「助っ人って・・・」

「北朝鮮さんです。」

「日本、次逢うときは天で逢おうある・・・。」

「いや諦めるのはまだ早いです！北朝鮮さん！」

「あ？」

「私に抱きついてください！」

「喜んで！！！」

「ちょｗｗ何考えているあるかあ！？」

そして日本がまさかの発言により北朝鮮は言葉どおり抱きつこうとします。

そして自分の胸に飛び込もうとした北朝鮮に日本は優しく微笑みかけ・・・

投げ飛ばしました。

「え？」

いきなりすぎて状況が理解できない北朝鮮は成す術^{すべ}すらなく飛ばされます。

ロシア向かって。

どんがらがっしょーん。

「いてえ!？」

「何!？いた・・・」

「中国さん!今のうちに!」

「ああ・・・そうあるな・・・」

ダッ

「あーまちやがれ！」

「あ……」

「………なんでロシアが……いやロシア様が……」

「あはは。奇遇だね。こんなところで。」

「（汗）……あはは本とですね……あはははははー……。」

「で、覚悟はできてる？」

「いやすいませんほんとにすいませ」

「うふふ……。」

「ぎゃあああああああああ……！……！」

「中国さん？何か聞こえませんでした？」

「そうあるか？あとお前も怖い奴あるな．．．。」

「いやいや。ロシアさんには劣りますよ。」

こうして一人の人物の犠牲により日常が戻ったのであった。

終

鯨 後日談?その6(後書き)

BGMはご想像にお任せ致します。あのつくものです。

てゆうか久しぶりに更新したような気がしますr

呪いです

第八十一話「いや、両方怖い」

さて、この前の騒動が一段落して北朝鮮は色々されてそれでも回復し日本のうちへ遊びに来ました。

「にーほーん！遊びに来たぜー！」

しかし返事が返ってきません。

「あれ、おかしいな……。靴はあるのに。」

と、和室で日本の姿を見つけました。

しかし変なのです。

「なんだ？あの白くてズボンの長いのは？」

そう、なぜか所謂陰陽師のような格好をしていたのです。

「にほ・・・」

しかもなにかブツブツ言ってます。

「なに言って・・・」

「紅の血を染めぬるは忌まわしく輝きし刀身その身の嗚咽剥ぐは玻璃さあ嘔吐し蠢こうぞそれこそが

私の源となりて塵しへの道さあ絶望と痛苦と嬌声と啼き声を揚げて崇め讃えよ愚鈍な民どもめ悦ぶがいい嗤うがいいその戯言の果てに「こわあああああああ！！！！！！」

なんか凄い怖いこと言っていました。

「日本遂に気がふれたか！？戻ってこい！！！！！！」

「その朱に染まりし鮮血をこの身に降らせよ降らせよ・・・っは！北朝鮮さん来てたんですか！」

「いや来てたとかそう言う問題じゃなくてみたいな！？」

「すみません、気がつかなくて。今すぐお茶を・・・」

「いやいやそう言うことじゃなくてだね、何してたんだよ!」

「へ? ああ、禍唄を唱えていただけですけど何か?」

「よく分からないが響きでヤバい歌だと言うことは分かった。」

そう言いながら北朝鮮は少し身を引きました。

「てか何でそんなものを唱えてるんだよ! その・・・怖いじゃないか! ! ! !」

「いやちよつと呪い返ししてるだけですよ。」

「ちよつとじゃなくて! 危ないから!」

「大丈夫です。これはロシアさんにしか効きませんから」

「何してんだお前ええええええええええ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

「だから呪いがえ」「二回も言わんでよろしい。」「

わー怖い。作者も逃げていいですか？

「だいたい何で呪い返しなんかするんだよ？そもその問題だな。」

「いや、単純にロシアさんが呪ってきたんで返そうと思ひまして。」

「どこが単純だあああああ！！！」

まあ確かに陰陽師とかいますもんね。安部清明とか。賀茂忠行とか。

「じゃあ私は続き唱えますんで。……其の^そ躰^{からだ}砕^{くだ}き^{みらい}未来へも道を^{みち}晒^{さら}い「ストップウウ！！！」」

「もう何ですか！？」

「やめようね！そういうことは！！！！！」

なんか鯨の所為でいろいろ大変なことになってきました。

続
く

呪いです（後書き）

作中の禍唄は作者の創作です。怖かったらいいなと思います。

あと・・・あの読み仮名一応リクでつけたはいいですけど。

需要あるんですかね・・・？

呪いです その2

第八十二話「ある意味本家」

「おかしいですね・・・。」

「何がだ？」

あれから禍唄を唱えること1時間。

北朝鮮は諦めて待っていました。

「呪い返しが効かないのです。」

「え・・・それは・・・。」

ロシアが呪いに強いから。その言葉を北朝鮮は喉の奥で飲み込みました。

「やはりもうちょっと強力なものを・・・。」

「てかなんの呪いを返してるんだ？」

「具体的に言うとなソコンが何回やつてもフリーズしニコ動が見れず2tthがカキコできずアニメが見れなくて外に出ると何回やつてもロシアへ行ってしまう呪いです。」

「なにそれこわい！」

これはまた日本の弱点かどうかは知りませんが鬱陶しい呪いですね。

しかし弱点と置いていてもそれが龍の逆鱗だったりするときもあるのです。

「^{いじく}蠱毒の太刀を使いますか・・・。」

「なにそれこわそう！」

「蠱毒というのは古代の巫^ふ蠱^いの術で一つの器の中に虱、蝗、蛙、蛇などを入れて殺し合わせ

最後に「もういいわ！……！」

なんか日本が段々恐ろしい方向に向かっていっているのは気のせいでしょうか。

「日本！戻ってこいお願いだから！」

「大丈夫です北朝鮮さんには使いませんから。」

「そーゆう問題ちゃうわ！！！」

「なら不動明王の呪い返し術を「やめい。」」

「それでは兇れで「だからやめいゆうたやろ！」」

もう混乱しすぎて大阪弁になっている北朝鮮。

「お願いだからやめて下さい。お願いします。」

北朝鮮はめげずに止めさせるよう頼みます。

「嫌ですよ。それに北朝鮮さんには関係ないでしょうっ？」

続
く

呪いです その2（後書き）

怪しい言葉ばかり並んでてすみません。

呪いです その3

第八十三話「日本のゲシュタルト崩壊」

「あ？何？強力な呪いを教えてほしいって？」

「はい、（色々と黒い歴史をお持ちの）イギリスさんが一番いいと思います。」

「そ．．．そうか．．．。まあ．．．別に教えてやらないこともない．．．。別にお前のタメじゃなくてだn」

「はいはい。で、例えばどんなものがあるんですか？」

「例えば．．．」

「そう言いイギリスは奥に行き何かとってきました。」

「あの．．．それは．．．？」

「ああこれは魔女狩りのときに使われた用具で犠牲者の怨念が染み

付いている道具だ。かなり効くぞ。」

「・・・・・・・・・・。」

「これは少し重いか。じゃあこれはどうだ？軽めの筈しもとだぞ？これも何百年にわたって・・・」

「いやそういうのではなくてですね・・・」

「ここでやるんだったら鋼鉄の処女か。これはものすごく怨念が籠かこっているオススメの一品だ。」

料理みたいに軽く言わないで下さい。

「いやだから拷問用具を使うんじゃないくて呪文とか・・・」

「ではこのリッサの鉄枢てつしゅうはどうだ？」

（話聞いて下さい！！！！！！）

英国紳士へんたいはなんか違う世界へ行ってしまったようです。

（もういいです。この人に訊いた私が阿呆でした。帰りましょう。）

「では失礼します」でな、これは猫の爪といって「私仕事があるんで！！！！」

日本全力疾走。

（あの人は・・・やばいですっ）

「で、戻ってきたと。」

「ああもうあんなもの見たくありません・・・！イギリスさんたらなんで家にあんなものを所持しているのでしょうか。」

「それはあいつが紳士へんたいだからだろ？」

「変態と言う名の紳士ですね分かります！」

「まあこれで分かっただろ？それに外だって出れてるじゃないか。」

「え………？あ！本当です！前はあんなにロシアへと向かうとしていたのに！」

「パソコンの方も見てみれば？」

「えっと………あっ！ニコ動にログインできました！2thも！パソコンも直ってます！」

「よかったじゃねえか。」

「ええ本当に！」

（色んな意味で良かった……！）

「でもなんででしょうか？」

「さあ？まあ直ればいいじゃね？」

「……。まあそうですね。」

くロシア宅く

「にーいさぁん・・・私はこんなにも兄さんを愛してるのにあの日本とかいう雌を慕ってるの・・・？応えて・・・？」

「いや別にそんなん」そう・・・あの雌が邪魔ね・・・。兄さんが呪わなくても私がバラバラに毀してあげる・・・。」

「遠慮しとく」兄さん？ねえ兄さん？愛しているわ・・・。だから一つになりましょうね・・・。結婚しましょう？」

「君前から思ってたんだけど人の話聞いて「そう兄さんも結婚したいのね？分かったわ。結婚しましょう？」

「いや前から言ってる兄妹だと近親「兄妹なんて関係ないわ・・・。そう、愛があれば・・・。」

「うん分かったからまずその右手のククリナイフを「結婚した暁にはしょうがないからあの雌の首をプレゼントするわ」

「いい加減に僕の話を「それとも生け捕りがいい？私兄さんの為ならなんでもするわ・・・。」

「ていうかえ」「さあ兄さん結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚血痕」帰ってええええええええええ！！！」

ベラルーシオチでした。

完。

呪いです その3（後書き）

書く前にC3読んだからこんなことになったんです！

私は悪くn

3月9日はミケの日 その1（前書き）

ボカロ口ネタです。分からない方すみません。

3月9日はミクの日 その1

第八十四話「ヤバイ」

北朝鮮が例によって例の如く遊びに来ました。

「日本。遊びにきたー。」

「みつくみつくにしてあげる　唄はまだね頑張るからみつくみつくにしてあげる」

日本が、何故か緑色のツウインテイル（ツインテール）になり、緑と黒のミニス力を着、肩を出した服を着ていました。

そう、所謂初音ミクのような格好をしていたのです。

「え・・・え？にほ・・・え？何それ？」

「今日は三月九日！ミクの日ですよ！！！！！！」

「え・・・あ、うん。」

「ということでお待ちしておりました北朝鮮さん！」

「は？」

と、日本はにつこりと、しかし何処か不吉な笑顔を浮かべながら北朝鮮の肩をがしつと掴みました。

「え．．なに．．？」

「さあ！この服を着るのです！！！」

そうして日本が出したのはヘソだしのズボンの服．．．鏡音リンの服装。

「嫌だ．．．俺は着ない．．．着ないぞ！」

「またまた。いつも女装なさっているくせに」

「いやだ、ついでにその髪も被らないぞ．．．だから着ないっておいやめくぁ wse d r f t g y ふじこーp」

「え・・・何このメール・・・。」

アメリカがいぶかしんでいます。

変なメールが来たのです。

『とにかく逃げる危ない早く、あいつがく』

「何だい？なんか危ない気がするんだぞ！」

と、このタイミングで扉を叩く者がおりました。

「え・・・なんか嫌な・・・。」

それでも出ます。

「アメリカさん？いらっしゃいますか？」

「何だ、日本か！何の用だい？」

「ふふふ。ちょっと頼みがあるんです……。」

「？」

「この服を着て下さい。」

「え……嫌なんだぞ！そんな着物と青色……茄子色のポニーテールの鬘なんて！」

そう、がくつぽいど……神威がくぼのコスプレ。

「いやまじでやめくあwse d r f t g y ふじこーp」

二夜目へ。

3月9日はミクの日 その1（後書き）

通称ボーカロイド編始動。日本がただの狂ったオタクと化する回。

九條と決めました。九條もやるよ！3月9日運動。

3月9日はミクの日 その2

第八十五話「暴走」

「え？この服？勿論いいですよ！」

日本の39暴走は続きます。

台湾が今度は餌食に・・・でも台湾は楽しそうですね。

「この縦ロールでピンクの鬘もですか？」

「はい、因みにドリルみたいに回ります。」

「あつ・・・本とだ！何かすごいですね。」

台湾は重音テトです。

「では・・・そのまま・・・」

そして日本は写真を撮りました。

「はい、おｋです。もう脱いでいいですよー。」

「あはは。結構楽しかったです。」

それは何より。

「次は・・・ハンガリーさんはどうでしょう?」

しかしそのとき日本は思っていました。

まさか、こんなことになるとは・・・

「え?この衣装?勿論喜んで!!!!ピンクのロングの髪なんてお洒落じゃないの!」

ハンガリー・巡音ルカ

「で、写真を撮りまして・・・おｋです!」

「そういえば私の他に妄想した人はいないの？」

「えっと・・・今のところアメリカさん、台湾さん、北朝鮮さん、私ぐらいですね。」

「それだけ？」

「ええ、今のところは・・・」

「本当に？」

「は・・・はい・・・。」

「女装系男子が居ないじゃないのー！ー！ー！」

北朝鮮除く。

ハンガリーはいきなり叫び、そして日本に詰め寄りました。

「そのボーカロイドの衣装頂戴！私が徹底的にしてやるわ！」

「え・・・あ、鞆・・・てか待ってください・・・」「じゃあ!!!!」

「・・・行っちゃいました・・・どうしましょう・・・まあ、大事にはならないはずですよ・・・。」

しかしその考えが甘いことを日本は気づきませんでした。

「ヨーロッパ」

「ちょっとやめてくれへん!?!? うちはそんなん着へんで! やめ」

ベルギー・Lily

「フランスさん! 何黙って見てるんですか! 早くこの人を止めてくだs」

セーシエル・miki

「お兄さんもなんか着たいな〜なんて」

「貴方はバカイトでも着ていなさい。」

「裸マフラー？まあいいけど」「誰も言っていないでしょ。普通にアイヌでいいわ。」

フランス・KAITO

「やめるですよ！イギリスの野郎を呼ぶですよ！くあwせdrft
gyふじこip」

シーランド・鏡音レン

「お姉ちゃんそんな服似合わないよぉ・・・うつ、ロシアちゃん・・・。」

ウクライナ・MEIKO

「え？その服？マジかわいいし！。何？着るん？ええよ！。ならリトモ何か着るんだし！。」

ポーランド・亞北ネル

「ちょっと俺はそんな服嫌だよ……。いややめエスト助けてやめ
t」

リトアニア・弱音ハク

因みにその頃のエストニア。

ツー・ツー・ツー・ツー……

「リトアニア……！！！！！！！！」

絶叫しました。

と、ハンガリーが次々と襲い掛かり写メを日本へと送っていきます。

その頃の中国。

「何あるかこのメールは……。『ハンガリーと日本は危ないあいつ
らは狂っている実言う俺も』意味分からんあるな。

日本が危ないわけがないある！」

と、そのとき戸を叩く者が。

「何あるかこのバツトタイミング！嫌な予感しかないある！ここは無視！ガンガンガン！！！！」ひい！？」

益々戸を叩いてきます。

「怖いある！とにかく窓から逃げ．．．！」

と、中国が窓を開けたとき！

「こんにちほ。にーに。」

「ぎゃあ ああああああああ！……！！！」

「立派な偽娘のにーにを逃すはずはありませんじゃないですか。さあおとなしくこの衣装を着てください。」

「我はそんなの嫌あるてかクリスマスのこととは忘れるよろし！」

「さあ！――！！」

「ちょ……やめるあ」

中国・猫村いろは

そしてしばらく経ったあとのベトナム宅。

「『早く逃げるある！とにかくあいっらは危ないあるよ！その名前
h』何かしら？このメール……。』」

「ベトナムさん、こんにちは……。』」

「あら日本。丁度良かったわ。一緒にお茶でもどうかしら？」

「いいえそれよりもこの衣装を着て欲しいのです。」

「え……。それって……。まさかこのメールって……。貴女まさか」

ベトナム・欲音ルコ

今田せいじもど。

3月9日はミクの日 その2（後書き）

二夜目。次が最終夜。

BGM妖精帝國と電気式可憐音楽集団。

3月9日はミクの日 その3

第八十六話「みつくみつく最終夜」

日本は満足げな顔で写真を眺めています。

「うふふ・・・これが萌えですか・・・。」

と、そのときメールが。

「メール・・・ハンガリーさんから・・・22件!？」

よくみるとそれは・・・

「え・・・写メ・・・こっこれは・・・・・・ヨーロッパの皆さんのコスプレ写真!？」

そう、初音ミクの暴走ではないハンガリーの暴走により撮られたヨーロッパの皆々様のコスプレ写真。

全員ではないですが結構あります。

「イギリスさんにフランスさんにセーシェルさん、ラトビア君にポーランドさんにリトアニアさん・・・」

流石ハンガリーさん。ばっちり基本的なところは抑えてありますね、はい。

「でも・・・途中から血飛沫のようなものが付着しているのは何故でしょうか・・・？」

それは萌え滾りすぎて鼻血が・・・ぐはあ！！！！

「でもまあハンガリーさんにはとても助けていただきました。あとでお礼を言わなくては・・・」

そして二人の餌食になった人たちは・・・

「うつ・・・確かに女装は好きだけど・・・でもこの服は・・・」

「H A H A H A ! H A H A H A ! H A H A H A ! H A . . . はあ . . .
」

「お兄さん日本ちゃんのコスプレが見たかったな〜なんて。」

「妖精さん！妖精さん！妖精さん！あはははは！！！」

「我はどうすれば・・・こんな恥が・・・」

主に男性陣の方がショックが大きかったようです。まあそれはそうですが。

まあとりあえず終わり。

のはずはございません。次回、二人が制裁さ

3月9日はミケの日 その3（後書き）

そつえば今日宮城県で地震がありましたね。

東北地方の方が大丈夫なのか心配です・・・。

こんなに大変なのに何書いてるんだ俺な制裁編

第八十七話「恐れ入りますすいませーん」

「・・・してその行為によりどれだけ男として尊厳が傷ついたかよく考えろ！」

「はぁ・・・反省はしている、だが後悔はしていない。」

「なんなんだそれは！」

「いいじゃないですか。可愛かったし。」

「そついう問題じゃないだろ！！！！！」

ここはドイツ宅。ハンガリーと日本は日本風に正座をしながら説教を受けてます。

「いやはや眼福でした・・・」

だんだん日本が変態に！何故だ！

ああ・・・作者が変態だからですか分かります。

「・・・（駄目だ。こいつら早くなんとかしないと。）」

「まあ流石にあの服はやりすぎたかな、と思ってるわ。本とにごめんなさいね」

「すごい笑顔で言われてもっ！」

「皆様方今回の件につきましては私たち一同誠に誠に反省しております申し訳ございませんでした。」

因みにすごい棒読みで。

「・・・まあ今度からはやらないように。」

しかし許してしまうドイツ。

そしてそれぞれの家へ帰ろうとハンガリーと日本が用意していると。

突然ドイツの家の玄関から銃声が！（銃声が一り響きーbyHE IWAの鐘）

ドイツは何かの敵の来襲かと身構えますが、聞こえてきたのは怒りを押し殺したような静かな声。

「・・・ここにハンガリーはいるか？ついでに日本でもある。」

そう、スイスです。

「いるが・・・どう？」お邪魔するのである。「」

日本は訳が分からず戸惑っていますがハンガリーは何故か額に汗を流しまくっていました。

「あははは・・・。こゝこんにちは・・・。」

「ハンガリー・・・？我輩の前からリヒテンを攫ってあのあと何したのであるか？時と場合によっては・・・。」

スイス激怒中。

（ハンガリーさん、何したんですか！？）

（いやちよつとボカロの服装さただけだけど・・・）

（・・・・・・誰のです？）

（・・・・・・歌愛ユキよ。）

（ああ・・・・・・）

日本、謎の納得。

「何をこそ話しているのであるか！そして日本！」

「はいいいいい！？」

条件反射で縮こまってしまふ日本。

「ハンガリーと共同で国々に何やら変な服装をしていたと聞いたの

であるが。詳しく聞かせてもらおうか。」

(やばいですオワタww)

ドイツ置き去りで事態は進行していきます。

「ハンガリーさん！」

「ええ！」

「ここはひとまず！」

「逃げるが勝ち！！！！！！」

ダッ・・・まさに脱鬼の如くとはこのことでしょうか。

「あッ・・・待つのである！」

「ちょっと追ってきたわよ!？」

「速！」

「話は終わってない！！！」

「だが断る！！！！！」

こんなときだけ一致団結。

「いやちょ……は」

都合によりカット致します

「……と、二度とこんなことはしないと約束するのだ！分かったるか？」

「す……すいません……。」

「ええ、本当に……。」

ドイツのときとは打って変わりしおらしい二人。流石スイス。

「なら分かった。ハンガリー、帰ってよし。」

「え？私は？」

「（日本ごめんっ！）なら失礼するわ！」

「え・・・ちよつと・・・」

「日本、お前にはまだまだ話すことがあるのである。」

（更に一時間後）

「大体そのはつきりしない態度が舐められるのであるっ！ただでさえ女ということから甘く見られやすいというのに

そんな態度だから無理な条約を結ばせられたり・・・」

「はい・・・（もう帰っておk？）（泣）」

まあやりたい放題やったあとの代償ということぞ。

まあ終わり。

こんなに大変なのに何書いてるんだ俺な制裁編（後書き）

地震凄かったですね・・・。

自分はニコ生でリアルタイムに見てたんですが本当にヤバイです。

犠牲者の方には心からご冥福を祈ります。

ホワイトデー？ばっくばくしてやんよ

第八十八話「リア充爆ぜろ」

ホワイトデー……。それは自分の渡した思いが相手に届いたか乙女にとっては重大な行事……

しかしここに禍々しい……。いや妬ましいオーラを出しまくっている人がいました。

「ばるばるばるばるばるばるばるばるばる……」

「新手の呪い！？」

そう、日本です。

そして遊びにキタヨ！の北朝鮮が突っ込みを入れました。

「何だよそんなオーラ出して……。」

「ばーるーばーるりばーるりらーみんなーしねばいーのにーばー

るーぱーるりぱーるりらーみんなーしねばいーのにー」

「日本……。どうしたんだ？」

「ホワイトデーとかリア充乙wwツハ！どいつもこいつもリア充しやがって！ああああもおお妬ましい！！」

日本は北朝鮮の言葉なんか聞いちゃいけません。ただリア充への思いをぶつけているだけです。

「日本……。でもバレンタインデーにチョコ作ってたよな？」

そう、確かに日本はバレンタインデーにはチョコレートを作っていました。

それを影から見ていた国々はハンカチを噛んで誰かと殺気を撒き散らしていたのですが。

「リア充してんじゃないかよー！」

北朝鮮はそう明るく言いますが日本はひたすらぼるってます。

「あのチョコは・・・アクセラータ一方通行にあげたんです・・・。」

「あくせらーた？」

「とある魔術の禁書目録インデックスのキャラです。今一番私のなかで一位なキャラです。」

「なるほど、とりあえず次元が一つ違うことは分かった。」

「だからリア充氏ね！」

「いやいや自業自得だっつーの。」

その通りです。

「だって私なんかからチョコ貰っても嬉しくないでしょう・・・？」

「いやいや十分嬉しいって！」

北朝鮮は必死にフォローしますが自虐的思考になっている日本には

届きません。

「あつ！思い出した！そういえばイギリスからこれを預かっていたんだ！」

それは綺麗にラッピングされた小箱。

日本が恐る恐る包装を開けると、まず手紙が。

『別にお前のタメじゃないけどな！チョコが偶々余っただけなんだから！その・・・普段日本には世話になってるからな・・・。これはただのお礼だ。勘違いすんなよ！』

「イギリスさん・・・」

相変わらずツンデレな手紙ですが、日本はちょっと泣きそうなくらいに感動しました。

BBSの皆さんすいません・・・今日から私勝ち組になりました・・・！

しかし次の瞬間崩壊。

その小箱から出てきたものは・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・
ダークマター暗黒物質？」

「いやチョコだろ・・・・・・・・たぶん。」

「いやこれ完璧にダーク・・・」

そう、イギリスは料理が壊滅的に下手なのです。

「やっぱりリア充爆発しろーーーー！！！！！！」

「落ちてええええええ！」

結論：オタクにとってはホワイトデー及びリア充実的行事は敵。

まあ日本はただ鈍感なだけな気がしますけどね。

ホワイトデー？ばっこばっこしてやんよ（後書き）

出遅れました。でも夢も希望も愛もない内容ですいません。

あと地震のことについては九條のあとがき見たら得します。

九條のくせにいいこと書いてやがりますんで

白昼夢

第八十九話「ホラー」

日本には八百万の神が居ると云われております。

そのため神社も沢山あります。

それこそ数えることができないほど。

中には神ではなく妖怪、魑魅魍魎の類、動物、有象無象構わず祀られているのです。

「しかし・・・こんな神社見たことありませんね・・・。」

そして今日本はある神社の前で頭を抱えていました。

その神社はなんというか荒廃していて辛うじて鳥居で判別できる程です。

しかも雰囲気清廉というよりは禍々しいというか・・・。

「こんな神社・・・でも・・・行ってみますか・・・。」

日本は好奇心が疼いて神社の中へ入ってしまいました。

中に入るとその異様さが一層分かります。

祀られているのは・・・。

「これは・・・窮奇ききうき・・・ですかね・・・？」

窮奇とは中国の神話のなかに出てくる怪物で四凶の一つとされているものです。

なので普通日本の神社では祭らないのですが・・・。

「これは益々・・・おかしいですね・・・。」

更に奥に進むと寶錢箱がぽつんとありました。

それに描かれていたのは四凶……渾沌、饕餮、窮奇、
檮杌が互いに
互いを貪りあっている姿。

日本は本能的な恐怖を感じ、行った道に戻ろうとします！

しかしその前に何かが立ちふさがりました。

それは翼の生えた虎……窮奇の姿が……。

「！」

そしてそこで日本の意識は途切れました。

最後に見たものは黒髪の誰かでした。

「ほん……日本！起きるあるよ！」

「ふあ？」

「何寝ぼけてるあるか！全く……。道端で眠ってたら轢かれるあるよ！」

「いや神社が……。」

「神社？そんなものどこにあるあるか！寝ぼけるのもいい加減にするある！」

「……。？」

完。

白昼夢（後書き）

一回書いてみたかったこういう不思議な話。

作者は妖怪とかそういう系大好きです。

ま と め

第九十話「まとめてみた的な？」

「ということであー……。」「

「北朝鮮君と日本ちゃん現時点でのストーリーを……。」「

「まとめてみましたー！」「

「いえーい！」「

「……このテンション疲れますね……。」「

「同意。」「

第一話いきなりですか？ぐだぐだ救出編

「あゝ……。初々しいですね……。」「

「作者がまだ比較的まともであつたかもしれないストーリーだな。」

「そうですね。因みに作者曰く『まだあのときはオタクネタ出してなかったです』。』だそうです。」

「今に至つてはスコア2以上のOTAKUじゃないと意味が分からないかもしれん小説になつてるといふ……。」

「……次いきますよー。」

昔は男編

「ただ戦闘シーンが書きたかつただけpy作者」

「作者はあとから男装によ日萌えになつたからそんなときはあまり萌えてなかつたらしい。」

「それであとから『もっと書けばよかったー!』と後悔したみたいです。」

「露日にも目覚めてなかったしなー。」

「白いですね〜（今と比べ）次！」

お祭り騒ぎ

「これは単純に九條から『ポート書いて！』と言われたんでさうです。」

「そんな理由！？」

「次〜。」

ブラックロシア

「このころも露日に目覚めていなかったたので後でやはり後悔したそうな。」

「ざまあwww」

「そんなこと言つと」「うゝ何をするやめt」「言わんこっちゃない。」

ギリシャと日本編

「この回は一回ぐらいトルコとギリシャを出したかったからと。あとほのぼのにしたかったらしいですけどね。」

「ほのぼ・・・の？」

シベリアへ編

「これは九條と学校で喋っていたら戦後の日本の国連入りにロシアが凄く反対していて何それヤンデレとか萌えるみたいな話になって書くことになったそうです。」

「適当だな。」

「何を今更。」

塩分命編

「これは単純に翠星石みたいな日本を出したかったとかなんか。」

「あとはバツシュ菊か？」

「そのころは目覚めてなかったですよー。」

クリスマス編

「リア充爆破地を日本宅にしようと思ったのに予定が狂ったツチ・・。
」

「これは日本の思考なのか作者の思考なのか!？」

世界お色気

「・・・恐れ入りますすみませんー」

「コメントそれだけ!？」

怒らせて編

「激怒する日本って萌えるよね作者談」

「駄目だこの作者早くなんとかしないと」

大掃除

「これは・・・北朝鮮がしてることそのまま作者ですね・・・。」

「日本人なのに!!!」

大晦日なのに・・・

「るーるるるーるるるー大晦日なのにネットしてる自分ワロスww
みたいな感情で書いてしまった回だそうです。」

「これだから作者は・・・。」

「まあ私もあんなこと言っておいて実はry」

新年です

「まあ新年の挨拶と蟒蛇うわばみな日本を書きたかっただけなんです 作者

より」

「作者はいつもちゃらんぽらんだなw」

「だから私たちもちゃらんぽらなんですよ。」

「成る程！理解した！」

コンビ二編

「これは暢気なコンビ二強盗と好色って言葉を使いたかっただけと戦うにぽんさんが書きたかったと。」

「あと亜細亜を出したかったのと。」

二次元ですね

「ここで本格的に私がオタクになりました r z」

「日本終了のお知らせが鳴りっぱなしなんだが。」

「それは気のせい、きっとそうに違いない」(いんぎつねより)「

「はぁ・・・。」

やせいのかみさま

「これはさー単純に作者が執筆するときにポケモンの作業用BGM
聴いてたからじゃね?」

「あと2ちゃんねるからヒントを貰ったとか何とか。」

携帯編

「生意気な子供が書きたかったらしいですよ。」

「ほんとにな!」

武術舞踏会編

「ネタが無かったのとテスト前で切羽詰っていたのが重なってで

きた作品です。」

「つまり苦しみから生まれた作ry」

上司編

「これはなんかムカついたから書いたと。」

「いい加減にしろ作者！」

お国に泊まろう編

「因みにタイトルは某田舎に泊まろうのパロです。」

「これはオーストリアさんを出したかったのとお泊りが書きたかったらしいぞ。」

「オーストリアさんあれから全然登場してないですよね……。」

「まあ細かいことは気にスナ。」

くデレとは編

「オタク開眼&暴走たーいむ。」

「まあ確かにな。」

パソコンフリーズw

「転んでもただでは起きないぞ！ということでネタにしてみましたし
いですね。」

「流石（無駄な所で力を使う）作者！」

節分

「節分で日本が年の数だけ豆を喰うシチュに萌えたから。」

「……………」

ネット対戦

「何となくどうなるのかなーと妄想したのを形にしたとか。」

「本当はどうなんだろうな。」

「さあ？」

鯨編

「露日ぶまいです（＾p＾）」

「それだけかい！！！！」

「あとは作者の思想は捕鯨反対、ダメ、絶対。だからです。」

後日談？編

「露日ぶまry」

「この回はほんとにそれだけだよなー。あとは中国と絡ませたかったとかか。」

「」名答！作者」

「当たっ たし！？」

呪い編

「これは完璧なる作者の趣味が暴走したやつだな。」

「作者は怪しいもの大好きですからね。」

みつくみく編

「九條と共同でやった、反省も後悔もしていない（キラッby作者」

「作者は一回タヒってくるべきだな。」

制裁編

「その前に地震が起こったんでタイトルで自分を戒めてみたらしいです。」

「中身が問題だな。」

「あとは瑞日が見たかったのか。」

「こんなときでも自制しない作者！ある意味凄い！」

ホワイトデー

「リア充爆ぜろ！」

「日本と作者の思いがまじってこつなつた。日本が言わないんで言ってみた。」

白昼夢

「ある人にはまひるのゆめって読んでほしいこのタイトル。」

「これも作者の欲望がって作者暴走しすぎw」

完

ま と め（後書き）

ということで最終回です。

本当にありがとうございました。ここまでこれたのも読者の皆様のお陰です！

では、またどこかでお会いしましょう！

四月馬鹿

特別編「四月馬鹿」

「つてえええええ!？」

「どうしたんですか？」

「いやいやいやいや俺たち最終回迎えたはずなんだけど!！」

「この間迎えましたね」

「じゃあ何でここにいるんだよ!!!!!!!」

「作者の気まぐれじゃないですか？」

「あゝ成る程そつかゝゝつてなるかあああ!!!気まぐれで終わらせられたりしたら堪らんわ!!!」

「まゝまゝ。エイプリルフル記念作品ですから。」

「むう・・・まあしょうがないか・・・」

「分かってくれましたか？」

「ああ。てかさ気になってたんだけど・・・」

「何ですか？」

「日本の胸って何カップなのか「殺しますよ？」ぶぎゃああああ！
！！！」

「では貴方に訊きます。・・・パールと金槌と素手どちらがいいですか？」

「いや俺もう既に素手で殴られたから！選択権明らかないから！」

「そつえば北朝鮮さんって髪長いですけれどやはり頑張つて伸ばされたのですか？」

「え？ああこれ？鬘だぞ。（カポッ）」

「きゃあああああああああ！！！！脱げたあああああ！！？」

「そんなに驚かなくても！？」

「ていうか髪の毛黒色じゃないですか！？」

「まあな。」

「ふええええん北朝鮮さんのほかぁーーーー！！」

「なんで鬘とっただけでそこまで言われなくてはならないんだ！？」

「だってなんかアレですし。」

「アレってなんだよ！？」

く新連載・日本さんの学園事情についてく

「ああ。俺は出てこないんだろ？」

「たぶんだそうです。この連載について北朝鮮さんはどう思います？」

「やっぱりグダグダだな。あとあへ・・・イギリスの扱いが酷過ぎる！」

「まああへ・・・イギリスさんですし？（ハッ）」

「なんで嘲笑してんの！？てかこの連載ってまたもや日本が女性なんだな。」

「作者の趣味がそうだからでしょう？まあそういうことは気にせず」

「はぁ・・・てか作者は塾とかあるのに連載抱えてていいのか？俺たちも再開するんだろ？」

「いいえしませんよ？何言ってるんですか。」

「うそおおおお！？ええええええ！！！？？」

「ほらもう時間です。」

「ええええええええええ！？」

「じゃあ皆様、また何処かでなのです。」

「ええええ．．．うゝ．．．またな——！！！！」

四月馬鹿（後書き）

ということでおまけでした。

みんな気づいてくれるかな・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406p/>

北朝鮮君と日本ちゃん

2011年4月1日17時44分発行